未踏峰

クーラ・カンリⅡ(7,418m)

―― 日中友好合同登山隊1997年の記録 ――

日本ヒマラヤ協会

The Himalayan Association of Japan

未踏峰

クーラ・カンリⅡ(7,418m)

―― 日中友好合同登山隊1997年の記録 ――

日本ヒマラヤ協会

The Himalayan Association of Japan

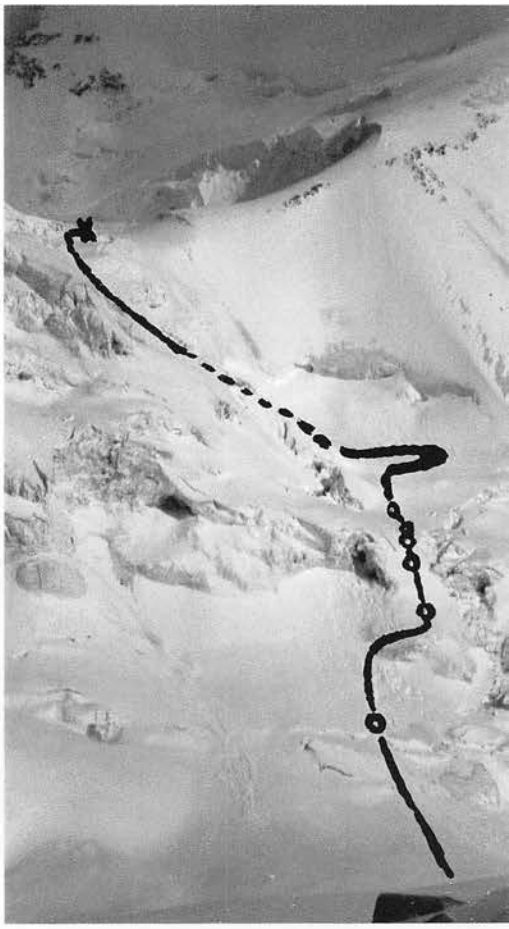
▲圧倒的な北壁を持つクーラ・カンリⅡ峰　　▼Ｃ１へ向かう日本隊５名

▲クーラ・カンリ北面　右からⅠ峰（7,538m）、Ⅱ峰（7,418m）、Ⅲ峰（7,381m）モンダ・ラより

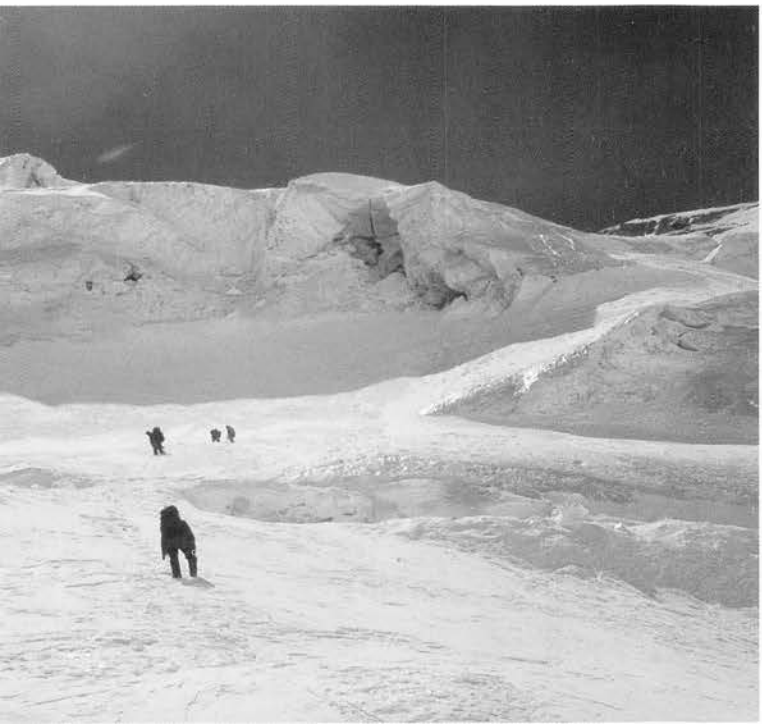
▼左端からアイス・フォールに日本ルートが伸びる

▲クーラ・カンリ南面（左からⅠ峰、Ⅱ峰、Ⅲ峰）
サイ～チュジマイ間、3,980m地点より

▼チベットルート



▼チベットルート下部



▲標高5000ｍの湖プマヨンツォの「御神渡り」

▲ＡＢＣ

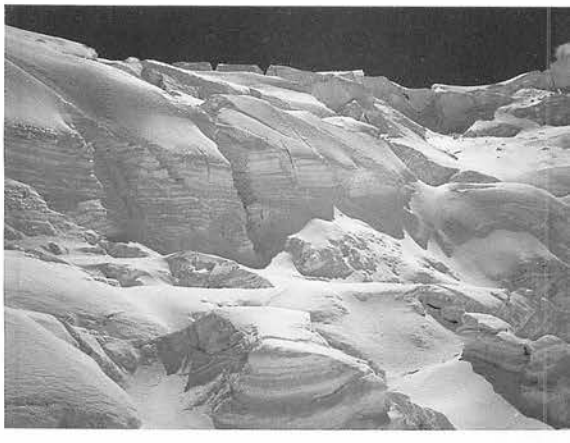
▲チュツォの人々

▲Ｃ１

▲チベット隊員にガモフ・バッグの講習会（ＢＣ）

▲チベットルート下部を登る

▲ＢＣ～ＡＢＣ間は馬が活躍



▲アイス・フォール中央部にはルートを見出せず

目　次

ごあいさつ

日中友好クーラ・カンリⅡ峰合同登山隊

隊長　山森　欣一

第　Ⅰ　部

登山報告

登山隊の概要　山森　欣一　3

合同登山隊成立の経緯　〃　5

チベットの村へ　太田　康夫　8

ベース・キャンプは何処に　樋上　嘉秀　11

快適なテントサイト有り

ＡＢＣ偵察記　宮崎　久夫　15

ＡＢＣ建設　伊藤　政義　15

モレーンのうねりを越えて

内院へ　宮崎　久夫　17

アイス・フォールの弱点を

捜して　干場　晃　18

クレバスに阻まれ、

Ｃ２建設成らず　宮崎　久夫　20

登山活動概要　22

天帝の峰に別れを告げて　太田　康夫　24

朋友们、再見！　伊藤　政義　25

ブータン国境への旅　山森　欣一　27

隊員の横顔　32

随想

二人(目)の副隊長　樋上　嘉秀　39

遠征の感想　干場　晃　40

合同登山を振り返って　太田　康夫　40

廁所(トイレ)を作る三要素　伊藤　政義　42

ＢＣまでの長い道程　山森　欣一　43

私のチベット　宮崎　久夫　45

第　Ⅱ　部

隊務報告

事務局日誌　山森　欣一　49

装　備　宮崎　久夫　49

食　糧　樋上　嘉秀　51

医　療　〃　55

通　信　干場　晃　57

記録・撮影　太田　康夫　58

環　境　伊藤　政義　59

クーラ・カンリ北面

天候概要（1997年）　61

第　Ⅲ　部

資　料

クーラ・カンリ山群登攀小史　65

西蔵登山の和文参考資料一覧　68

中国の登山家たち　79

御協力者芳名簿　86

編集後記　86

ご あ い さ つ

日中友好クーラ・カンリⅡ峰合同登山隊
隊長　山森欣一

1997年日中友好クーラ・カンリⅡ峰合同登山隊の派遣にあたりましては、皆様に大変お世話になり誠にありがとう存じました。心から御礼申し上げます。

合同登山隊の成立に至る経緯につきましては、本報告書の中で詳しく触れております。同じ「合同登山」と申しましても、10年前の1987年に実施しました「ラプチェ・カン峰」とは様々な面で異なっていることを感じました。

一つには、我々ＨＡＪ側の事情の違いがありました。ラプチェ・カン当時は、ＨＡＪ最大の目標であった「ナムチャ・バルワ」への道程の一環として位置付けられた合同登山でありました。しかし、今回は、純粋に「民間レベルでの交流」が合同登山の底流にありました。

一方、合同先であるチベット側に目を転じてみますと、1986年頃から始まったとみられる中央からの膨大な経済的支援の効果が現れ始め、ラサを筆頭に都市部における近代建築や主要道路の整備が着々と進み、これらの地域ではかつてのような様相は姿を消しました。そのことは登山隊を取り巻く関係にも敏感に反映しておりました。ラプチェ・カン隊に参加したチベット側隊員は前年の長野とのチャンツェ峰登山の経験しかない隊員がほとんどであり、一糸乱れぬ行動に奇異さえ感じたものでした。ところが今回のチベット側隊員４名は、八千メートル峰登山を何度も経験し、外国人との登山もこなして自由に行動する姿がみられました。彼等には10年前の隊員達にあった緊張感は全くありませんでした。

ともあれ、登山の現場では日中双方に大きな意見の相違も無く天候次第の登山が展開された訳ですが、クレバス対策に甘さがあり登頂を断念せざるを得なかった事は残念でありました。しかしながら、今回の貴重な体験は必ずや隊員一人一人が次の登山に生かして、充実したヒマラヤ登山が実施出来るものと確信しておりますし、チベット側にとりましても、今回のＨＡＪとの合同登山から得た貴重な体験を今後の登山に生かされてくるだろうと存じます。

反省する点は多々ありますが、今回の登山を通して、日中登山交流に些かなりとも貢献できたのではないか、そしてまた、そのことによって21世紀に延々として続く日中友好の一雫にもなったのではないかと細やかながら自負している次第であります。

最後に、お世話になりました関係各位に改めて感謝申し上げご挨拶と致します。

第Ⅰ部

登山報告
隊員の横顔
随想

登山隊の概要

1．隊の名称

日中友好クーラ・カンリⅡ峰合同登山隊（Japan-China Friendship Joint Expedition）

2．派遣母体

日本ヒマラヤ協会（The Himalayan Association of Japan　略称：ＨＡＪ）

チベット登山協会（The Tibet Mountaineering Association　略称：ＴＭＡ）

3．隊の構成

（日本側）隊長：山森欣一(53)　副隊長：樋上嘉秀(52)　登攀隊長：宮崎久夫(47)

隊員：千場晃(45)　太田康夫(43)　伊藤政義(43)　吉田健吾(24)

（中国側）隊長：多吉甫(Dojibu 57)　登攀隊長：嗄亜(Gaya 46)　隊員：多布傑(Duobujie 42)

加措(Jiatso 37)　小斉米(Xiao Qimi 32)　通訳：催雄(Chui Xiong 27)

コック：李虎民(Li Humin 37)

4．登山期間

1997年３月25日～５月23日（60日間）

5．目標の山とルート

クーラ・カンリⅡ（Kula KangriⅡ　庫拉崗日Ⅱ　7,418m）北面　チベット自治区洛扎県

（北緯28°13′東経90°33′）

6．結果

４月５日クーラ・カンリ山群北面にある「ザーリ村」にベース・キャンプ（4,250m）を建設。13日、氷河湖の下部5,400m地点にＡＢＣ建設。17日、氷河左岸5,900m地点にＣ１建設。30日、6,200mに到達するも上部がルートには不適と判断、このルートを断念。５月２日さらに氷河上流からプラトーの縁6,350mに到達したが、クレバスに遮られて登頂を断念した。

7．推進の組織

（日本側）日本・中国友好クーラ・カンリⅡ峰合同登山隊実行委員会

会長：稲田定重（ＨＡＪ理事長）　委員長：山森欣一（ＨＡＪ専務理事、隊長）　実行委員：八木原圀明、尾形好雄、寺沢玲子、中川裕、野沢井歩（以上ＨＡＪ常務理事）　登山隊隊員

（中国側）チベット登山協会

8．事務局

〒170-0013　東京都豊島区東池袋４－２－７萬栄ビル501号

日本ヒマラヤ協会　☎ 03-3988-8474

9．現地受入先

中国登山協会　北京市崇文区左安門内大街１０号　☎ 86-10-6711-8106

チベット登山協会　西蔵自治区拉薩市林郭東路８号　☎ 86-891-633-3687

10．行動概要

３月25日　成田発15時６分（ＣＡ926便）、北京着17時30分。ＣＭＡ顔副主席、張、栄両部長と会食。

26日　北京発８時49分。成都着11時13分。四川省登山協会羅秘書長、王副秘書長と会食。

27日　成都発６時25分。ラサ着８時32分。チベット登山隊成天亮氏、中国側ドジブ隊長の出迎えを受けてカタを戴く。11時、ラサ市内のヒマラヤホテルに投宿。

28日～29日　隊荷梱包。チベット側主催の壮行会。

30日～31日　ラサの裏山で高所順応。

4月1日　快晴のラサをジープ3台、トラック1台で盛大な見送りを受けて9時半出発。15時半ランカズーの雪域高峰飯館で昼食。モンダ・ラを越えてチュツォに夜中の23時到着。

2日～4日　ベース・キャンプ地選定トラブルのためチュツォ滞在。

5日　ザーリ村にＢＣ建設。(4,250m)

13日　氷河湖下部にＡＢＣ建設。(5,400m)

17日　氷河左岸にＣ1建設。(5,900m)

30日　仮称日本ルートの6,200mに到達。

5月2日　仮称チベットルートの6,350mに到達。

3日　登山中止を決定。

6日　全員ＢＣへ下山。

7日～12日　ザーリ村で待機。

13日　ＢＣ撤収。8時20分ＢＣ発。シガツェ着18時。

14日　シガツェ滞在。

15日　シガツェ発9時半。ラサ着15時。

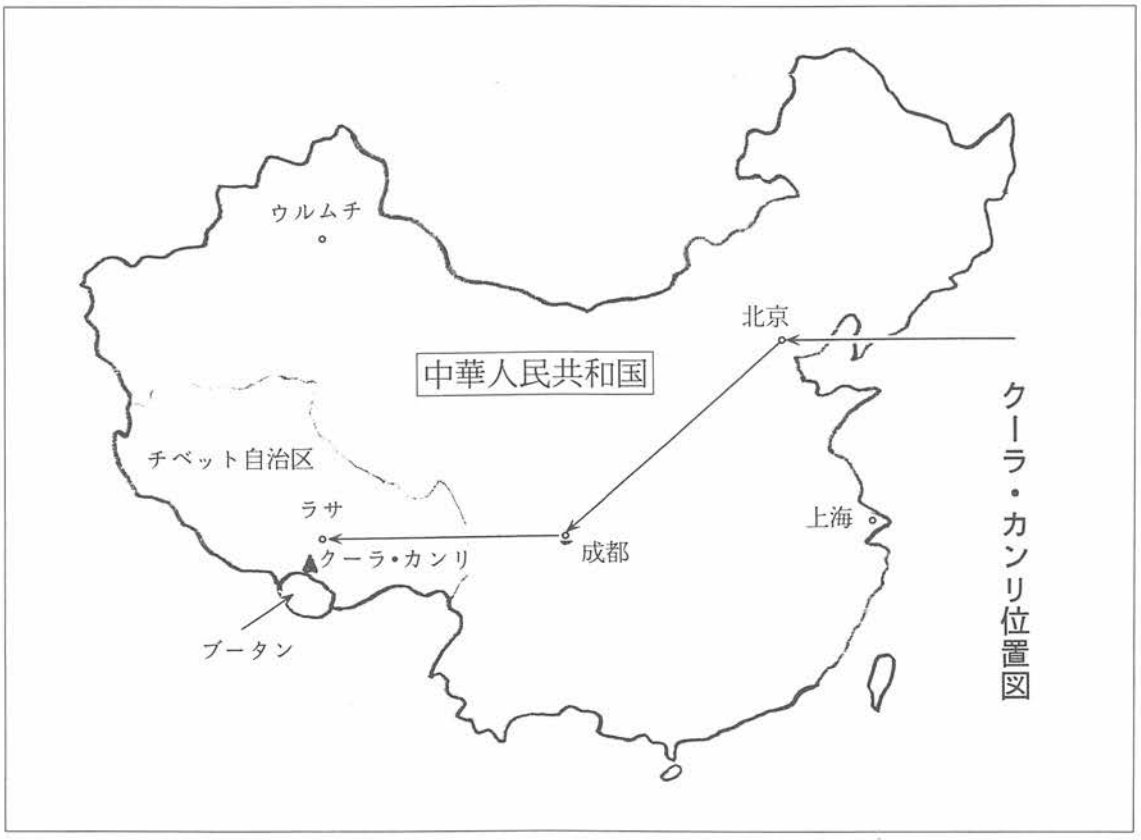
16日～19日　ラサ滞在。

20日　ラサ発9時25分。成都着10時54分。

21日　成都発9時5分。北京着11時。

22日　北京滞在。

23日　北京発ＣＡ925便にて帰国。



合同登山隊成立の経緯

◆友情の花開く

1995年４月、チベットから一通の手紙が舞い込んだ。差出人は、1987年にＨＡＪとチベット登山協会が、当時としては未踏峰の世界第五位にランクされていたラプチェ・カン峰(7,367ｍ)に合同で登山し、初登頂に成功した時の隊長チャン・テンリャンであった。その時の日本側の隊長は、私であった。内容は近況報告であったが、その中に彼の希望として、もう一度ＨＡＪと合同登山をしたい、と書かれていた。その候補の一つに、ネパール国境にあるヤンラ・カンリ峰(ガネッシュ・ヒマールＩ 7,429ｍ)が挙げられており、４月にはチャン自身が偵察に行くとも書かれていた。

ＨＡＪとチベット登山協会は、86年末に当時未踏の最高峰であったナムチャ・バルワ(7,782ｍ)登山の議定書を交わしたが、中央の理解が得られず実現しなかった経緯があった。(この経緯については91年１月にＨＡＪが発行した［神秘のグレート・ベンド　ナムチャ・バルワ］に詳細に報告されている。) このような経緯はあったものの、私とチャンの賀詞交換は途絶えなかったのである。

◆ラトナ・チュリ浮上

95年５月にラサで開かれた「ヒマラヤ登山国際シンポジウム」に招かれて出席した折に、私とチャン二人で合同登山について協議した。私は、７月にヤンラ・カンリだけではなく、同時にネパール国境のラトナ・チュリ（7,035ｍ）と併せて二つの峰で合同したい旨申し入れた。

▲当初の目標の山　ヤンラ・カンリ

いずれにしても合同登山実現の可能性が確定的になったので、10月に機関紙「ヒマラヤ288号」で隊員募集を開始したが、11月になりチベット側はラトナ・チュリに的を絞った計画を提案して来た。私は、この山をネパール側から計画している信州大学の情報を得ていたが、ネパール側の許可取得は困難ではないかと考えていたので、応募隊員数が多ければ、二つの隊を構成するつもりでチベット側に返答した。

ところが、年末になると信大がラトナ・チュリの許可取得に成功したという。しかも「合同で一回限り」の特例であるという。信大の登山時期は96年秋であり、ＨＡＪは97年春であったから、信大によって初登頂されるのは確実と思われた。このため、私は再びチベット側に事実関係を報告して、目標をヤンラ・カンリ峰だけとして合同することを提案した。96年３月には、中国登山協会からこの計画について直接チベット登山協会と協議・議定することについて了解を得た。

◆クーラ・カンリⅡ峰へ転進

相変わらずチベットから回答が無いままであったが、５月には隊員の第一回の顔合わせを行い、本登山はスタートした。そして、私は８月にラサに出向いて議定書を交換した。こうしてようやく、９月～10月にチベットのガヤと二人でヤンラ・カンリの偵察を行ったのである。(偵察結果は「ヒマラヤ306号」と「山と渓谷739号」を参照。)

偵察の結果をラサで検討した結果、私もチベット側も主にアプローチの事情から、今回はヤンラ・カンリ登山は不可能という結論に達した。私は、日本側は隊員も決定し、準備活動に入っていることを考慮して、目標を変更しても予定通り97年春

に合同登山を実施したい旨申し入れを行った。チベット側もこれを了承して目標の選定を行った。私は、山群の主峰ではないが、未踏峰であり高度も7,418mであるクーラ・カンリⅡ峰を提案し、チベット側も了承した。この時は、手元に資料がなくて、先入観として「クーラ・カンリの南面、北面は絶壁でルート無し」と思っていたので、Ⅱ峰へのルートは、既登の主峰越えとした。

帰国後、隊員集会を開いて、偵察結果と目標の変更について説明し、全員の了承を得て、引き続き準備活動を行う。同時に、ルートについて検討した結果、86年秋にＨＡＪが派遣して初登頂に成功したカルジャン(7,216m)の裾野から、カルジャンとクーラ・カンリⅢ峰(7,381m)の間にあるスノー・プラトーに登り、さらにそこからⅡ峰とⅢ峰のコルを経てⅡ峰に登頂可能ではないかとの意見が出て、Ⅰ峰経由にするかコル経由にするか、隊員の希望を聞く。多くは未知のルートであるコル経由を希望したので、早速チベット側にルート変更について申し入れを行った。(出発するまで回答は無かったが、以後日本側はコル経由で準備を進めた。)

◆副隊長リタイア

隊は、正月合宿を北アルプスで行い、成果を上げて終了したものの、下山後の96年1月3日松舘副隊長から、「年末に医師から父親の生命が、春ぐらいまでと宣告された」ため、隊への参加を取りやめたい、と申し入れがあった。事態が事態だけにこれを了承し、代わって樋上に副隊長を依頼した。こうして、北海道、千葉、東京、石川、三重、大阪、広島から参集した7名は、クーラ・カンリⅡ峰の頂を目指したのである。

◆合同登山について

かつて「合同登山」は、登山隊が許可取得の手段として用いることが多かったが、ヒマラヤ諸国を取り巻く国際政治の状況変化により、この手の合同登山は少なくなった。逆に現在では、登山隊を受け入れる国である、インドやネパールの一部の山々については、登山規則によって「合同」が義務づけられている。

今回の合同登山の発端となったヤンラ・カンリのケースは、合同でなければ登山許可が降りない山ではなかった。それでは何のために合同登山とするのか。

私の合同登山に対する考えは、既に前回のラプチェ・カン登山の報告書で明らかにしたのであるが、「登山する山のある国の人と一緒に登りたい」ことにある。

したがって今回も隊を構成する段階で、今回の合同登山は「民間レベルでの交流」を念頭に置いていることを説明し、隊員には理解を求めたのである。

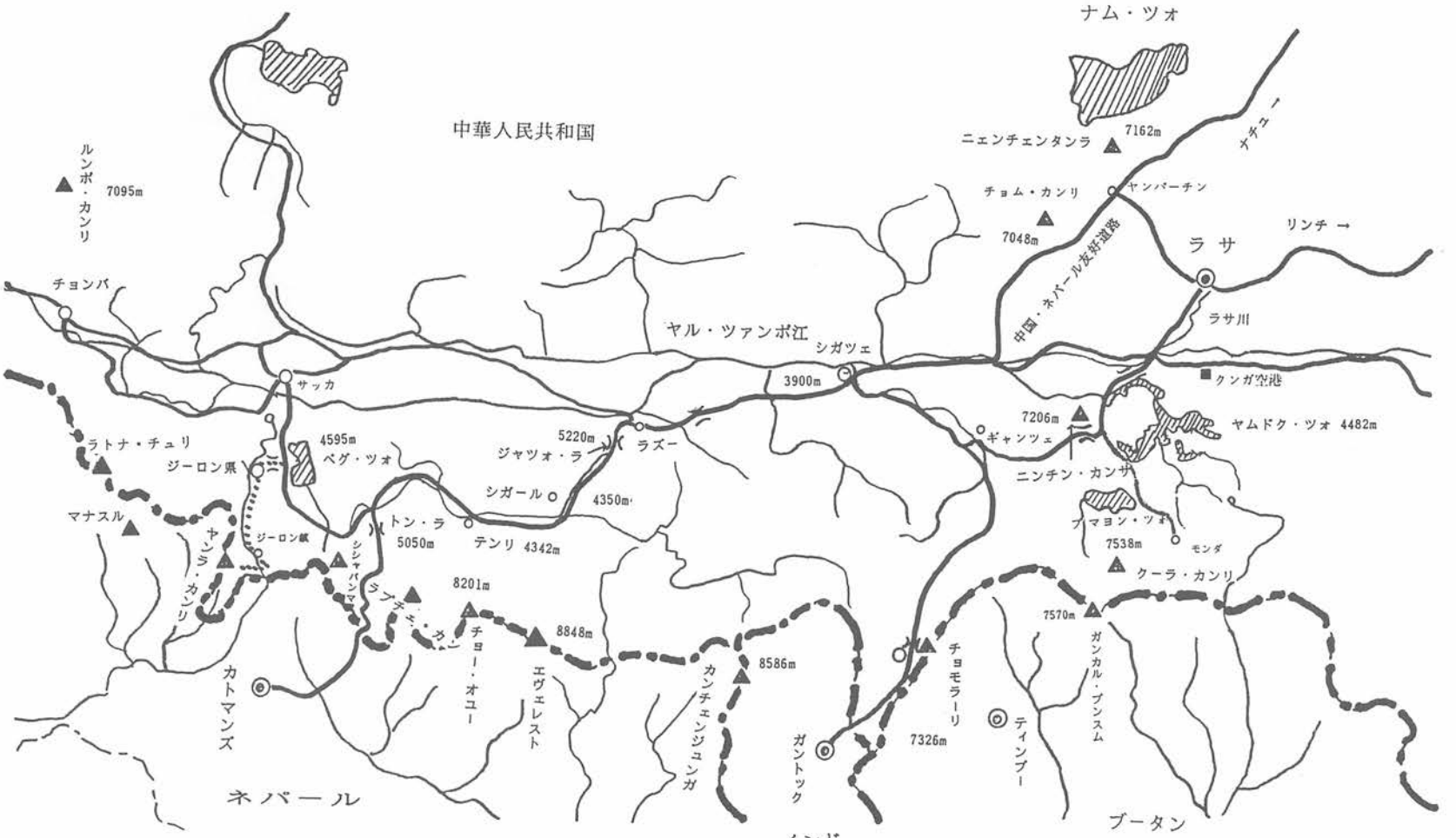
実はこのことは、参加する隊員にかなりの努力を要求することになるのである。言葉や生活環境が異なる人達が、一緒に登山することは困難であり、実を結ばせるためには相互に相当の努力が必要である。

しかし、21世紀に向けて、民族が相互に交流し、理解しあわなければ、共存することは出来ないことは目に見えているのであるから、登山の困難に加えて、合同する困難を乗り越えることによって民族の相互理解も進み、深まるだろうと考えているのである。

私は今回の合同登山について、このような思いを込めていたのであるが、それがどの程度理解されていたかは不明である。むしろ隊員個々について、今回体験した合同登山の成果については、性急に求めるべき性質のものではなく、いずれの日にか今回の合同登山の成果が実を結ぶことを期待している。　　(記：山森　欣一)

▲正月合宿　右から2人目が松舘副隊長

ヤンラ・カンリ～クーラ・カンリ周辺図



1996年11月　作図：山森　欣一

チベットの村へ

東京～チュツォ（曲措）

３月25日　前夜は隊員全員ＨＡＪルームに集合、２度目の壮行会をしていただき、やっと出発の朝を迎える。96年５月、隊員が顔を合わせ「ヤンラ・カンリ登山隊」が成立してから10か月余りが過ぎていた。準備活動を一緒に進めてきた松舘氏が参加出来なくなったのは本当に残念である。

最終ミーティングの後、11時に出発。地下鉄を乗り継いで箱崎にてチェックイン。隊荷の大部分はアナカンで送付済のため、預ける荷物は124kgだけである。13時20分成田空港着。

15時過ぎに飛び立ったＣＡ926便は北京時間17時30分北京空港に到着した。ＣＭＡ（中国登山協会）交流部の張江援部長らに出迎えられ、制限速度110km／hのハイウェイを経由して市街に入る。18時25分、韓国料理店に着くとＣＭＡ顔金安副主席らが待っておられ、歓迎会をして下さる。

宿泊は前門飯店。この夜、山森隊長はＣＭＡ曽曙生主席、李致新副主席、北朝鮮の登山関係者２名と会談したそうである。

３月26日　６時37分ホテルから車に乗り40分足らずで空港に着く。２時間半のフライトで11時15分成都着。四川省登山協会の王華山副秘書長らに出迎えられ、昼食後ラサ大酒店にチェックイン。この時見たレートは100円＝6.5419元となっていた。すなわち１元が約15.3円である。夕食は羅大礼秘書長の招宴による火鍋。食欲は十分あるのだが、あまりの辛さに食べるスピードが鈍る。

３月27日　４時半のモーニングコールで起こされ、あわただしく出発。７時にはもう眼下の風景を眺めていた。まもなく雪山が見えてくるが、まだ低い所まで雪が残っていて、山の高さやスケールがつかみにくい。しばらくたつと、ニェンチェンタンラ山脈東部と思われる広大な山域が展開し、隊長はしきりにシャッターを切る。私も、機内食にも手を付けずに、次から次へと現われる山々に見入っていた。

８時半、－２℃のクンガ空港に着陸。87年ラプチェ・カン合同隊のチベット側隊長成天亮氏、今回のチベット側隊長ドジブ氏、通訳の催雄氏の出迎えを受け、マイクロバスに乗り、川の付近以外には樹木の無い荒涼とした風景の中をラサに向かう。ラサも都会化が進み、３年前と較べて車も建物も増え、特にガソリンスタンドの増加が目立つ。空港から２時間程で登山協会の隣のヒマラヤホテル着。エレベーターが動かず、3,648ｍのここでは４階まで上がるのが結構しんどい。

午後、切手と絵ハガキを買うため、隊長以外の６人は催さんと共に郵便局と新華書店へ出かけるが、どちらも全員の必要枚数を入手する事は出来なかった。20時半頃、外が暗くなる。

３月28日　７時半頃に明るくなってくるが月はまだ輝いている。窓の外は３℃。

朝、登山協会へ行くが、倉庫の鍵を持つ人が不在のため一旦引き揚げる。３名はタクシーに乗ってラサホテルまで絵ハガキを買いに行き、他は午前中自由行動となる。

14時、再び登山協会へ行き倉庫の戸を開けてもらう。デポ品を出してチェック、整理し、シュラフやテントは日にあてる。

▲西蔵登山協会倉庫前で隊荷を梱包する

夕食後は皆、ハガキ書きに忙しい。

3月29日　10時に登山協会の倉庫に行き、1時間余りで梱包を完了。大プラパール20、中プラパール17、シート等3、となる。

昼食後、隊長以外の6名は催さんと共にパルコルへ散歩に出る。歩いているうちにバラバラになってしまったが、全員ホテルに無事帰着した。

18時から登山協会内の「登山酒家」にて壮行会が開かれる。総勢40名程。テレビ局からも取材に来ている。チベット体育運動委員会主任の姫嘉女史と山森隊長が挨拶。通訳するのは催さんである。この席で今回のチベット側隊員4人とコックの李さんに初めて会い、ボディーランゲージを交えたコミュニケーションが始まる。日本からの土産品の贈呈が終わる頃からますます盛り上り、歌と乾杯が際限無く繰り返される。日本隊員は、1名を除くと酒好きの筈であるが、この乾杯責めには参った様子だった。23時頃ようやくお開きとなりホテルへ戻る。

3月30日　朝、南側の山の上部が薄く雪化粧しているのが見える。午前中休養。午後、隊長以外の6名はラサ大橋の南の山へ順応訓練に行く。成天亮氏が先頭に立って案内して下さる。ラサ市街を見おろしながらの休憩3回を含み1時間35分かけて4,100m近いコブに到着。2名は少し遅れる。下りは滑り易く、ストックが欲しいところだ。パルスオキシメーターを使って何回かS_pO_2を測定してみるが、数値が大きく変動して安定せず、以後あまり使われなくなった。測定方法が不適当だったのかもしれない。

3月31日　午前中、隊長以外の6名はポタラへ行く。これも順応訓練の一環の筈だったが、車は裏口の手前まで坂を登ってしまった。順路に従って足早に一通り見学し、正面の石段を下ると、次は東側の市場で野菜類の買い出しである。大体のものは1斤（500g）単位の量り売りで、年季の入った竿秤が活躍している。催さんが1品目毎に安いところを探してくれる。我々の購入品と値段を以下に記しておく。

ジャガイモ	5kg	8元
ニンジン	2kg	6元
タマネギ	18個	21元
ニンニク	150g	3元
キャベツ	8kg	24元
ショウガ	1kg	10元
リンゴ	5kg	20元
ミカン	8.5kg	51元

昼食後、前日と同じ山へ順応訓練に出かける。1時間程で前日の最高点を通過。少し下って4,250m前後まで登ったところで時間切れとなり引き返す。

夕方、隊荷をトラック「東風」に積み込み、これで準備は完了した。

4月1日　大勢が見送る中、ジープ3台（トヨタ・ランクル2台とガヤ氏の北京ジープ）トラック1台でホテル前を9時40分に出発。曲水（チュスイ）から橋を渡ってヤル・ツァンポー右岸に移ると、まもなく川岸から離れて登りとなる。

ランクル2台は12時過ぎにカンパ・ラ（4,756m）着。峠の南側には、地図で見ると複雑に入り組んだ形の湖ヤムドクツォ（別名ヤムゾユムツォ）の北の端の部分が氷結して細長く伸び、その向う

▲順応訓練　ラサの街を見おろす

▲ラサ　壮行会

にはニンチン・カンサの美しい姿が見える。後続車を待って13時30分、湖岸へ下りにかかる。

4,400mのヤムドクツォの西岸を南下し、昼食場所の予定であった一軒屋に14時半頃着くが、営業しておらず通過。私のメモでは、このあたりからクーラ・カンリやカルジャンが見えた事になっているのだが、記憶がはっきりしない。その後、給油所で20分待たされ、15時半ランカズー（別名ナガルツェ）着。ミルクティーを何杯も飲み、ようやく昼食にありつく。17時出発。まもなくギャンツェへの道と別れて南へ向かう。道はそれほど悪くない。北京ジープのエンジンが不調で、応急処置に30分かかる。18時、打隆（ダロン）という村を通過。雨季に入れば湿地になりそうな所を走る。再び見えてくる湖は、あのヤムドクツォの南の部分である。道路沿いに点在する村では、干しレンガを作っている。やがて道は湖を離れて涸川の谷間に入り高度を上げていく。

19時、ロー・ラ着。高度計は5,000mを越えている。すぐ下にはプマヨンツォの湖面が広がり、その向うに西日を受けて輝くクーラ・カンリとカルジャンの山群の姿があった。宮崎氏と隊長が双眼鏡をのぞいて登攀ルートを検討する。

湖の東岸沿いに南下する。氷結した湖面には「御神渡り」のような、氷の盛り上がった線が見える。モンダ・カンリ（6,422m）の山塊が近付き、20時20分、本日最後にして最高所の峠モンダ・ラ（5,266m）を越えると、眼前にはクーラ・カンリやカルジャンの迫力ある姿が展開する。次第に暗くなる中、車はつづら折の悪路を急激に高度を下げる。1,000m程下った所で、我々の車1台が後続を待つ事になる。松舘氏提供のケーキが非常食となり、これで空腹をしのぐ。

21時25分再スタート。まもなくモンダに着き、橋を渡ってロザションチューの上流方向へ走り始める。ヘール・ボップ彗星が尾を引いているのが見える。あまり良くない道をゆっくりと10km以上は走った頃、村人に尋ねたりして行き過ぎに気付いた運転手は車をUターンさせ、やっと招待所にたどり着いたのは23時であった。現在地は朝にならないとはっきりしないが、我々の入山予定地よりもずっと西である事は間違いない。多分この村にしか招待所が無いのだろう。そして明日はいよいよBC建設。そう信じて眠りについたのであった。

（記：太田　康夫）

◀カルジャン（左）～クーラ・カンリ山群（プマヨンツォ湖畔より）

ベース・キャンプは何処に

チュツォ(曲措)～ＢＣ

４月２日(チュツォ・曇のち晴れ､夜になって小雪)

寒さに震えながらの短くて長い夜が明け、７時半に起床。昨夜見たヘール・ボップ彗星の姿が脳裏に焼きついて離れない。これを見れただけでもチベットへ来た値打ちが有るかも知れない。それにここからはクーラ・カンリＩ峰の姿がはっきりと見られ素晴らしい眺め。周りの山群も鮮やかである。

10時の朝食まで自由時間で個装の整理や葉書書き。10時40分からは共同装備の再梱包。ここからＢＣまでヤクに運ばす荷物を一頭につき約40キロの重量に調整する。30分程で作業は終了。この後昼食までの時間を利用して裏山へ隊長以外の全隊員で身体馴らしのトレッキングに出掛ける。集落の裏手の小高い平坦地を横切り、小川に出た所で小休止の後、山腹へ取り付く。日本なら何の変哲もない小山だが、高度が高いだけに苦しい。１時間程で4,760ｍ程の小ピークに登り着く。下から300ｍも無い高度である。ここからではクーラ・カンリⅡ峰・Ⅲ峰からの氷河には未だ先の尾根を越えて行かないと入れない事が分かり、宿舎へ帰ってから我々のルートは86年秋のカルジャン・ルートに変更する事を確認する。14時に下山。そんな事で今日もこの招待所泊まりである。15時からの食事の後は夕方までをチンチロリンで過ごす。

20時から夕食。その頃から雪が降り始め、やがては僅かだが積もり出す。昨夜の事を思うと随分寒そうだが、今夜は個装のシュラフをプラパールから取り出したので安眠出来そう。10時就寝。

４月３日（チュツォ・曇のち晴れ）

７時45分の起床後、粥の朝食。そうこうする内に隊荷を運んで呉れる馬方が馬共々近在から集まり出す。荷積みが始まると運び易そうな荷物の奪い合いでざわつくのは遠征時に何時も目にする光景。我々の出発に先駆けて彼等は一足先にＢＣへ向けて出発する。ルートは我々が昨日トレックした山の方角である。この時点で変だと誰かが気が付けば良かったのだが、山越えの方が馬も行動し易いとか時間的に早いとかで見過ごしてしまい、とんだハプニングが待ち構えていた。我々も10時に村長ら村のお歴々の盛大な見送りの中ＢＣ予定地へ向けて渡歩で出発する。チベット隊は後から続くとの事。昨夜ジープで走って来た川沿いの道を引き返す形で下流へと向かう。

１時間程して村の学校へと差し掛かる。ところ

▲チュツォより望むクーラ・カンリ　中央左寄りがⅡ峰、その右がⅠ峰

▼ＢＣを目ざして隊荷を積むが…（チュツォ）

▼チュツォの子供たち

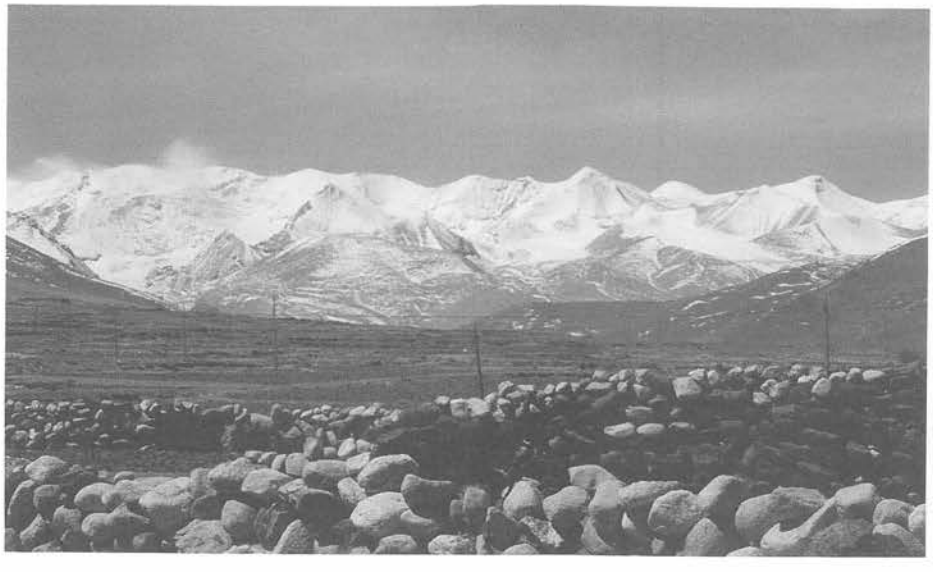
が我々よりも足の早いチベット隊は一向に追い付かない。これは変だと隊長が双眼鏡で馬方たちが向かった山の方を偵察するとチベット隊員たちは尾根を越えて我々とは全く違う方向へと向かっているらしい。急いで宮崎登攀隊長にチベット隊の所へ伝令に出掛けて貰う。

その間我々は何もする事も無く辺りを散策するのみ。しかしその内に何処からか村の若者が寄って来て手振り身振りでの国際交流となる。後で分かったのだが彼等は傍の学校の先生だった。やがては授業の休み時間の子供たちも集まって来て賑やかな事。他にも近くの女の子も傍へ寄って来て彼等の食べ物を分けて呉れたりする。その内の一人の子が着ていた服に日本の女の子の名前が書いてある。日本の古着が長い旅の果てにこの地に流れ着いたのかと微笑ましさと哀愁を感じる。

そんな思いを抱きながら待つ事３時間近く、13時半になって漸く宮崎登攀隊長が山越えで帰って来た。聞けばチベット隊は我々のルートとは全く違う場所にキャンプを設営したらしい。やがてドジブ隊長も降りて来て、我々は一旦元の招待所に戻る事になる。ドジブ隊長は今日中に戻るとかで再びチベット隊のキャンプ地へと戻って行った。

14時に招待所に帰着。さあ、それからが大変。今後のタクティクスも決まらないでどんどん時間が経って行くのに、気をきかした宿の主人が地酒の大盤振る舞い攻撃。余り強くも無いし、口当たりも良いのだが、呑む尻から注いで呉れるし、呑まないでいると呑め呑めとしつこく催促され、全員が閉口。それは酒好きの私とて同じであった。

20時半になって漸くチベット隊のドジブ隊長が招待所に戻る。どうやら話の行き違いでチベット隊と荷物は1986年の神戸大学隊がⅠ峰の登頂に成功した時のＡＢＣ地へ入ったのだ。Ⅱ峰・Ⅲ峰を



◀チュツォの西の山々、ブータン国境も近い

目指す我々は同年のＨＡＪカルジャン隊のＢＣを目指していたから大違いである。ドジブ隊長が翌朝チベット隊と隊荷を呼び戻しに行くことになり、我々はその間、招待所で停滞と決まる。

21時半を過ぎて漸く食事。ラーメンが出て久し振りに満腹感。さて後は眠りに就くだけだが、今夜も寒さを我慢しての眠りかと思っていたら布団が運ばれて来て大喜び。有るのならもっと早く出して呉れれば良いものを……。

4月4日（チュツォ・曇り）

8時に布団から起き出す。数日ぶりの心地よい眠りだった。9時にドジブ隊長が迎えに出発するのを見送る。今日は特別にする事もなく、朝食後は全員でトランプをして一時を過ごす。その後も昼食まで村落内の散策。村人が我々を珍しがるがそれは我々とても同じ事。風が強く曇っているせいも有ってか肌寒く、この地の春は未だ少し先の趣である。

昼食後も昼寝等で退屈な一日が続く。18時になってチベット隊員が招待所に戻って来る。隊荷も19時前には戻り、これで明日は間違いなくＢＣ予定地に入れそうである。

4月5日（チュツォ～ＢＣ・晴れ）

7時半の起床。9時過ぎの朝食の後、10時から隊荷のトラックへの積み込み。再確認したＢＣ予定地は車道脇らしく車で移動出来るのは有り難い。10時40分に出発、漸くチュツォの村ともお別れだ。ジープに乗れない隊員全員がトラックの隊荷の上に乗って目的地へと向かう。ガタガタ道で揺られ揺られの1時間、落ちそうになったりトラックが路肩を外しそうになったりで尻が痛いやら冷や汗を掻いたりしながら幾つもの集落を抜けて行く。この地にも待ち侘びた春の足音が近づいているらしく村の人々が長閑に農作業に勤しむ姿が眼に焼きつく。我々を目敏く見つけて遠くから手を降って呉れる人懐っこさも微笑ましい。それにしても流石に吹き曝しの荷台は寒かった。

モンダの集落を過ぎて程なく、道路がロザ川に架かる橋を左岸から右岸に渡った少し先にトラックは停車。道路の山側は南からの谷がロザ川に出合う広くて平坦な扇状地になった所である。丁度傍には我々のＢＣ用に準備して呉れたかのような程好い平坦地が田畑に挟まれて空いている。これがクーラ・カンリ北面から落ちて来る目的の谷と確認して早速全員でＢＣの設営。三張りの大型テントを並べ張り、中央のテントを食堂として山側を日本隊、川側をチベット隊のテントとする。

次は隊荷を詰めたプラパールをテントの中に運び込みながら個数を確認する作業。ところが荷物が不足している。何処を探してもプラパールが二個足りない。さあ、大変な事になったと全員大慌て。調べて見ると食料を詰めたプラパールである。昨日馬方が戻って来た時に調べた時には間違いなく有ったらしい。さては今朝トラックに荷物を積むまでに盗まれたか。山森隊長とドジブ隊長が協議して何らかの手を打つと言う事になるが、これが無いと後が大変である。それやこれやでＢＣ開きは明日に持ち越された。

（記：樋上　嘉秀）

▲ＢＣ用大テント設営風景

▲設営完了

クーラ・カンリ概念図

（作図：太田）

快適なテントサイト有り

ＢＣ～ＡＢＣ

◆ＡＢＣ偵察記

４月７日　午前８時、－８℃。風無く陽射して雲割れてくる。ＢＣを間違えるなどの手違いのため、予定より３日遅れているが、ようやくＡＢＣを偵察する日がやってきた。

８時35分、日本側宮崎、太田、チベット側ドブジェ、シャオチミと、一泊の予定なので荷物を積んだ馬を１頭連れた馬方と共に、隊長達の見送りを受けて気合いを入れてＢＣを出発した。

目の前の畑の畔道を通り、民家を通り過ぎると大きな石ころだらけの河原となり、非常に歩きにくい。私は上部は雪だと思ったので始めから登山靴を履いたが、チベット側は運動靴のため、段々と彼らに離されてしまった。

左側のモレーンには、大きな洞穴が何箇所かあり、自然の脅威を物語っている。歩きにくい河原を右に進み、10ｍほどの丸木橋を渡り岩壁の下を通り過ぎると一軒の民家に出た。岩壁にはチベット文字が書かれており、さらに上部に行くと大きな洞穴があって、そこへ続く道が見えるので、多分その昔この洞穴の中でラマ達が修行したのではないかと思われた。

ここから河原を離れ、斜面を登り切ると広いカールに出た。左側の丘状の下部をその中間部にある大岩を目安にして進む。暫く歩くとヤク道となり丘の上に出る。丘には、石を積み重ね動物の毛を巻き付けた枯れ木が差してある一種のタルチョーが所々にあり、それが格好の道標となり大いに助かる。上に進むとこのタルチョーがさらに大きくなっていた。

その大きなタルチョーから左側に行く。右側から落ちる落石に注意しながら進むと、大きなカルカが二つあった。チベット隊員は目の前の尾根を登っていた。後で、この尾根はクーラ・カンリＩ峰から降りていることが分かった。

この辺りからチラホラと雪が出てきた。尾根の一番左に見えるピークにケルンが見えたので、そこを目指して登るが、何時のまにかチベット隊員を見失った。ケルンの下にも彼らのトレールは無かったが、尾根の左側には石積みの道があるのでこれを使って凍結した河原に降りた。

その先は広い平地となっており、ここが1986年にＨＡＪが派遣したカルジャン隊の報告にある氷河湖らしい。そう思うと俄然足取りも軽くなる。しかし、この広い雪原を歩いても歩いても、前を行っている筈のチベット隊員の姿が見えない。段々と焦って来る。雪原の真ん中程に小さな丘があったのでそれに登って見ると、彼等は既にこの雪原を通り越し、遥か前方のモレーンの上にいた。

私は、カルジャン隊と同様にこの雪原にＡＢＣを建設するつもりでいたが、チベット隊員が前に進んでいるので、左側のモレーンの谷筋を通り、上に登るとチベット隊員と馬方がいた。13時50分。

モレーンの上は、台地となっていて雪崩や落石の心配もないのでＡＢＣとした。標高5,400ｍ、水は10分ほど下の氷河湖（注：地図上の氷河湖の下流の小さな池）から汲む。ＢＣから12.5㎞。チベット隊員は、今日ここに泊まって明日上部を偵察すると言うが、私達はＢＣに降りる事にした。14時50分ＡＢＣ予定地発、17時30分帰幕。

（記：宮崎　久夫）

◆ＡＢＣ建設

４月６日　晴れ　扎日（ザーリ）の村はずれに大型テントが出現したとあって、村人がテントの中をのぞく。村人にとっては、見る物すべてが珍しいのであろう。なかなかテントから立ち去ろうとしない。我々は、村人がのぞくなか、ヤクに運ばせる荷を20㎏に作り替える作業に取りかかる。明日は、日本隊２名、チベット隊２名、ＡＢＣの偵察に出発することが決まり、日程の遅れを取り戻そうと皆張り切っている。4,250ｍでの作業は息が切れる。日本で借用した無線機の使い方、ガモ

フバッグの使い方を、チベット隊員に教える。大テントに、中国旗、日の丸が旗めく。胸にジーンとくるものがあり、中国の地にいる事を改めて感じた。午後からは、東風が砂ぼこりを巻き上げ、蓋のしてない、あらゆる物がジャリジャリで、咽もほこりっぽい。夜になるとテントの中でも冷える。マイナス気温である。その夜はＢＣ開設の祝宴であった。

４月７日　くもりのち雪　曇ってはいるが、日本隊の宮崎、太田、チベット隊の小斉米（シャオチミ）、多布傑（ドブジェ）、案内人の馬方の５人でＡＢＣに向けて偵察隊として出発した。残りの日本隊４名は、4,895ｍのピークまで順化活動をする。帰りには雪がちらつき出した。偵察隊が気にかかる天候である。我々は順化活動をすましＢＣで待つ事数時間、日本隊２名と馬方がＢＣへ戻ってきた。チベット隊２名はＡＢＣにて泊まるとの事である。雪は本降りの気配を見せる。

４月８日　くもり時々晴れ・小雪　朝起きると５～10㎝程度の積雪をみる。昨日とは違った景色で、さみしい感じさえする。大テントなので寒い。何よりありがたいのはコックの李が持ってきてくれる温いコーヒーと開水（湯）である。今日はくもってはいるが、ＡＢＣまで高度順化に出かける。昨日登った高さぐらいは体調も良く順調であったが、ＡＢＣに近づくにつれ足が重く歩幅も小さくなり、呼吸も苦しく、あきらかに高度障害である。ＡＢＣ手前で引きかえす。ある程度高度が下がると、幾分楽になるのがよく感じとれた。

４月９日　晴れ　今日はすばらしい天気。まわりの景色は白一色で、５㎝程度の積雪がある。空の

▲ＡＢＣに向かうとⅡ峰が姿を現わした

▼ＡＢＣへの荷上げは馬で

青とのコントラストがすばらしい。今日もＡＢＣへ向けて順化活動に出かける。顔、唇が日焼けすると後々大変なので、日焼け止めクリームを役者ほど厚くぬったのに、顔がひりひりする。日本の山と違って空気が乾燥しているのでクリームが眼に入ったりしないのはたすかる。すばらしい雄大な遠望である。昨日よりは気持ち良くＡＢＣまで往復する事が出来た。ＢＣでは、相変わらず村人が入れ替りのぞきにやってくる。今日一日サングラスをしていたのに眼が痛く、眼グスリのお世話になった。４月10日　晴れ　連日行動したので、今日は休養日となる。天気も良く風も弱いので洗濯をする。又、ＡＢＣへ荷上げするプラパールを再度30kgに整理しなおす。ヤクの頭数がきまっているからなのであろうか…。我々は指示にしたがう。午後からは風が強くなり砂ぼこりを巻き上げる。午後になると決まって風が強く吹く。泥棒がみつかったという事で、通訳の催が何度となく我々のテントへやってくる。泥棒は６人いたそうである。

４月11日　雪、明るくなるとあちこちから馬方が大テントへやって来た。荷上げはヤクと聞いていたので意外である。雪が激しく降り出した。今日は天候が悪いので中止となる。気温が高いので降っているのに積らない。今日は何もする事がなく外を気にしながら本を読んで時間を過ごす。チベット隊のテントへ公安がやって来た。盗まれた荷物を持って来たのである。一部食べられている物もあったが大部分は返ってきた。なくなった食糧を予備食等で梱包したので、再々度梱包のしなおしである。忙しくなってきた。

4月12日　晴れ　今日はすばらしい天気。昨日からの雪で、5㎝程度の積雪である。昨日一日降り続いたのに意外と積雪はなかった。上部はかなりあるのでは…。天気はＡＢＣへの移動には申し分ないのだが、雪が深いため馬が上がれないので、今日も中止、休養日となる。暖かい天候なので思い切って頭を洗う。水は冷たい。寒い。

4月13日　晴れ　明るくなると馬方が集まって来た。中にロバもいる。ロバも含めて20頭。馬方による荷物の振り分け、手際良いものである。強い馬は60kg以上を持つ。我々は軽いザックで先に出発するが、すぐに追いつかれてしまう。急な斜面も力強く登る。5,000ｍを越えると雪が深く、目的のＡＢＣまで上がってくれるのか、いささか心配になる。馬を休ませている所から動こうとしない…。馬が動き出した。1時間以上もの長い休みだった様である。石ころだらけの所でも結構行くものである。ＡＢＣは砂地（雪が解けてわかった）で安全なすばらしい所であった。これ以上の所はない。テントの設営、荷物の整理、トイレの設営、5,400ｍでの作業は息が切れる。今日は良くねむれるぞー。

▼ＡＢＣ風景

（記：伊藤　政義）

モレーンのうねりを越えて内院へ

ＡＢＣ～Ｃ１

4月15日　ＡＢＣを8時に出発。モレーンを5分ほど登ると、左下に大きな氷河湖が見える。全面氷結したその姿は神秘的ですらある。氷河湖の先は大昔から長い時間をかけて作り出された氷河があり、その中にはスノー・ペニテンテスと呼ばれる三角形の氷柱が続いている。

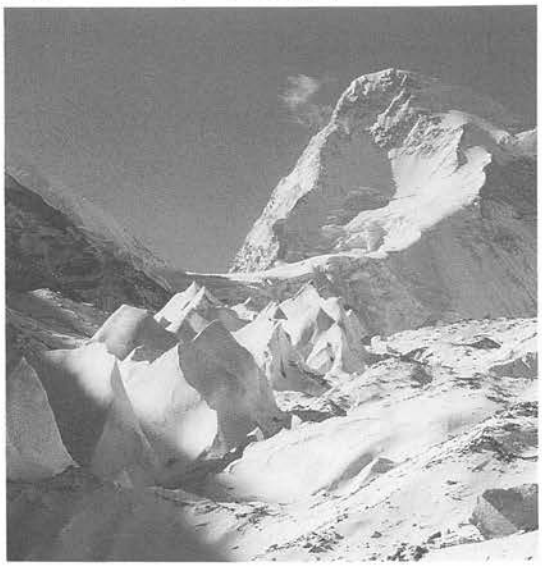
これを横目で見ながら、うっすらと積もった雪の上を歩くのだから少々疲れる。氷河湖を過ぎて左岸寄りにルートを採り、クーラ・カンリⅠ峰から派生している尾根の下部を、落石に注意しながら進む。氷河内のスノー・ペニテンテス寄りはルートにならないので、遠回りでもモレーン上に安全なルートを作りながら赤旗を立てて行く。

左にカルジャン北峰を見ながら登りつめて行くと歩き易くなってきた。視界も効くようになって、前面にはクーラ・カンリⅠからⅡ、Ⅲ峰が大岩壁の上にそそり立っており、左にはカルジャン主峰が雄々しい姿で峻立している。絶景である。

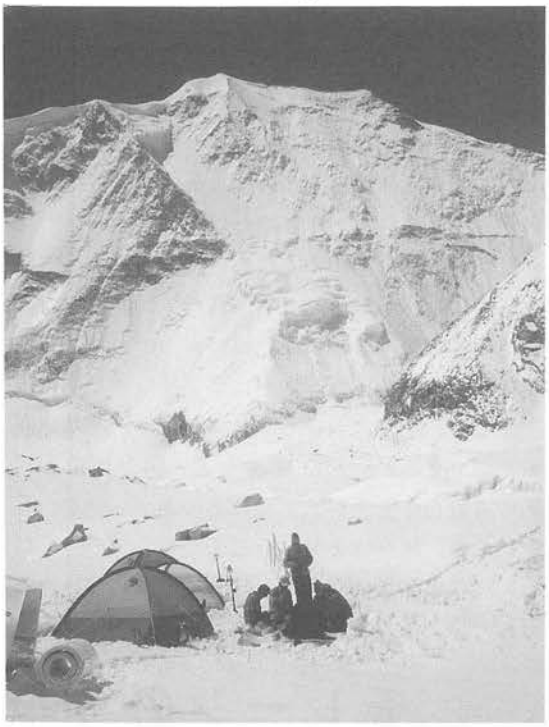
▲Ｃ１へのルートからＡＢＣ上流の氷河湖を俯瞰

▲Ｃ１偵察

▼スノー・ペニテンテスとⅢ峰



▼C１とクーラ・カンリⅠ峰



Ｃ１は、氷河左岸寄りの小高いモレーンの上に建設する。ここは両側が氷河となっていて、クーラ・カンリⅠ峰から発生する雪崩は右の氷河に、Ⅱ、Ⅲ峰からの雪崩は左の氷河に落ちるので、雪崩に襲われる心配は無いが、テントを張るスペースが少ないのが難点である。標高5,900ｍ、ＡＢＣから6.5㎞。

（記：宮崎　久夫）

アイスフォールの弱点を捜して

Ｃ１～日本ルート

▲「日本ルート」に向かう干場・伊藤パーティー

４月29日　晴れ。Ｂ隊樋上氏体調がすぐれず伊藤と干場で日本ルートをやってみる。日数も少なくなりあせりの気持ちはないとはいえないがとにかく一歩でも高く登りたいものだ。日本ルートはＣ１より幅1.5㎞の氷河を渡ったところよりはじまりアイスフォールをまわり込みながらカルジャン直下のプラトーに出るルートである。

ＡＭ９:08出発。氷河には70㎝ほどの新雪がある。その下のクレバスを確認するにもストックでは短かすぎ、竹竿ではほそすぎて使いものにならない。目だけがたよりの前進。クレバスに落ちたら落ちたで伊藤氏がついていると思ったらとにかく前に進むだけ。アイスフォール帯をくねくねと５ピッチルートを伸す。12:00頃、Ｃ１と交信中に突然ドーンという音にびっくりする。カルジャ

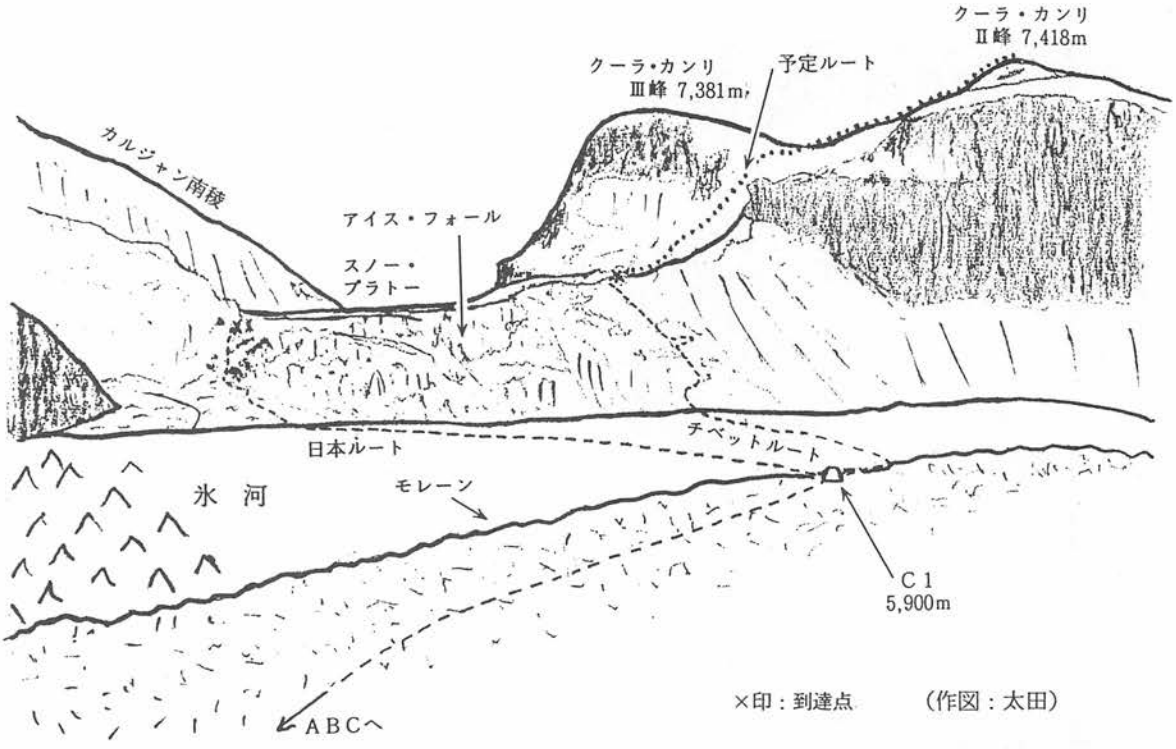
ンの上部から雪崩だ。雪崩はスローモーションを見るようにカルジャンからこちらに向って白い煙をあげている。とにかく大きな氷の陰に避難しなければと思う。伊藤氏は余裕でカメラをとり出す。荷物を持って伊藤氏に逃げるぞと声をかける。間もなくＣ１より雪崩は大丈夫との連絡。ほっとして昼食を取る。ＡＢＣから見たルートを思い出しながらルートを伸す。３ピッチ伸ばしたところで引返す時刻なので引返すことにした。Ｃ１との高低差は125ｍ。苦労したわりにはあまり高さをかせげなかったと思う。

Ｃ１ＰＭ４:00着、Ｃ１には25日の交信でＢＣの山森隊長に頼んでおいた日本製のキャスターが着いていた。チベット隊員があげてくれたものだ。おいしいたばこに感謝しました。

（記：干場　晃）

▼アイス・フォール、日本ルート１Ｐ目

クーラ・カンリⅡ峰ルート図



×印：到達点　　（作図：太田）

クレバスに阻まれ、Ｃ２建設成らず

Ｃ１～チベットルート

夕食も終り自分達のテントに戻り気持良く横たわっている時、となりのチベット側の隊員が私のテントに来て、ガヤ登攀リーダーが私を呼んでいるので来て下さいとの事なので、私は彼らのテントに行った。真中に座っているガヤがＣ２へのルートを決めたいと言う。私はＣ１に上がってから現場を見て決めたいと言うと、彼らは今決めたいと言う事なので私はすぐ自分のテントに戻り、1986年のカルジャン隊が撮影した写真を持って再び彼らのテントに入り写真を見ながら検討をし、その結果、第１案としてチベット側が主張するⅢ峰に一番近い下部から取り付くルート、第２案が我々の主張するカルジャン側から回わり込むルートに決まった。

登山の前線基地とも言えるＣ１を建設し、いよいよ本格的な登山活動に入り、もう一度彼らとルー

▲チベットルートは中央の氷壁手前を左上する

宮崎様

1997.4.26　ＢＣにて　山森

昨日、南からクーラ・カンリを見ることが出来ました。Ⅱ峰はⅠ峰を圧倒する姿でした。Ⅱ峰は稜線を登るようになると思いますが、南から見るとⅢ峰よりはるかに傾斜がありました。Ⅲ峰は南側に雪庇が出ていました。

さて、登山も終盤になりました。皆も気が気でないでしょうが、あせらず機会を待つしかないと思います。終盤になると、どうしても計画どおりには行かないと思いますが、何事にも柔軟な考えで当たって下さい。

変則的な頂上アタックになった場合（たとえばキャンプ数を減らしてＣ２から直接アタックなど）アタッカーは、体調の勝れているメンバーを当てることは当然ですが、必ず、変則的であることを本人が了解してメンバーになることを守って下さい。

アタックには、必ずビバーク用具（特にツェルト）を持参させて下さい。どんなパーティーでも必ずです。

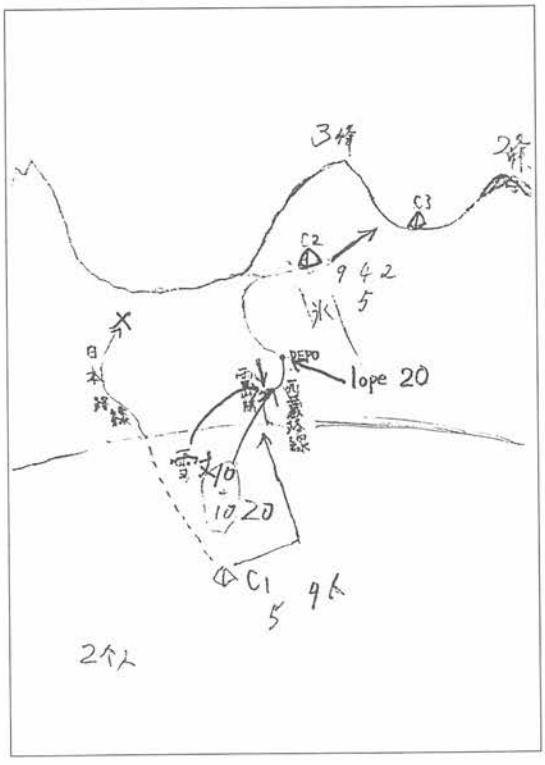
不調者は、無理して上に上げても良くなる訳はないのですから下へ降ろして、違う任務を果すようにして下さい。

これからは、メンバーの組み替えが頻繁になることと思います。本人達に充分説明をして、組み替えて下さい。決定権は全て宮崎に委任してありますので、私に相談する必要はありません。二歩で行ける所も三歩で、周りをよく見渡して、クレバス、雪崩など充分考えて行動して下さい。

▲無線交信がうまくいかないためＢＣの山森隊長からＣ１の宮崎登攀隊長に届けられた手紙

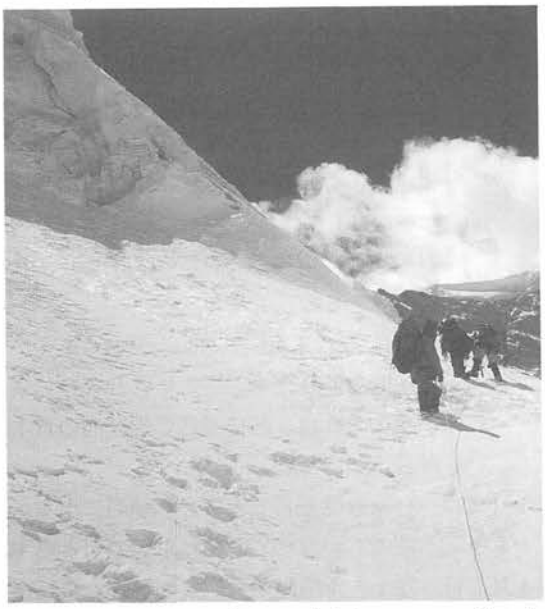
トについて協議するが、結局彼らの主張する氷河上流のアイス・フォールから取り付く事になった。このルートは、C１から15分ほどモレーン上を歩き、取り付きに一番近い氷河を横断する事約700mで到達する。氷河上であるが、一転してホワイト・アウトになると身動きもできないので、標識は50m置きに立てる。まるで大雪原のような錯覚に陥る。取りつきの下部は雪壁で周りにはデブリがあり少々心配ではあるが、日本側ルートも不適だった為、今はこのルートしかないのである。雪と氷のミックスした雪面にスノーバーがかろうじて入る堅さである。西蔵隊のドブジェ隊員がトップで登る。この雪壁を４ピッチ登り右へトラバース気味に懸垂氷河を回わり込む。氷の上にうっすらと雪がついている傾斜60度の氷壁を登りきるとゆるい斜面のプラトーにたどり着く。先行するチベット隊員２名はチョモランマ、シシャパンマの登頂実績があり高度にも体力も強く黙々とラッセルをして行く。プラトーにあるヒドン・クレバスを右に左に迂回しながら進む。再び傾斜60度の雪壁を４ピッチ登るとカルジャン主峰とクーラ・カンリⅢ峰の間にあるコルとなるプラトーの縁にたどり着いたが、この縁には大きなクレバスが口を開けて横たわっていて向こう側に渡ることができず、ただ茫然とクレバスを見つめる。残念無念ではあるが、このルートも断念せざるを得ない。ルートを途中まで下り、チベット側の登攀隊長であるガヤと別のルートを検討する。チベットルートよりさらに氷河上流に、スノー・プラトー上部に続くダイレクトな氷壁があるのだが、降雪があると100%なだれることが分かっているのでルートとしては使えないと、双方共見解が一致した。そうなると北側からⅡ峰を登るルートは無かった。こうして我々はC２を建設する事ができず、6350mに到達したのを最後にクーラ・カンリⅡ峰合同登山での登頂を断念する事になった。

（記：宮崎　久夫）



▲C１で日中協議に使ったノートの一頁

▼チベットルート下部



▲５月２日クレバスに阻まれて下降する

登山活動概要

4月5日　ザーリ郷の公路脇、標高4,250mにＢＣ建設。隊荷の一部盗難が判明する。

4月6日　パーティーの編成を決定。（Ａ：宮崎、太田、伊藤、Ｂ：樋上、干場、吉田）

チベット側にトランシーバーとガモフ・バッグの使用講習会を行う。夕食時、ＢＣ開きとなる。

4月7日　宮崎、太田、ドブジェ、シャオチミが馬一頭を連れた馬方と共にＡＢＣを偵察。チベット隊員２名はＡＢＣ泊。他の日本隊員は順応行動。

4月8日　日本隊員６名でＡＢＣへ順応に出るが不調者もいたため３名は手前で引き返す。

4月9日　樋上、干場、伊藤、吉田がＡＢＣ往復。

4月10日　上部に上げる荷物の再梱包。

4月11日　馬による荷上げの予定であったが、降雪のため中止。盗まれた隊荷の大部分が返って来た。

4月12日　好天であったが、チベット側が全く動かず停滞。

4月13日　両隊長を除く全隊員10名と通訳がＡＢＣへ移動。荷上げには馬19頭、ロバ１頭を使い5,400mにＡＢＣを建設。

4月14日　Ｃ１偵察のため宮崎、太田、ガヤ、ジャツォがＡＢＣから5,800mまで到達した。

4月15日　ＡＢＣから宮崎、太田、ドブジェ、シャオチミが先行し、残る日本隊４名も後を追い、Ｃ１（5,900m）を往復した。

ＡＢＣからＣ１へ荷上げするためポーター６名がＡＢＣに登った。

4月16日　樋上、干場、伊藤はＣ１を往復。（この日からパーティ編成をＡ：宮崎、太田、吉田、Ｂ：樋上、干場、伊藤に変更）

ジャツォが６名のポーターを連れてＡＢＣからＣ１へ荷上げの後、ＢＣに下る。

4月17日　ＡパーティはＣ１入りし、他は休養。ポーター９名がＡＢＣ入りする。

4月18日　ＡＢＣからＣ１へ12名のポーターによって荷上げ完了。

Ａパーティは氷河を左岸から右岸に横断して、スノー・プラトーへの取りつきであるアイス・フォールの下に到達し、氷河下流からアイス・フォールに取りついた。（日本ルート）

Ｃ１に向かったＢパーティは伊藤不調等のためＡＢＣに戻る。

4月19日　Ａパーティとチベット側３名で、氷河上流からアイス・フォールに取りつき、固定ロープを９本張り、6,150mに到達した。（チベットルート）

4月20日　Ｃ１は出発準備を整えたものの、降雪のため停滞となる。ＡＢＣも停滞。

4月21日　降雪のため全員停滞。Ｃ１は30㎝。

4月22日　ドピーカンであるが、昨日の降雪のため全員停滞。Ｃ１では長時間日中交流が行われ、多量の酒が消費された。

4月23日　昨晩またしても降雪。日中協議の結果Ｃ１メンバーはＡＢＣへ下山。ドブジェを除くチベット側３名はＢＣまで降りる。

4月24日　上部キャンプ休養。夕方ラサからＣさん一行がＢＣを訪れる。

4月25日　上部キャンプ休養。山森隊長はＣさんらとクーラ・カンリ南面を往復。（この報告は別稿を参照。）

4月26日　ＡＢＣの両パーティはＣ１へ移動。ジャツォとシャオチミは馬１頭を連れてＢＣからＡＢＣへ登る。

4月27日　Ａパーティはチベットルートに取りついたが、下部の固定ロープ４本は雪崩によってスノーバーと共に流されていた。宮崎、吉田が、これを補修しながら前回の最高到達点まで登る。Ｂパーティは取りつき点まで往復した。

4月28日　昨夜から朝方の降雪のためＣ１は停滞。

4月29日　干場、伊藤は、日本ルートに取りつき、6,100mに到達。Ａパーティは休養。樋上は体調を崩したためＡＢＣに降りた。

4月30日　Ａパーティは、日本ルートに取りつき、6,200mまで到達したものの、ルートとして不適と判断して撤収した。Ｂパーティは休養。

5月1日　昨夜の降雪で壁に新雪がありＣ１は停

滞。チベット側もＣ１に全員揃う。

5月2日　チベット側の４名が先行し、宮崎、干場、伊藤が荷上げしてチベットルートをトライし、6,350ｍのスノー・プラトーの縁に到達したが、クレバスに阻まれて下降。両登攀隊長の協議で登頂断念を決定。

5月3日　ＢＣでの両隊長の協議で、正式に登頂断念を決定。ガヤ、干場、伊藤はＡＢＣへ降りる。宮崎、太田は、チベットルート下部に残る固定ロープを回収。

5月4日　太田、吉田で氷河上の標識を回収。ポーター13名がＡＢＣへ登る。ガヤＢＣへ。

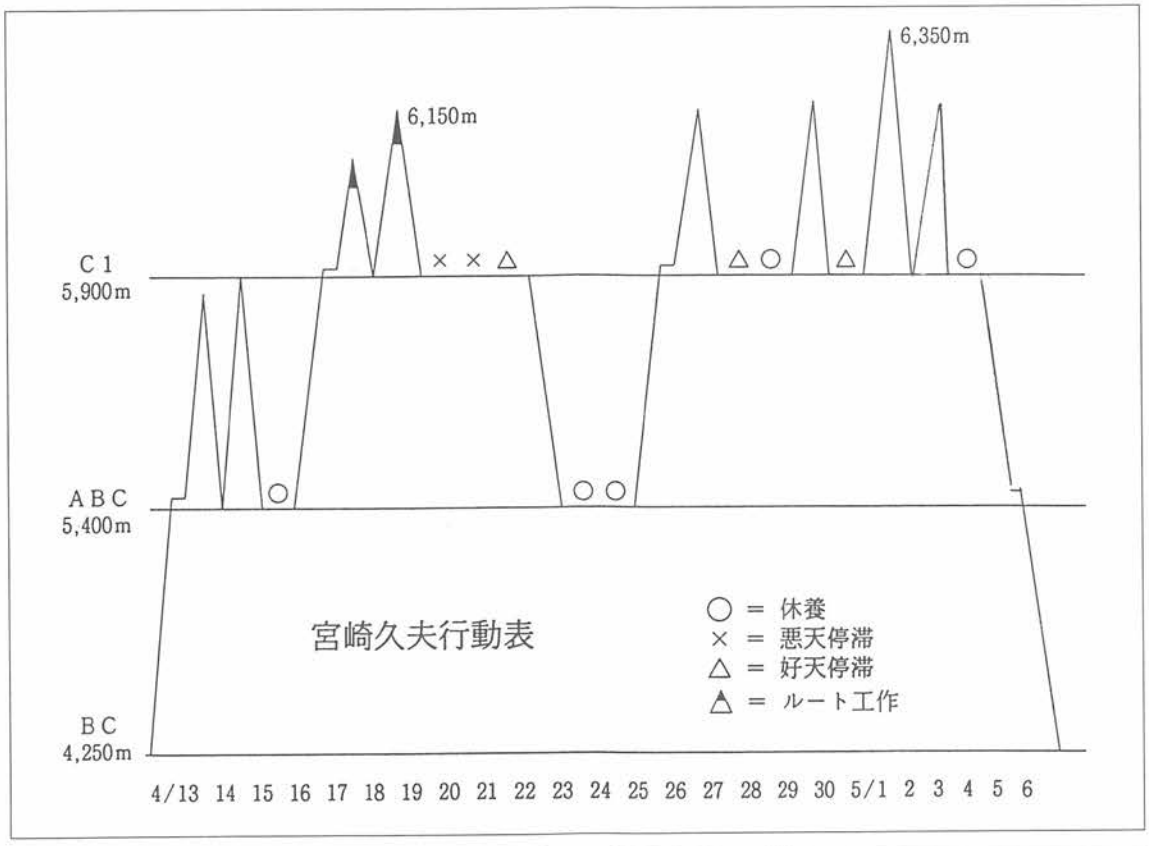
5月5日　Ｃ１を撤収してＡＢＣまで降りる。

5月6日　ＡＢＣを撤収。（馬15頭使用）全員ＢＣに下山。

5月7日～12日　ＢＣにて時間待ち。ラロン寺見学等。

5月13日　ＢＣ撤収。

（ヒマラヤ310号掲載の山森隊長の文を一部要約：太田）



▲Ｃ１より見るカルジャン　7,221ｍ

▲ＢＣの対岸より見るゴウラカ・リ　6,497ｍ

天帝の峰に別れを告げて

ＢＣ～ラサ

５月６日　ＡＢＣを撤収し、全員ＢＣに下る。山森、ドジブ両隊長とコックの李さんに迎えられ、馬で下ろした荷物を大テントに運び入れる。

夜は宴会となり、隊員は自慢の喉を披露したり自慢でない喉を披露させられたりした他、山森隊長の十八番「黒田節」、ドジブ隊長の軽やかな踊りも出て盛り上がる。

翌日からＢＣ撤収予定の13日まで時間はたっぷりと有り、この間の自由時間の過し方は、個装整理、洗濯、近くの河原での石探し（箸置き等の土産用に良い石を厳選）、周辺のささやかな探検、撮影、民家訪問、飲酒、雑談、読書、昼寝等々、さまざまであった。

８日には全員で装備のチェック、整理。テント等を乾かし、不要物を選り分け、空きカンや空ボンベは潰し、ゴミを燃やす。村人も手伝ってくれる。周囲の畑では麦や豆が順調に育っている。

また９日にはガヤ氏のジープに乗せてもらい、ザーリより数km下流の村にある、建立されてから千年たつというラロン寺を訪れる。確かに寺の前には樹齢千年くらいありそうな広葉樹の巨木が何本か立っていた。

撤収前日の12日、ザーリ郷の書記他、数人の幹部がトラクターに乗ってＢＣを訪れ、宴会が長々と続く、見物の村人や子供も多勢集まり、大変なにぎわいである。李さんはブタやニワトリをさばいて腕をふるい、日本側からは袋入りの赤飯を出す。ラサからジープ２台とトラック１台到着。

５月13日　６時前、暗いうちから撤収作業開始。ゴミは前日までにかなりの量を燃やしたが、まだまだ出てくる。大テント３張りをたたみ、生ゴミ用の深い穴やトイレを埋めて、荷物を車に積み込む。お世話になった村人に見送られて、８時20分出発する。

モンダを通過しモンダ・ラに上ると、クーラ・カンリ、カルジャンが青空をバックに眩しい。

プマヨンツォ湖岸を北上する車からは、左手遠くにブータン国境付近の山々が次々に見えるが、詳しい地図が無く山名はわからない。せめて写真を撮っておきたかったが、先を急ぐ車は止まらない。ロー・ラを越え、これらの山々が見えなくなって間もなく、皮肉な事にパンクのためストップとなる。

ランカズーの手前で、北京ジープとトラックはラサ方面へ、日本側７名の他にドジブ隊長と催さんが乗ったジープ２台はシガツェ方面へと別れる。13時、5,000m以上の峠カロ・ラを越え、ニンチン・カンサ南面のアイスフォールを間近に眺める。

▲全員無事ＢＣに下山し、乾杯

▲ギャンツェ城の近くで昼食に立ち寄る

▼ＢＣの対岸の山より望むターラ・リ6,777ｍ（中央）を主峰とする山群

また、峠を挟んでニンチン・カンサと対峙する6,647ｍの山容もなかなかのものである。

15時、チベットで３番目に大きな町ギャンツェに着き、昼食をとる。ギャンツェ城が町を見おろし、いろいろな店の並ぶ大通りには外国人旅行者の姿も見える。16時出発。

シガツェには18時に到着し、市街の南端に近い郵電賓館にチェックイン。ここは３部屋毎にバス、トイレが共用となっている。登山隊の都市部での宿は、この程度で十分と思う。シガツェは21時頃まで明るい。

５月14日　全員でタシルンポ寺とその近くの絨毯工場を見る。工場内で販売もしているが、絨毯は手作業で日数をかけて作られるため高価である。その後、自由時間に新華書店とシガツェ城に近い市場に行ってみるが、どちらもラサと比較すると小規模であった。また、この日、山森隊長は郵便局からＨＡＪに国際電話で各隊員の留守宅への連絡を依頼した。

５月15日　９時半にホテルを出発し、ヤル・ツァンポ沿いの良い道を飛ばす。途中、ヤル・ツァンポの川幅が狭まって急流となっている部分が暫く続く。この道路からは高い山はあまり見る事が出来ないようだが、羊八井への渡しを過ぎてから南東方向遠くに見えた山はニンチン・カンサかもしれない。

13時から14時まで曲水にて昼食休憩の後、車は街路樹の緑があふれ人と車がひしめくラサに入る。15時10分ヒマラヤホテル着。ここを出発してから１か月半。全員無事に帰って来た。

（記：太田　康夫）

朋友们、再見！

ラサ～東京

５月16日　１か月半ぶりのラサである。寒く感じたラサも緑が増え暑苦しいぐらいである。午前中荷物の整理に汗を流す。デポリストを作成し、持ち帰るべき物はパッキングをする。登山協会の倉庫にて中央大学の遠征隊員と顔を合し、顔の表情から登頂した事を察する。午後個装を送るべく、タクシーをつかまえ通訳の催と樋上、宮崎と私の４人にて郵便局へ出かける。航空便約800元、船便約350元、さして急ぐ事もないので、安い船便にて送る事にきめる。ホテルへの帰りの途中、映画館の前に列をなし、すごいにぎわいを見せていた。

５月17日　土産を買いもとめに八角街へ出かける。大昭寺を中心に、その周囲を八角街の大バザール

が囲み、その外周には商店や民家がビッシリと建ち並んで、ラサで一番にぎやかな所だ、寺の門前には五体投地をくりかえす人を多く見かけ、あらためてチベット仏教の信仰の深さを感じる。

夕方、チベット隊員の宿舎を訪ねるが、美しく区画された所で施設も回りに体育館、運動場があり充実している様である。

5月18日　チベット隊のガヤの案内で、ラサ三大寺とよばれるデプン寺、河口慧海、多田等観が学んだセラ寺の二つの寺を見学した。その帰りに、チベット隊のドジブ隊長宅へ立ちよる。一戸建で日本製のCDカラオケもあり、びっくりさせられた。仕事の階級によって生活水準がずいぶんちがうものである。

5月19日　買い残しの土産を買いに町に出る。八角街へ再度行く者、本屋で資料をさがす者、最後のラサを歩きまわった。夜はチベット登山協会による合同の送別会で、豪勢な料理でもてなしてくれた。1週間ぶりのチベット隊員と記念写真等を撮り別れを惜しむ。

5月20日　朝、暗い中ホテルをクンガ空港へ向けて出発する。ラサ市内は、朝早くから大昭寺へ向けての人の動きが見られた。市内をはなれると雨が降り出し少ない緑があざやかに見える。

飛行機からの眼下の眺めは雲ばかりで、せっかくの窓側の席も残念の一言につきる。成都に着くと、四川省登山協会の人が出迎えにきてくれて、日本側がお願いした錦江ホテルへ案内してくれた。すばらしいホテルである。五つ星との事でホテル内の両替等の施設は24時間開いている様である。成都は蒸し暑く感じた。雨が降っているせいもあってか、日本の気候と良く似ている。自転車の列、色とりどりの雨ガッパ群、切れ目なく続く自転車の多さとあざやかさにおどろく。さっそく、ホテル近くの商店へ買い物に出かける。

▲ラサの街角

▼八角街にて土産の値引交渉

5月21日　成都の空港から北京へ出発である。搭乗手続をするが大きな問題発生。何と、北京へのチケットが明日の日付になっているので、今日の搭乗はダメとの事。最後までトラブル続きである。キャンセル待ちの末、何とか北京行に飛び乗るあわただしい出発になった。北京では登山協会の人が出迎えに来てくれた。登山前と同じ、前門ホテルに案内された。午後より天安門へ見学に出る。ホテルの名から察する様に、天安門の門前に位置するようである。しかし天安門までは遠く感じた。テレビ等で見る様に広大な面積である。ここでの事件がおこったかと思うと、あらためて考えさせられるものがある。そのような事をよそに凧が優雅にあがっていた。

5月22日　明日は日本かと思うと、なぜか、大国、中国にこのままいたい様な気がする。日本での気ぜわしい生活に戻るのかと思うと心が重い。しかしその反面、早く家族に会いたいといった思いも交差する。何はともあれ今日1日で中国との別れである。今日は登山協会の人の案内で、万里長城へ見学に出る。北京市内から車で2時間程度走る。さすが世界にほこる万里長城、スケールの大きさにびっくりさせられる。我々が見学できるのは、ほんの一部である。帰りに登山協会へ立ちよる。

5月23日　帰国。成田にて再会を約束してわかれる。

（記：伊藤　政義）

ブータン国境への旅

－クーラ・カンリ南面を見る－

山森　欣一

■地図の真実を探る

最近ネパールの新しい地図が出来た。地図を見てあれこれと想像することは楽しい。岳人の、登る以外のもう一つの喜びでもある。ネパールの新地図については、後日詳しい情報を持つ方に紹介していただく予定である。

中国登山では、地図を手に入れることが困難であったが、1990年には「中国山峰一覧図」、「青蔵高原山峰図」、「南迦巴瓦峰登山図」が発行され、誰にも中国全体の山の概念がわかるようになった。また、93年には「中国登山指南」が刊行され、その中に収録された山々について15万分の１の地図が掲載されており、近隣の多くの山々が紹介された。95年には「雪域神山」というチベットの山の写真集も刊行され、この本には全く新しい山の地図が数点掲載された。その他にチョモランマ、チョゴリ、シシャパンマ、コングール＆ムスターグ・アタの４枚の地図も発売されている。

このようにして、現在ではかなりの数の山々の地図を手に入れることが可能である。このような情勢から、これまで不明であったブータンと中国国境付近の山々も段々とベールを脱ぎつつあると同時に、国境付近にある山々の多くが六千メートル台の標高となった。

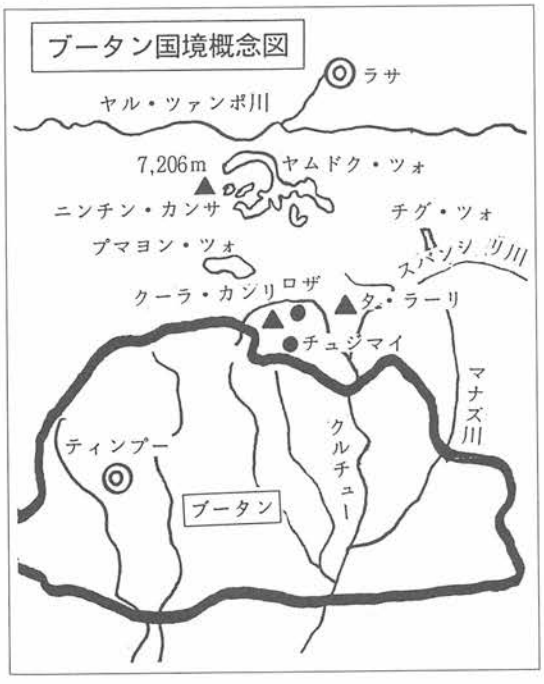
一方では、手に入れた地図の中でも、幾つかの地図では標高や地形が異なっている物も有り、新しい物だからといって直ぐに正しいと断定するのは怖い気持ちもある。結局どちらが真実なのかを現地に行って探る楽しみは残されることになる。

その一例が、チベット自治区措美（ツォメイ）県にあるチグ湖である。この付近の水系は西はブータンに流れてマナス川となり、東はスバンシリ川となりアッサムに流れ出て、共にブラマプトラ川に注ぐのである。つまりこのチグ湖周辺が、マナス川とスバンシリ川の分水嶺を成しているらしいのである。そしてこの地域はまだまだ情報が少なく、それぞれの源流に聳えているだろう山々についても知られていない。

このチグ湖であるが、「青蔵高原山峰図」では、流れ出る川が無いのであるが、ＯＮＣでは南に流れ出る川が有り、スバンシリ川に注ぐのである。どちらが真実なのであろうか。興味深々である。いずれにしても地図を見ながら、あれこれと想像することは楽しい。

■クーラ・カンリの南面の写真

クーラ・カンリ南面の写真は、1958年秋、中尾佐助によってメラカチュン・ラ(5,316m)からと、63年ガンサーによってボド・ラから撮影されてい



る。二つの峠はいずれもブータンと中国の国境であり、二人はブータン側から峠に達して撮影した。

今回私がクーラ・カンリ南面を撮影したのは、中国側からである。先達の二人の撮影ポイントの標高は5,000mを越えていたが、私の写真は約4,000mからのものである。

■心弾む偵察行

ペルー人質事件が解決した翌日の4月24日夕刻、クーラ・カンリⅡ峰(7,418m)を北面から登山中のHAJ/TMA合同登山隊BC(4,250m)に、一台のランドクルーザーが止まった。車から降りた客人は旧知の間柄であるCさんだった。早速、日本から持参した一升瓶をあけて歓待する。

聞けば、明日からクーラ・カンリの南面に入り、ブータン国境に聳え立ち、未踏峰としては世界最高峰であるガンカル・プンスム(7,570m)の入山路を調査するのだと云う。ついては、日帰りの予定だから私にも行かないか？とのお誘いである。

勿論私に異論がある訳は無い。有り難くこのお誘いに乗る事にした。タイミングのいいことに、肝心の登山活動は、C1で4月20日～21日と降った雪のため22日は停滞し、23日には全員がABCに下山して来ており、(中国側の3人はBCまで降りて来た。)この日から2～3日休養の予定となっていた。明日一日私がBCを離れてもクーラ・カンリ登山には支障がないのであった。

■県都ロザ(Lhozag)へ

標高4,250mのBCに陽が当たり始めるのは、7時15分頃である。気温－7℃、偵察にはおあつらえ向きの雲一つ無い快晴である。それでも珍しく西風が吹いている。

8時にABCと交信。南面に行く事を伝える。10時、チベット側隊長とCさん、Gさんと私はランクルに乗ってBCを出発。ロザション・チューの右岸に沿って下る。見渡す限り禿山であるが、その山と川のほんの少しの耕地では、飾り付けたヤクや馬を駆使して、畑作業の真っ只中である。道は当然舗装されていないが、右岸のカルジャン(7,221m)の北東に連なるゴウラカ・リ(6,497m)から押し出された石原のために所々悪路となる。

▼ロザの洒落た建物

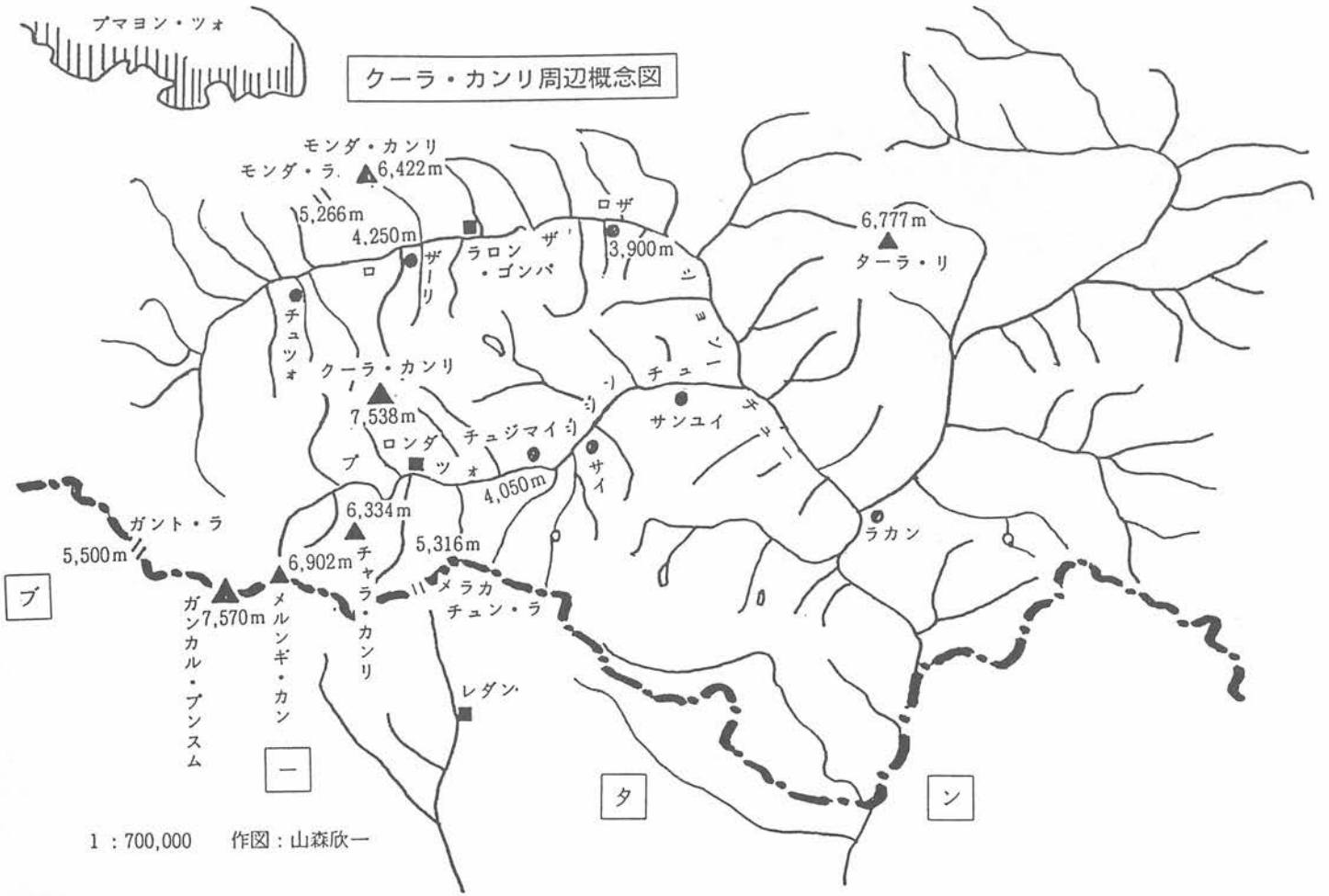
10時30分、広い谷に緑が散見する吉堆(ジスイ)で東に聳える打拉日(Tarlha Ri 6,777m)連山を見る。15分ほどで県都ロザに着くが、チェック・ポストで検問を受ける。隊長は早速関係部門へ出頭。標高3,900m。洒落た建物やトタン屋根の建物もある。食堂や商店がこれみよがしに音楽をかけ、電飾があるところなど正に県都である。

11時35分、ロザを出発して川底に降り、右岸を行く。両岸には大岩壁が連なり、水もBC付近とは変わって澄んで来た。下るに従って所々に見える猫の額ほどの畑には緑が見え、いかにも春を思わせる光景となる。1時間弱で左岸に渡る。

12時50分、本流と分かれて立派な橋を渡って、プツォジジン・チューの左岸を行く。分岐点の標高は3,280m、BCから約1,000m下がったことになる。さすがに空気が濃い。

今度は、さらに清流となった川をドンドンと高度を上げて登って行く。BCのあるザーリとは異なり、この付近は大きな木もある。人も車もほとんど通らないが、たまたますれちがったトラック

▲プツォジジン・チューの清流


ブマヨン・ツォ
クーラ・カンリ周辺概念図
モンダ・カンリ
モンダ・ラ
6,422m
5,266m
4,250m
ロ
ザ
ー
リ
ラロン・ゴンパ
ロザ
3,900m
ン
6,777m
ターラ・リ
チュツォ
クーラ・カンリ
7,538m
チュー
サンユイ
チュジマイ
ロンダ
ツォ
ブ
4,050m
サイ
6,334m
ガント・ラ
5,500m
6,902m
チャラ・カンリ
5,316m
メラカ
チュン・ラ
ラカン
ブ
ガンカル・ブンスム
7,570m
メルンギ・カン
レダン
一
タ
ン
1：700,000　作図：山森欣一

を通すためしばしの休憩をとる。

幾つかの支流を見送り、一時間ほど走ると富士山の頂上ほどの標高の川岸に温泉があり、ジープから見下ろすと何人かが入っていた。右岸に渡り、10分も行くと突然巨大な建物が目に飛び込んで来た。色(サイ)村に着いたのだ。3,830m。これは全く特異なゴンパ（寺）だ。聞けばサンガクドウと云って、9階建てのゴンパだとのこと。帰りに見学することにして先を急ぐ。

サイの村はずれから道は左岸になり、一気に高台へと駆け登った。視界が開けて前方に春山のようなのどかな連山が姿を現した。そして雲も湧いて来た。雲のスピードが早いとクーラ・カンリが見えないのではないかと心配になる。前方の山々は、あまり高くはないが、ブータンとの国境の山に違いない。思わず胸が高鳴る。しかし、ジープは先を急ぐので停車も出来ない。

今度は一気に下り川底に降りた。右岸から支流が合流する。その合流点には、昔の名残の高い監視塔が我々を見下ろすように立っていた。それを見やり、カーブを曲がった途端、眼前に三つの巨峰が峻立していた。間違いなくそれはクーラ・カンリの南壁であった。間に合った。雲は今まさにⅠ峰にかかろうとしていた。

今度は躊躇なくジープを止め、川底に走る。なんと言う壁であろうか。思いもよらなかったことであるが、カメラのファインダーを覗いてシャッターを切っているうちに、メラメラと登攀意欲が沸き上がって来た。昔々とった杵柄からだろうか。

ヒマラヤン・ブルーの空に、今、北から攻めている我々が登らなければならない、Ⅱ峰の頂上リッジがくっきりと浮かび上がっている。そのリッジをはっきりと目に焼き付けた。心躍る瞬間であった。

▲クーラ・カンリ東の山(奥に小さくクーラ・カンリ)

▼チュジマイの子供たち

感動の一時を過ごして、さらに先を急ぐ。だが15分も走ると車の入れる終点である曲吉麦(チュジマイ・4,050m)に到着した。14時45分。もうここからクーラ・カンリは見えない。川は左前方にその姿を消しており、どうやらそちらが国境のようだ。

Cさんは早速村人を掴えてガンカル・プンスムの事を聞くが、全く要領を得ない。村人が云うには、この川を溯って行くと、メラカチュン・ラがあるとのことだ。ここでブータン側からの情報にもとづいて作られた地図にある名前が出て来るとは思いもしなかった。そうすると40年前に中尾佐助がブータン側から立った峠の丁度反対側に足を踏み入れた事になるのだろうか。地図を頼りに、Cさんと二人でガンカル・プンスムに到るアプローチを検討し、目鼻をつけた。

15時40分、屋根屋根に飾られた色とりどりのタルチョーが、折からの強風にはためく中、チュジマイを辞する。25分でサイに到着し、サンガクドウを見学する。塔の中は、上に行くにしたがって段々と細くなり、天井も低くなって来た。各層の

▼昔の監視塔が目に飛び込んできた

壁にはマンダラが描かれており、仏像が鎮座している。驚いた事に最上階の9階に登り着くと、案内にたってくれた若き僧侶が、窓から外に出てしまった。聞くと、塔の周りに足場が作られて、ホールド用の鎖があって、ここを廻ると功徳があるのだと云う。ここは一番、クーラ・カンリの隊長としては行かねばなるまい。廻って登山の安全と成功を祈るしかあるまい。一歩外に出ると結構な高度感である。垂直だ。かつて岩場を登っていた頃を思い出しながら、ホールドをしっかり掴み、時計回りで一周した。その間にも若僧侶はもう何周もしていた。修行の一環である。

16時50分、サイを出発。19時過ぎに強風が吹きまくっているロザに到着。食堂で腹ごしらえをしてＢＣに帰ったのは、カルジャン峰の姿がかろうじて見える21時丁度であった。

▲サイにある9層建てのサンガクドウ

▲国境の村、チュジマイ

隊員の横顔

①生年月日・年齢　②住所・電話番号
③勤務先名・電話番号　④所属山岳会
⑤隊務　⑥高所登山歴

隊長　山森欣一　Yamamori Kin-ichi

① 1944年2月生（53歳）
② 東京都江戸川区

③ 日本ヒマラヤ協会
④ 山嶺登高会 ⑤ 総括、渉外
⑥ 1975　インド、ヌン(7,135m)副隊長
1978　パキスタン、ハチンダール・キッシュ(7,163m) 副隊長
1980　ネパール、カンチェンジュンガ(8,586m)偵察隊長
1981　ネパール、カンチェンジュンガ隊長
1982　インド、クン(7,077m)隊長
1984　中国、ナムナニ(7,694m)偵察隊長
1985　中国、ギャラ・ペリ(7,294m)偵察隊長
1986　中国、ゲニ(6,204m)偵察隊長
1987　中国、ラプチェ・カン(7,637m)合同登山隊(チベット登山協会)隊長
1989　中国、シャラリ(6,032m)隊長
1991　中国、雪宝頂(5,588m)秘書長
1991　中国、ミニヤ・コンカ(7,556m)隊長
1992　中国、ムスターグ・アタ(7,546m)隊長
1992　中国、クラウン(7,295m)隊長
1993　中国、ユイチュ(6,179m)隊長
1994　中国、ミニヤ・コンカ(7,556m)隊長

今さら紹介するまでもない日本ヒマラヤ協会を取り仕切る理事長である。もう遠征隊の隊長を何度務められただろうか。ご自分でも指折り数えないと分からないかも知れない。その事一つ取っても如何にヒマラヤに精通されているかが窺い知れる。それだけに指導力は抜群で、後に続く者は安心してついて行ける。登山界でのカリスマ的な存在感と風貌から初めて出会った人の殆どが気圧されるかも知れないが、実際には人への思い遣りが深く、ユーモアも豊富な人情家である。だから一度隊長の心に触れると、もうその虜になって離れられなくなる。最近はチベット通いが続き、自分は少数民族だと言ってチベット人たちを煙に巻くのが趣味のよう。余り知られていない事と言えば愛妻家で子供さん思いの家庭人だと言う事。奥さんや二人の子供さんの話になるとふだんとは好対照に顔が綻ぶ。　(2001.2.28　記：樋上)

◀ベース・キャンプにて記念撮影

副隊長：樋上嘉秀（Higami Yoshihide）
① 1944年6月生（52歳）
② 大阪市

③ 交楽荘薬店
④ 飄逸沢遊会 ⑤食糧、医療
⑥ 1993 中国、ムスターグ・アタ（7,546m）登頂
1994 中国、ユイチュ（6,179m）登頂
1995 インド、ヌン（7,135m）副隊長
1996 中国、チェルー（6,168m）

最近ブラピー主演の「チベットの七年」を観たが、その中にインドの収容所から脱走し、ラサにたどり着いたアウフシュナイターが登場するが容貌は彼にそっくりである。93年のムスターグ・アタに参加して以来、ユイチュ、ヌンとＨＡＪのサマー・キャンプに参加した。50近くなってからヒマラヤ通いを始めるには、若い頃には相当の修行を積んでいないとできないことである。早婚だったというが、愛する妻とは今でも新婚時代と変わらないとのろける。筆も立つが、人の心の深層を読むことにも秀でている。中年。

（記：山森）

登攀隊長：宮崎久夫（Miyazaki Hisao）
① 1949年10月生（47歳）
② 千葉県印旛郡
③ ㈱丸豊
④ 雪と岩の会 ⑤装備、戦術

⑥ 1974 ネパール、ツクチェ・ピーク（6,920m）登頂
1978 ネパール、ヒマルチュリ（7,893m）初登攀
1981 インド、ナンダ・カート（6,611m）捜索
1983 インド、ナンダ・カート
1995 インド、サトパント（7,075m）

一見恐持てがして近寄り難い風貌があり、これまでも何度か顔を合わせて知ってはいたが、話をしたのは今回の遠征で一緒だと分ってから。しかし人は見掛けによらぬの例えがぴったり当てはまる。お互い酒が好きな事もあって酔いが廻る程に意気投合し合えた事もある。何より飾りっ気のないのが気持ちよい。それに心配りの出来る優しい心の持ち主である。

言わずと知れた「雪と岩の会」の猛者である。だから山登りに対するポリシーには厳しさが有り時としてその厳しい言動が人を誤解させる事も有るが根は心配りからである。

遠征中は「ウィスキー隊長」の渾名をチベット隊員から冠せられた程の凄い酒豪である。しかしそろそろ年を考え、ご自愛を。

（記：樋上）

隊員：干場晃（Hoshiba Akira）
① 1951年6月生（45歳）
② 石川県松任市

③ ㈱ソディック
④ 松任風露山岳会 ⑤ 通信、食糧
⑥ 1989 中国、シャラリ(6,032m)

小柄でタフな煙の魔術師。

いつも話しの始まりは、煙草から始まる。チベット隊との煙草での国際交流、みごとであった。煙草を吸わない自分もうらやましいかぎりである。しかし、遠慮無用と言ったものの、煙の我慢も大変なんですヨー。

日本ルートを終始トップでリードしたタフなやつ。あの日の行動は満足の一日であった。次回の遠征では指揮する立場で参加してほしいものである。（記：伊藤）

隊員：太田康夫（Ota Yasuo）
① 1953年3月生（43歳）
② 広島県福山市

③ 自営 ④無 ⑤記録、食糧
⑥ 1990 メキシコ、ポポカテペトル(5,452m)登頂
1993 中国、ユイチュ(6,179m)登頂
1994 中国、ルンポ・カンリ(7,095m)

酒も煙草もやらない。勿論愛人（アイレン）（中国語で配偶者の意）もいない。言葉も少ない。「Simple is the best life」をモットーにしているようである。1993年夏の青海省・玉珠峰登山以来ＨＡＪの登山隊に参加する事5回。その内の4回を共にした。最初の5月の富士山で「オオイケルナ」と思い、ユイチュの北面を見て皆が「ああでもない、こうでもない」と言っている側で「こうです」と言うのを聞きながら「オオナルホド」となった。

慎重な行動派であるが、思い入れが時々勘違いに繋がるところもあり憎めない。かつてシプトンを評して「峠を越え未知の氷河を探る探検家」と言うのがあったが、彼は正しくＨＡＪの一方の柱である「未知」の道を実践する頼もしい仲間である。（2001.2.11 記：山森）

隊員：伊藤政義（Ito Masayoshi）
① 1954年１月生（43歳）
② 三重県員弁郡

③ 員弁郡農業協同組合
④ 三重泗岳会⑤ 環境、食糧
⑥ 1982 アメリカ、マッキンリー(6,194m)
登頂
1992 ヨーロッパ、オートルート

一見、口数が少ないように見えるが、何とどっこい、中国では積極的に中国人と会話をして交流を深めるところは私の真似のできないところ。主張より協調性を重んずるところは、さすがＪＡマンである。
日本ルート工作に出かけた時も、Ｃ１から素早いロープさばきでピッチを伸ばすことができた。中国では日を重ねるごとに熊のような顔だちになってきたが、心はいつもおだやかで広い海のような気がしました。
（記：干場）

隊員：吉田健吾（Yoshida Kengo）
① 1972年10月生（24歳）
② 札幌市東区

③ フリーター
④ 北海道大学ＷＶ部ＯＢ会⑤ 気象、装備
⑥ 1993 ネパール、ロブジェ東峰(6,119m)登頂
1993 ネパール、イムジャ・ツェ(6,189m)登頂

24歳。日中全メンバー中最年少。ラサでの順応には少し手間取ったようだが、登山期間に入ると本来の強さを発揮した。明晰な頭脳は空気が薄くなっても衰えず、チュツォで山森隊長のトランプ手品を見破り、上部では担当の装備・気象はもとより食糧についても極めて細かく把握していた。また、水・食事作りや隊荷整理等に実にこまめに動いてくれたおかげで、中年隊員達は随分楽をさせてもらった。Ｃ１撤収時に某チベット隊員が隠した大きなゴミ袋を探し出し、苦労してＡＢＣまで降ろした事も書いておかねばなるまい。
最近、国内では単独で登る事が多いそうだが、リーダーとしての経験もかなりあるように見受ける。今後の活躍が楽しみな好青年である。
（記：太田）

隊　長：多　吉　甫（Dojibu）　57

一見こわもてのする面相である。長身で東チベット出身であることが一目瞭然で分かる。

1960年のチョモランマ登山では、8,100ｍまで到達し、77年にはトムールに登頂している。

ＢＣでは馬やポーターの手配を入念に行い、集まったポーター達にも丁寧に応対していた。また地元幹部との交流にも細かい配慮を見せ、注がれた酒は全て飲み干す酒豪でもある。

ラサの自宅には、日本人の我々がチベットの人達の生活を想像する時に浮かぶ光景とは掛け離れた豪華な品々が並んでおり、隊員達は驚愕した。古き良き時代のチベット人である。（記：山森）

登攀Ｌ：嗄　　亞（Gaya）　46

チョモランマの登山経験がありチベット隊の要である。サングラスをかけ愛用の北京ジープを乗りまわすニヒルな男である。隊員達には信頼されるリーダーであり行動も早い。彼の家には大きな犬が一匹いる。ＢＣで部落のチベット犬が子供を産みましたがその子供をラサの自分の家に連れて行きました。よほど犬が好きなのでしょう。日本の隊長とは正反対です。普段はきびしい顔をしているがお酒が入るととても陽気になる。遠い上海には息子がいる。　（記：宮崎）

隊　員：多　布　傑（Duobujie）　42

４名のチベット隊員の中では一番目立たない。無口で酒を飲まないし煙草も吸わない。しかし登山にかけては他の隊員にひけを取らない。

聞けば元コックで、その頃はアル中の酒乱だったと言う。それが山登りを始めてピタリと酒も煙草も断ち、今は真面目一辺倒の愛妻家、良き父親だと他のチベット隊員が口を揃えて冷やかす。我々に対する気配りもそつがない。印象的だったのはＢＣでのある日、連れ立って出掛けた村の雑貨屋で自分は飲まないのに我々に地酒を勧めて、その代金まで支払って呉れた事。これからの活躍を祈りたい。　（記：樋上）

隊　員：加　　措（Jiatso）　37

怪力の巨漢。ドスのきいた声を発し眼光も鋭く一見怖そうだが性格は陽気で、目を細めて笑うと童顔になる。この人は太目の身体を苦にしないだけのパワーとスタミナを持ち合わせているようだ。食べる量も多く、ベースキャンプでは洗面器のような（ちょっとオーバーか）食器を使っていた。馬方やポーターを指揮する姿は貫禄十分。

ラサより西の、もう少し標高の高い所の出身と聞く。1990年の中米ソ合同チョモランマ隊等に参加。ニンチン・カンサにも登頂したことがあると言っていた。絨毯織りの名手？の奥さんとラサ市北部の登山隊宿舎に住む。　　（記：太田）

隊　員：小　斉　米（Xiao Qimi）　32

冬のアンナプルナ南壁で墜死した日本稀有のアルパイン・クライマー斎藤安平に姿形が酷似している。髭を蓄えた面相は様になっている。

86年長野とチャンツェ登頂、90年京大とシシャパンマC登頂、93年台湾とチョモランマ登頂、96年長野とチョモラーリ登頂、97年二度目のチョモランマに登頂した。高所登山経験豊富なタフガイ。

日本隊との登山が多く、隊員とも如才なく付き合い、黄金に輝く指輪がキラリと光り、一点豪華主義のチベット人の面目躍如たるものがあった。チベット登山隊の故郷、南木林県出身。

（記：山森）

◀ABCのタルチョー

通　訳：催　　雄（Chui Xiong）　27

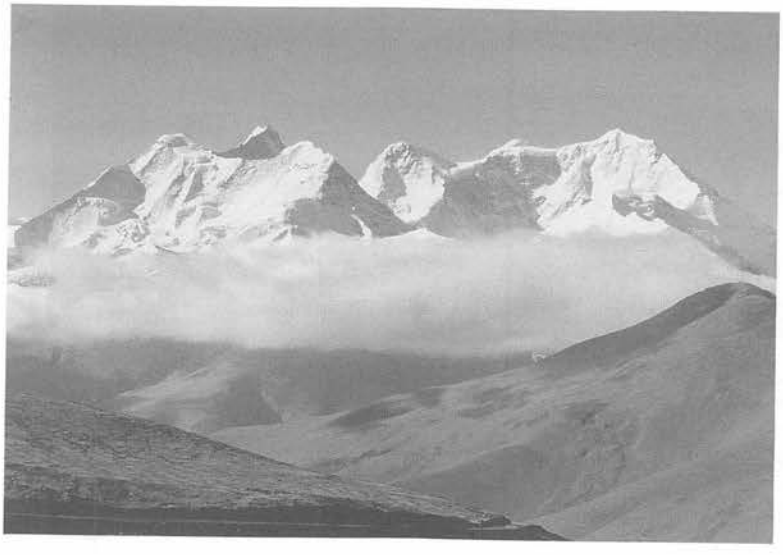
通訳。吉林省出身の朝鮮族。パンダのような体で隊員とＡＢＣ生活を続けシンドイ思いをしたようだ。

必ずしも正確とは言えない日本語通訳であったが気持ちは優しく、中国で自分の置かれている立場をよくわきまえていた。

帰国後、母親の兄が戦前（1944年）の日本からの便りを最後に消息が分からないので探して欲しいと依頼された。東京の大学で学徒出陣（空軍）したらしいとのこと。名は全李鉄山と言う。何も出来なかった事が心残りである。　（記：山森）

コック：李　虎　民（Li Humin）　37

何か溶けこみやすい気が付く性格。色々な遠征隊に同行し、キャリアは豊富。とりわけ、ニワトリのスープは自画自賛するだけあって「好吃（ハオチー）」であった。卵が盗難にあったので仕方がないが、彼の卵料理が食べたかった。さぞかしうまかったであろう。　（記：伊藤）



◀モンダ・ラから見るカルジャン（左）とクーラ・カンリ

二人(目)の副隊長

樋上　嘉秀

私にとってそれは唐突な便りだった。松が取れて、さて24日からの食糧梱包に向けての最後の追い込みに入ろうかとしていた矢先だった。

手紙には、「父親の容態が捗々しくなく、今回の遠征を取りやめる事にした。」との内容が書かれていた。松舘副隊長からの便りである。

これは困った事になったと思った。松舘副隊長が抜ければ代わりに私が副隊長に指名されると感じたのだが、それは自惚れだろうか。案の定、程なく山森隊長から電話が入り、「副隊長をしろ」との命令である。私は正直嫌だった。今回だけは一隊員として遠征に参加したかった。

ヒマラヤ登山を始めて五年目になる。その間、幸運にも毎年遠征に出させて貰ってきた。結果は二勝二敗だが、この二年は登頂を果たせないでいる。副隊長役も経験し、その力も不足している事は自分なりに感じていた。だから初心に戻って登る事だけに専念したかったからである。

今回の遠征を意識したのは酒井國光先輩のお宅に「春山」出版記念パーティーに招かれて出掛けた時だった。その席には山森隊長が一緒だったので飲んでいる内に今回の遠征の話になり、気が付いたら申込書を受け取っていたと言う次第。

松舘さんに会ったのは、その席でが初めてだった。青森から御夫婦でお祝いに駆け付けて来られていた。汗かきで飲む程に着ている物を次々に脱ぎ捨てて、最後には上半身裸であの太鼓腹を揺すらせて座の皆とユーモアたっぷりに話を弾ませておられたのが記憶に新しい。誰に対しても親しみを持って接しられ、心配りがあって心の優しい人だと感じた。

後で聞いて分かったが松舘さんはその時既に遠征に行く事が決まっていたとの事。それを知っていたら遠征の話も出来たのにと今でも残念に感じている。

ところが第一回の合宿に出席したら松舘さんが来ているのに吃驚。酒井さんのお宅では全くそんな話が出なかったからまさか一緒とは予想もしていなかった。しかし松舘さんが一緒ならリラックスした遠征になると喜んだし、当然の事ながら松舘さんが副隊長になられたので、これで希望通り安心して登山に専念出来ると食糧リーダーも買って出たのだった。

それが思いも寄らなかった事になってしまい、加えて食糧担当の方では連日寄贈依頼先の探し出しから、電話をしては依頼書の発送と、更には荷物が届けられれば受領書や礼状の発送等々、更には医療の方も準備しなければならない等、全く気を休める間も無い忙しさで、遠征に出発するまでに全精力を使い果たした感があった。

そんな事で影響が出た訳ではないだろうが、Ｃ１に入ってから体調を崩し、それから以降はＢＣへ下るまでＡＢＣ暮らし。副隊長の仕事も満足に果たせないままに今回の遠征が終わってしまった事は心残り。

ヒマラヤ登山を始める時に10年間連続で遠征したいと決意に近い誓いを立てた。しかし今回の遠征の結果から今年に入って98年は誓いを自ら放棄する事になるが遠征を一年休む事を家族にも伝え、山の仲間にも宣言した。一年休んでヒマラヤへの思いをリフレッシュしたいとの考えからだった。ところが「舌の根も乾かぬ内」と言うのはこう言うことを言うのだろうが、それから三ヶ月も経たない内に山森さんから誘いを受けて翻意してしまった。未登峰のカバン偵察遠征と言う気軽さが有ったに他ならないが遠征には変わりない。これで何もなければ99年の本番にも参加する予定なので、誓いの継続だけは続く。はてさてどうなる事やら。

遠征の感想

干場　晃

今回の遠征は、ヤンラ・カンリから鉾先がクーラ・カンリに変更され、一時は力も抜けかかった。しかし、未踏の山となれば自然に力も入ってきた。家族の反対も押し切り参加させてもらった。登頂はできなかったものの、今回の遠征でいろいろと勉強させてもらった。

合同登山を振り返って

太田　康夫

トリスリ川上流の谷、誰も試みたことのない未知の北面からヤンラ・カンリに登る／魅力的な話だった。いろいろと迷った末、参加を申し込んだ。参加しなかったら後悔することになるだろう、という気がした。

チベットとの合同隊であることに関しては、高地で生活する彼らについて行けるだろうか、という不安感もあったが、この時点では合同隊の意義等については深く考えることはなかった。川沿いの国境に近く、外国人が自由に立ち入ることが出来ない地域だから、合同隊でなければならないのだろう、という程度の認識しか無かった。

隊員が顔を合わせ、準備が始まった。この山は10万分の1シシャパンマの地図に入っているが、北面からの写真は無かった。地図を見ながらルートを検討するのは楽しく、また、経験豊かな隊長や隊員の話を聞くのも勉強になった。

隊長の偵察の結果、アプローチに問題があることがわかり、この山は断念することになり、がっかりした。この時の偵察には、出来ることなら私も同行したかったのだが、話を聞いたり胸をはずませながら偵察記を読んだりして、ますますその感を強くした。

偵察時の写真の山座同定をさせていただいたのは私にとって充実した時間だった。カバン峰、ランタン・リルン、ランタン谷南側の山々、そしてヤンラ・カンリ／写真と地図、グラフ用紙、定規、分度器、電卓。これらを使って「ああでもない、こうでもない」とやっているうちに夜が明けることもあった。

特に「ヤンラ・カンリ北面」として雑誌に掲載された写真について、「ランタン・リルンではないでしょうか」と言い出すのは、詳しい地図が無かっただけに、勇気が要った。自分が間違っていれば、世が世なら切腹……という緊張感があった。その後、隊長の取り計らいで、このあたりの山に詳しいO氏から地図のコピーを送っていただき、少しずつ写真の各部分と地図との対応がついていった時には本当に嬉しく、同時にほっとした。切腹しなくて済んだのである。

ともかく目標の山はクーラ・カンリⅡ峰に変わった。Ⅱ～Ⅲ峰間のコルの北東に幾分等高線間隔の広い所があるのが目に入ったが、「神戸大学のルートでⅠ峰を越えて行くしかない」と聞き、それに従って計画を進めることになった。あまり高所経験の無い私には、仮にⅡ峰の頂上へ辿り着けたとしてもⅠ峰を登り返さなければ帰って来れない、という恐怖感があった。また、ヤンラ・カンリ北面のルートをあれこれ考えていた頃のような高揚感が失せていた。

ところが、11月のミーティングでⅡ～Ⅲ峰間コルへのルートが提案され、私を含め多くの隊員が

それに賛成し、決定した。これで少し活気を取り戻したが、神戸大学隊やＨＡＪカルジャン隊等の資料や写真が豊富にあり、目指すⅡ峰は、未踏ではあっても、ヤンラ・カンリのような未知の山という意識は無かった。

Ⅲ峰～カルジャン間のプラトーへ上るルートについては、登攀隊長の宮崎氏から、ここを登れるかどうかが最大のポイントだ、と聞かされても、写真や地図を見る限り傾斜もそれ程強くなく、1km近い幅があるので、どこかが登れるだろうと安易に考え、ハシゴが必要かどうかなど考えもしなかった。

出発の日が近付き、家族会に続き壮行会が盛大に行なわれた。私はこのような事が苦手で、出来ることなら人知れずこっそりと出発したいという思いが強いが、そんなことは許されないようだ。

そして、いよいよ現地へ向かう。目指す山が見えた時は確かに胸の高なりを覚えたのだが、さんざん写真を見てきたせいか、初めて見るような気がしなかった。

曲措へ着き、まさかと思ったが、ドジブ隊長が行こうとしているのがⅠ峰へのルートだと知った時は、開いた口がふさがらなかった。日本側からチベット登山協会に連絡したⅡ～Ⅲ峰間経由ルートの件が、登山隊に伝わっていなかったらしい。「登山隊」が、ラサ市内でも登山協会からかなり離れた所に位置している、ということを初めて知った。

私のチベットでの登山は2度目である。カトマンズからザンムー経由でＢＣに入った前回は前半不調で、キャンプがＡＢＣ→Ｃ１と伸びても、自分はまだＢＣあたりでぐずぐずしている有様だった。今回はラサに数日滞在し車で5,000ｍ以上の峠を越え、ＢＣへ入る前にＢＣより少し高いチュツォに滞在するというおまけまで付いて、順応は比較的順調だった。

ＡＢＣやＣ１の偵察、アイスフォールのルート偵察や日本ルートのルート工作に加わることが出来たのは嬉しかった。やはり最前線は良い。

とは言っても、チベット隊員と行動を共にしたＡＢＣ偵察やＣ１偵察では、ほとんどチベット側が先行し日本側は離されることが多かった。まあ、42歳のドブジェ氏がＢＣ横の道路を結構なスピードでジョギングするのを見れば、到底太刀打ち出来ないことは分かる。彼らと同じスピードで登ろうと無理をすれば、待っているのは高山病である。

Ｃ２建設を目指す日、吉田氏と私はＣ１スティとなり、双眼鏡で登攀の様子を見守っていた。チベットの２人（ドブジェ、シャオチミ）が少しずつルートを伸ばしてプラトーの直下に達し、Ｃ１から見るとその上は全く問題無いように見えた。まもなくプラトーに抜けるものと思い、隊長にもそのように報告した。ところが、その後の宮崎氏からの連絡は悲観的なものだった。登山は終った。疲れきって次々とＣ１に帰着する隊員をビデオで撮りながら、涙が滲んだ。

23日ぶりにＢＣへ下ってみると、まわりの畑には麦や豆が芽を出し緑が広がっていた。降水量の少ないこの地で、人々は山から流れてくる水を引いて上手に使っているようだ。

テントの中は度々タバコの煙で臭く息苦しくなり、気の弱い私は黙って外へ逃げ出すことが多かった。

ＢＣ撤収まで時間は十分にあり、周辺を歩き回って鳥や小動物を撮影したり、姿形の良い石を探したりするのは楽しかったが、子供がしつこく付きまとって物をねだるのには閉口した。

ＢＣから東の方向遠くにターラ・リ（6,777ｍ）の山塊の一部と思われる２～３のピークが見えており、その右に更に高い所が続いているのだが途中から手前の山の尾根に隠されて見えなかった。この隠された部分を見たくて仕方がなかった私は、ある日カメラだけを持ちＢＣ対岸の山の斜面を登っていった。他の山の撮影や、石探しまで兼ねていた。1,000ｍ程登ったがターラ・リの方向は雲に覆われていた。そのかわり、ロザションチューの対岸のゴウラカ・リから6,412ｍ峰、カルジャン最高峰にかけてのすばらしい眺めを満喫した。

味をしめた私は翌日再び登った。東の空は曇っていたのでターラ・リについてはあまり期待せず、前日より高く登ってクーラ・カンリⅡ峰の入った写真を撮ったりカルジャン中央峰の上部の様子を確認したりするつもりだった。ところが、高度を上げるのにつれて東の空の雲が消えていき、やが

てターラ・リの山塊がその全貌を現わした時には思わず歓声をあげた。至福の時だった。ＢＣから見えた部分の右に更に４つのピークがあり、一番右が最高峰のように見えた。

この日、下山が遅れて昼食に間に合わなかったのだが、コックの李さんが私の分をちゃんと確保してくれていたのも本当に嬉しかった。李さんはＢＣであまり豊富とは言えない材料から旨い食事を作ってくれた。隊員と一緒にＡＢＣまで上って頑張ってくれた通訳の催さんと同様に、大変お世話になった。

今回、「仕事」として参加したのは、この２人だけでなく、チベット隊員にとっては登山そのものが仕事である。彼らは山に登って収入を得ている。金を払って山に登る我々から見ると、うらやましい気もするが、仕事であれば、もちろん自分の登りたい山に登るという訳にはいかないだろうし、時には高所ポーターのような役割をさせられる場合もあるのかもしれない。登頂の成否が仕事の評価を大きく左右するとすれば、そのためには手段を選ばず、という場面が出てきても不思議ではない。

今回の個性的な４人の隊員を見た限り、彼らは多少なりとも自分の仕事に喜びを感じ誇りを持っているように見受けられた。但し、他のもっと安全かつ高収入の仕事に移れるなら移りたい、と思っているかどうかは、彼らとそんな複雑な話は出来なかったので、定かではない。

ともあれ、仕事であろうとなかろうと「山の神」には関係無い。彼らが「職務」に忠実な余り、危険な目に会うことが無いように、祈りたい。

私の知る範囲では、今回の登山活動中、彼らとの間にトラブルという程の事は一度も無かった。せいぜい、ゴミを焼くと彼らが良い顔をせず、彼らがゴミを捨てると、こちらがやんわり注意する、といった程度だった。我々のパーティーでは、宮崎氏が登攀隊長として彼らの意向を尊重するよう気を使っていたし、逆に、例えば、宮崎氏がボディーランゲージと英語を駆使して、日本側は初めての到達高度では泊まらない、と伝えれば、ガヤ氏は自分の案を修正した。

それにしてもチベット隊員は強かった。彼らと一緒に充実した登山をするためには、日頃から鍛えた上で、登山期間に入る前に日数をかけて、かなりの高度まで順応しておかなければならないのだろうか。

最後になりましたが、今回の登山に関してお世話になった全ての方々に心から感謝致します。

廁所（トイレ）を作る三要素

伊藤　政義

①見晴らしが良い。足場が良い。

②トイレ作りの作業が容易である。

③物「糞」が見え、確認できる。

今回の遠征ではＢＣ、ＡＢＣ、Ｃ１のキャンプ地において上記の事に気をくばった。

①景色が良く心も気持ち良く落ちつける場所。目的の山が見える所ならなお良い。又、景色が良くても、スタンスが悪ければ足が痛くつらいものになってしまう。

②場所が決まれば作業である。砂地の穴の堀りやすい場所なら申し分ないが、なかなかこの様な所がないのが現実である。大きな石のスタンスの良い所を探し平らな石を並べて作った。

③クレバスの穴の様な底なしの所は避けた。物が見えなくさっぱりするが、あえて見える場所に作った。なぜなら、長いキャンプ生活の中で体の異状を見つけるのに、これほどのものは無いように思ったからである。

ＢＣは、この三要件を満す最高の場所と言える自慢のトイレである。ＡＢＣは、砂地の所が無く

大きな石を利用した見晴らしのすばらしい所で、心が落ちついた。C１は、見晴らしは申し分ないが物が尻につきそうで、落ち着かない場所に作らざるをえなかった。上部に登るにつれ条件が悪くなり、C２のキャンプを作る事が出来れば、さらにむつかしくなったであろう。三要素には含めなかったがキャンプ近くに作るのは言うにおよばない事である。

BCまでの長い道程

山森　欣一

３月27日、午前８時32分（北京時間）ラサの空港に降り立った。標高約3,648ｍ、快晴－２℃。ラサ市内の「ヒマラヤ・ホテル」に投宿。昼寝をすると胃に痛みと咳。夕方、散歩に出ると脚の下部にチクチクと刺すような痛みを感じたが、これはすぐに消えた。夜半、頭痛酷くポンタール２錠服用。

28日、７時40分明るくなる。９時半、パルスの指数は87、心拍数108。夕方、室温10℃。礼状のシール貼り中に寒くて発熱。

29日、眠れなく脈も速い。９時50分外気８℃。痔となり鮮血出る。１時間の梱包を終えて部屋に戻ると絶不調。熱有り、倦怠感大。バッファリン２錠服用。パルスは49、脈142。５回腹式呼吸をすると、62と104。夜、チベット登山協会による壮行会。地元の政府、報道関係含めて40名。チベット側隊長のドジブに顔にキスされたのは覚えているが、部屋に帰った記憶無し。何度か吐こうとした記憶が残っている。

30日、発熱。食欲無し。昼食抜く。パルスは電池切れ。６名の隊員は、高所順応のためラサの裏山へ。ホテルの窓から彼らがよく見えた。夕方、87年合同登山の仲間であったワンジャが、精力剤を持って激励に来てくれた。この日は断酒。

31日、全然眠れない。発熱。ポンタール２錠服用。朝食後、血圧97-140、体温36.9℃。16時前小雪舞う。夕方、トラックに荷物を積み込む。高所順応行動で、行き違いがあったようで、夕食時、話し合いをする。隊長の意向が浸透していないと感ずる。夜、ホテルのサウナに行く。部屋のお湯が出ないので無料サービス。蒸風呂に入り、早々に引き上げる。

４月１日、８時起床。少々熱っぽいものの、体調は回復し、よく眠れた。昨夜のサウナが効いた。旅立ちのカタとチンコー酒を戴いて、ホテル前で盛大な見送りを受けて９時40分ジープ３台（その内１台は、ガヤの中古北京ジープ）とトラック１台でラサを出発した。

ラサの喧噪を離れること僅か２時間半。4,800ｍの峠に登ったのは、正午を５分ほど廻っていた。眼下には、高原の外輪山に囲まれたヤムドク湖が、半分氷結したまま神秘的な姿で横たわっていた。湖面は、湖底の浅深を反映して緑、青そして氷結した白と色様々な表情を見せている。その向こうには、名峰ニンチン・カンサが、ゆるやかな二等辺三角形の姿で峠と対峙していた。この峠を登り降りするのは、84年ナムナニ行き（夏）、87年ラプチェ・カン行き（秋）、96年ニンチン・カンサ＆クーラ・カンリ（秋）についで４度目であるが、初めて峠からニンチン・カンサを望むことができた。春まだ浅き峠からの展望は、4,500ｍの高原に繰り広げられた地上のマンダラを彷彿とさせ、その模様はさながら一幅の絵を見るような光景であった。

13時半過ぎに峠を降りる。湖岸につけられたぬかるんだ道を行くと事故車が道をふさいでいた。湖を挟んで対岸遠くに、これから向かうクーラ・カンリ山群がうっすらと見えた。トラックと北京ジープは、速度が遅いので何時もその動向が気になった。チベットでは当たり前のことなのかも知れないが、管理された日本の感覚ではなかなかすぐに素直に同調できるものではない。それらを待

ちながら15時半、寒々としたランカズーの名前だけは勇壮な「雪域高峰飯館」に立ち寄り遅い昼食をとる。

17時少し前に再びキャラバンは出発した。しかし、すぐに北京ジープがエンコ。1時間ほど走ると頭上に砦のようなゴンパのあるタクルン村にさしかかる。村を抜けると平坦な河原の西側に沿って走る。10分位走る間に20〜40軒程度の村落が次から次へと現れる。この河原を1時間ほどで抜けると、19時イェ・ラ(5,030m)に着いた。峠からは、チベットで一番高い場所にあるプマヨン湖が寒々とした姿で目に飛び込んで来た。そして湖越しにクーラ・カンリの雄大な山群が広がり、目を奪われてしまったのだが。峠から湖の東岸に降り単調な湖岸の道を行く。戦後の日本の田舎によくあった洗濯板のような道路が続く。単調な景色の中に突然飛び込んで来たものがあった。それは湖岸近くに隆起した氷の一条の道であった。様々な造形の隆起が断続的に続く。正に御神渡りであった。

モンダ・カンリの姿が見え隠れする内に、やがて一条の枯れた川筋を登り切るとそこがモンダ・ラ(5,400m)であった。20時半。峠からは、目と鼻の先にクーラ・カンリ山群が広がり、先程の感激の百倍ほどの感動が胸を打つ。強風と寒気の中写真を撮り、ルートを目で追う。幸福な一時である。

ジープはヘッドライトを点けて峠のヘアピンカーブを下りる。中段で壊れた橋の横から川を横断。モンダに下り切る手前で後続の北京ジープを待つ。トラックと干場達が乗ったジープは、かなり前を先行しているようだ。暗く殺風景な道端に駐車したジープの中で待つのは侘しい。腹も減ってきた。太田が食糧を取り出した。

21時半ようやく北京ジープと合流しモンダに降りた。左に曲がると思いきやジープは右折してしまった。暗くて状況が分からないままジープは進む。我々の登る山のＢＣはこんなに西にあるのかと不安が募る。途中こんな時間のこんな所に何故いるのか不思議な酔っぱらいの爺さんに運転手が道を聞いてＵターンした。一度通り過ぎたその招待所についたのは23時。先行ジープは21時半に到着していたようだ。ベッドはあるものの布団がなくそれぞれ一夜を過ごす工夫をした。樋上、宮崎、吉田とウイスキーの水割りを飲む。24時過ぎになってコックの李が面条（ソバ）を作ってきた。干場を除き6人で多くないソバを食べる。山森、宮崎、太田、吉田はシュラフにくるまり、他はザックに足を突っ込んで寝る。ここは曲措（チュツォ）。

2日、昨夜はウイスキーの効用か比較的よく眠れた。7時45分起床。快晴で招待所から本当にすぐ眼前にクーラ・カンリ、カルジャン、ガンシャーラムの姿が見え絶景である。腹ごしらえの前にトラックから荷物を下ろす。ジープとトラックがラサに引き返すので手紙を託す。8時半、ドジブ隊長にＢＣの位置とルートを聞くと、目の前に広がる丘を指しながら説明し、明日ヤクで荷揚げをすると云う。隊長はガヤの運転するジープで県庁のあるロザに行った。

昼食は15時と云われたため、隊員はドジブ隊長が指さした丘の上を目指して出発した。途中まで付いて行ったが遅れたので諦めて引き返した。ところが帰って来た彼らの話しでは、このルートからＢＣをつくるのならばそれは86年の神戸隊と同じ場所ではないか、と指摘があった。我々が予定しているＢＣには幾つもの尾根を越えなければならないと云う。とてもヤクでは越えられないとのことだ。ドジブ隊長と協議するための資料を手分けして作る。

ロザから帰ったドジブ隊長に、今予定しているＢＣは我々のＢＣではないことを告げ、我々はモンダから登ることを話す。隊長も今朝話したルートではなく小学校から丘を越えて行くと湖があり、そこがＡＢＣだと云う。私たちが予定しているのもモンダがＢＣで湖の側がＡＢＣだ。そこで小学校はモンダにあるものとばかり解釈し喜んだ。夜はガヤやジャツォが来て日本酒を勧めた。明日はＢＣだと樋上、宮崎とウイスキーを飲む。他の隊員は慎重で飲まない。この日は、17時半頃から20時過ぎまで雪模様となった。

3日、7時50分起床。昨夜の雪で周りの山々は冠雪している。曇天で今にも降り出しそうな天候。ヤクではなく馬が来た。チュツォ郷の共産党書記が来て、出発を祝ってチンコー酒を振舞って呉れ

ると云うのだが、その器を仕舞ってある戸棚の鍵を持っている係が見つからず、カタを掛けたまま暫く待たされる。結局出発したのは10時になっていた。

昨日の打ち合わせのとおり、日本隊員と通訳は先に歩き出した。しかし、歩き出して40分ほどすると小学校があった。ひょっとして昨日隊長が話していた小学校とは、これのことではないのかと疑問になり、宮崎登攀隊長と通訳に伝令になってもらいチュツォに引き返してもらう。残ったメンバーはその場で待機。2時間半して宮崎は目の前の丘から降りて来た。悪い予感は当たり、馬やチベット隊員は目の前の丘を越えてＢＣ予定地に出発した後で、追いかけて隊長に追い付き、事情を話したところ、隊長は降りて来るとのことであった。

結局、この日は隊長と日本側は再びチュツォ郷に引き返した。ここで隊長は議定書の話しを出してＩ峰を登ることになっていると言い出す。経過を説明し、いずれにしてもＩ峰経由のルートでは登頂の可能性がないから、時間がかかってもモンダへ移動してⅡ峰～Ⅲ峰間のコルからのルートに入るべきである、と説得する。隊長も納得して明日は馬を連れてＢＣの撤収に向かうこととなった。

22時過ぎに夕食が出来、なんと布団が持ち込まれた。地獄から天国である。ついでに夜中になってＨＢ彗星まで見る事が出来た。

４月４日　曇天で明けたが、やがて雲が割れて、強い陽射しとなった。昼過ぎから西の強風が吹く。19時までに全部の人と荷が帰って来た。日本側の荷物を確認する。明日はトラックでモンダへ移動することになった。

４月５日　朝方東の空に二日月有り。９時50分トラックに荷を積み込む。背負子が一台無い。探すも出て来ないので諦めて出発する。ガヤの北京ジープにドジブ隊長と私、宮崎、ドブジェが乗り、残りはトラックの上である。

モンダを過ぎて東へ行き、11時40分ＢＣ地に到着。東の強風が吹き、太陽の恵みが無いので寒い中、２時間弱かかって３張の大テントとトイレを二つ作ってＢＣ建設を終えた。

ところが、荷物を数えてみると、日本側では２つの中プラパールと背負子が紛失しており、中国側でも卵300個と幾つかの荷が無くなっている事が判明した。このためドジブ隊長はＢＣ開きどころではなく悄気ている。

ＢＣのある所はモンダではなく、ザーリ郷であることが分かった。10年で行政組織も変わったのであろう。日本側だけでささやかにＢＣ開きを行った。近年の私のＥＸＰでは長い辛い時を経てのＢＣ入りとなった。

私のチベット

宮崎　久夫

ラサ、ポタラ宮殿。チベットは私の憧れの地であった。1995年、私はインドのサトパントで雪崩に合い九死に一生を得ながら生還した。ことわざに三度目の正直と言う話しがあるが私は今回は三度目の雪崩であった。

一度目は明神の宮川。二度目は谷川岳東尾根、そして今回のサトパント。この三度目の時は流されている時にいろいろと物が頭に浮きながら気持ち良く眠り、そして強い衝撃と共に目をさまして生きている事を確認をし、私は初めてこの時、この世に神様、仏様があるならば感謝をしたい。

そんな出来事から遠征終了後、ブッタの歩いた道をたどる旅に出掛ける。ブッタガヤ、ラージギール、クシーナガル、ルンビニと回るうちに少し仏教に興味を持ち始める。こうして旅をしている間、中国とネパールとの国境コダリにてチベット側の白い建物を目にした時、どうしてもチベット、ラサに行きたいという気持ちになり今度行く時はチ

ベットと決める。

年も明けて96年、協会から一通の手紙が届き封を開くと、ヤンラ・カンリの隊員募集が記入されており、私はおもわずコダリから見たチベットを思い出しすぐ会社との交渉に入り休暇をいただきヤンラ・カンリに参加を申し込む。

今から思えば初めてチベットの本を手にしたのは昭和48～49年頃、西川一三の「秘境西域八年の潜行」であった。昔の人達は死に物狂いでチベットに入ったと思うと今は飛行機で一飛びで行けるなんてこれも時代の流れと言うのかしら。隊員も決定し日本、中国との合同登山隊の準備にとりかかる。

準備を進めているうちに偵察に行った山森隊長から思いがけない話しを聞かされる。それは道路事情が悪いとのことであり、今年は無理かもしれないので別の山、クーラ・カンリではどうかとの話しであったが、隊員全員変更に異議なくクーラ・カンリに決まり早急にクーラの準備にと進める。

12月の富士山、正月の爺ケ岳東尾根と合宿を進め隊荷を中国に送り３月26日チベットへ向けて出発する。

北京、成都を経由して28日憧れのチベット、ラサに到着。飛行機から降りて第一声、「寒い」であった。赤茶けた山々、緑がほとんどない、空気は冷たく、空は紺碧であった。あーあ、これがチベットか、とうとう来たと言う実感がわいてくる。

空港から車で１時間半ほど走るとラサ市内に入り町はあまりにも近代化しているのでびっくりする。車の数、建ち並ぶビル。携帯電話を手にしている人、これがほんとうにあの禁断の地と言われたチベットなのかと不思議でならなかった。

ラサには３日ほど滞在するので買い出しや装備の点検をし出発を待つ。我々はヒマラヤホテルの３階に宿泊している。ホテルだからエレベーターは当然あるが、このエレベーター階で止まると階の床よりも20㎝位い高い所で停止するのでびっくりする。最初しらないで降りたらおもわず床が落ちたのかとおもわずアーとさけびながらころがり、なんだ、このエレベーターは！何んと言うホテルなんだといかりを感じるが、冷静に考えるとここは日本とちがい中国なんだと考えをあらためる。

それからエレベーターを使用しないで階段を登るが、なんと言ってもここは3650ｍの高地、一気に登る事が出来ず途中の踊場で小休止してから自分の室に着く。

市内を歩いて見ると町は近代化されているが、やはり貧富の差が大いに見られる。砂ボコリを気にしながらポタラ宮にたどり着く。写真しか見た事がないこの宮殿を目の前にてじっくりと眺める。赤茶色の山々に囲まれて白い建物が青空にくっきりと浮び実に素朴で素晴らしい光景であり、まるで大自然の絵画を見ている様な感じであった。今、思えば河口慧海もこの光景を見て感動したのであろう。宮殿の前には五体投地を繰り返している人もいれば何もしないでお参りをする人もおりこの差は何んだろうと不思議である。etc

今回、私は登攀隊長と言う大役をおおせつかり、自分には出来るか不安でいっぱいでしたが、合宿を積みかさねていくうちに隊員達の気心もわかり少しずつ不安が解消して行く。しかし、山を目の前にすると又、不安が走る。自分は無傷でこの隊員達を遠征終了まで守れるかと言う事である。隊長は上部の事はすべてお前にまかせると言ってくれるが、この言葉は私にとってすごいプレッシャーとなるが少しは安心する。それは、自分が育ったクラブでの事をやればいいんだと自分に言いきかせ行動を開始する。

Ｃ１建設後、Ｃ２がなかなか建設出来ずだんだん精神的に苦痛を感じる頃、ＢＣにいる隊長からメールが届きやがて落ち着きを取りもどす。結果的にはＣ２を建設出来ず敗退となるが、私にとって全員けがもせず下山出来た事はなによりもうれしかった。もちろん登頂出来ない事は言うまでもなく心残りではあるが、この遠征を通して山森隊長、樋上副隊長、松館さん、隊員の方々、チベット登山隊の皆さんと一緒に登山出来た事に感謝の気持ちでいっぱいです。有難度うございました。

第Ⅱ部

隊 務 報 告

事務局日誌
装備
食糧
医療
通信
記録・撮影
環境
天候概要

1．事務局日誌

1995年

4月上旬　チベット登山隊成天亮氏からラサで開催される「ヒマラヤ登山国際シンポジウム」に出席することを知ったが、その時に「合同登山」について協議したい、との手紙が届いた。候補の山はヤンラ・カンリとルンポ・カンリであった。

5月下旬　ラサにて成天亮氏とヤンラ・カンリで合同登山について基本的に合意した。

10月　ヒマラヤ288号誌上にて「合同登山隊員」募集開始。

11月　チベット登山協会から合同の目標の山を「ラトナ・チュリ7,035m」にしたいとの申し入れがあったが、二つの山で実施したい旨、回答した。

12月　チベット側に合同登山の目標を「ヤンラ・カンリ峰」だけにしたい旨、申し入れる。

1996年

3月　中国登山協会代表団が来日し、チベットとの合同登山について直接協議実施することについて了解を得る。

5月中旬　合同実施内容について未確定要素があるため、隊員希望者にたいする「説明・協議会」をルームにおいて実施。その後第1回合宿。
日本側の構成は、山森欣一（隊長）、松舘正義（副隊長）、樋上嘉秀、宮崎久夫、干場晃、太田康夫、伊藤政義、吉田健吾の8名。

6月　チベット側から正式に合同登山同意連絡。

9月　山森とチベット側ガヤの2名でヤンラ・カンリの偵察を行うが北面に入れず、南面に入るが雨のため途中まで。情報収集の結果、春にヤンラ・カンリに入山するのは困難と分かり転進先をクーラ・カンリⅡ（7,418m）とすることで合意した。登頂ルートは主峰西稜経由とする。

11月　クーラ・カンリⅡのルートを主峰経由ではなく北面未踏ルートとすることに決定。

12月　北アルプス爺ケ岳で冬山合宿。

1997年

1月　松舘正義副隊長家庭の事情で不参加決定。副隊長に樋上嘉秀決定。樋上宅にて食糧関係梱包。

3月　家族会＆壮行会実施。

2．装　備

今回の遠征は日本・西蔵友好登山であり、共同装備については大本営までは西蔵側が用意し、ＡＢＣより上部の装備は日本側が用意する事になったが、ＡＢＣで使用する燃料は30kgＬＰガス4本を西蔵側が用意してくれたので大いに助かった。隊員の個人装備に関しては、各自の今までの経験を生かしてまかせる事にし、西蔵側の隊員に関しても装備を支給する事はなかった。共同装備は、成都のデポリストを見て不足品を日本から持参したので現地での購入品は一切なかった。登攀装備に関しては、1986年のＨＡＪカルジャン隊の写真を参考にし準備を進めて来た。ＡＢＣ～Ｃ1間の複雑なモレーンと上部の雪面クレバス等を考えると、標識は風に強く丈夫で良く見える物をと思い、今回は土木用のテープ赤とオレンジ2色用意したが、これは意外と成果があった。固定用のロープはＰＰロープ8㎜を使用し、登攀の距離と高さを計り、これに合わせてスノーバーの数量を割出す。ハーケン類は、写真から判断すると雪壁と氷壁がほとんどであり、ロックハーケンは少々にしアイスハーケンとスノーバーを使用することにする。アイスハーケンは全てスクリュにしたが少し冷えるとスクリュの中に雪がつまり、なかなか入って行かないので苦労した。これからは筒の中はペンキかワックスを塗ると良い。スナーグは良く入って行く。テントはＡＢＣで8人用ドーム3張り、他のキャンプではエスパース4～5人用と新しく出来たエスパースⅡを使用する。炊事の圧力鍋が大きかったので、上部キャンプで使用するには各テント内の人数に合わせた方が良いと思った。ＥＰＩガスの量は、日頃自分達が冬山で経験した数を基本にし、1日4人で2個とした。尚、照明に関しては、デポ品のホヤがほとんど割れていたのでローソクを使用した。

■登攀装備

ザイル(9㎜)	2本
フィックスロープ(PP8㎜)	3000m
ハーケン(ロック)	10本（縦横各5）
ハーケン(アイス)	40本
スノーバー(60㎝)	130本
シュリンゲ(ナイロン6㎜)	150本
カラビナ	35枚
標識旗竿(竹)	60本
標識テープ(赤•オレンジ)	1200m
予備アイゼン	3
バイル	4本
ツェルト	2張
背負子	3台
予備ピッケル	1本
ジャンピング	1台
ボルト	5本
エジェクター	1本
予備紐（ナイロン6㎜）	60m

■幕営装備

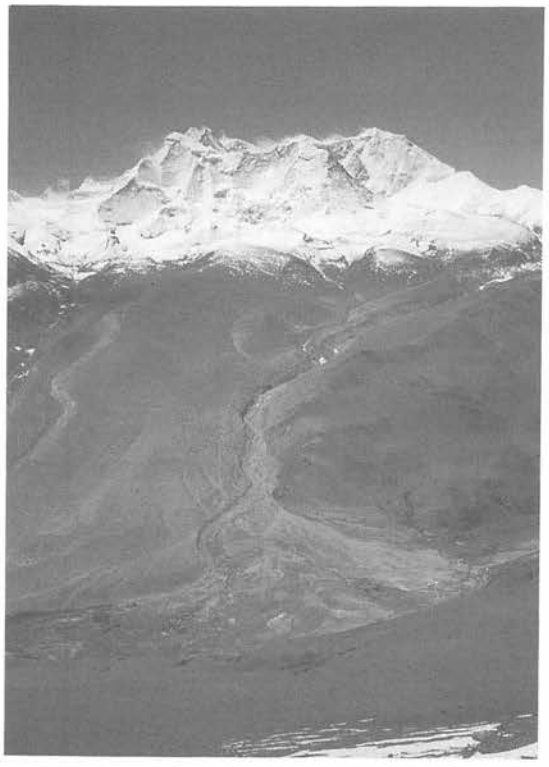
8人用ドームテント	3張
エスパーステント4人用	10張
ペフマット	24枚
テントペグ	100本
ハイピシート	6枚
スノースコップ	7本
ローソク	100本
巻紙	54個
雪落し用タワシ	12個
テント用予備ヒモ	80m
予備ポール(エスパース用)	2
強力ライト	2台
木工用ノコギリ	1本
雪袋	14枚
デポ品入れ袋ビニール(大)	7枚
BC用シュラフ	7

■炊事装備

ガスコンロヘッド(EPI)	22個
ガスカートリッジ(EPI)	95個
コンロ台(ベニヤ)	37枚
コッヘル(大)	3セット
コッヘル(中)	9セット
圧力鍋	9
タオル	17枚
ライター	35個
軍手	38
お玉	8
ヘラ	8
マナ板(ベニヤ)	8枚

■その他装備

電池(単1)	16個
洗濯バサミ	32個
工具	一式
高度計	1台
梱包用品	一式
ガモフ・バッグ	1



▲カルジャン（左の双耳峰）とクーラ・カンリ
BC対岸の山より

3．食　糧

（1）初めに

96年5月19日の第一回合宿（於：ＨＡＪ事務所）で樋上・干場・太田・伊藤の関西方面4隊員が食糧担当に決定。隊長から、

①キャンプ中の食糧は日本・チベット両隊のもの全てを日本側で準備する。

②食糧調達は極力寄贈によって賄い、不足分だけ購入する。従って隊員全員も極力寄贈依頼に協力する。

③現地へはアナカンで別送する。

④テイクイン・テイクアウトの基本に沿い、食糧においても包装等について最大限の留意をすると共に軽量化に努める事。

の4点の基本計画が示され、年長の樋上がヘッドとして今後の計画を進めることになった。

（2）食糧計画の推移

①第一回の食糧担当者会議を6月15日に大阪の樋上宅で行ない、たたき台としての食糧品目の洗い出しと食事メニューの素案を作成、これを次回の合宿で検討して貰う事にする。

②7月13日の第二回合宿で食糧計画案を検討して貰った結果、若干の修正の上で大旨の了解を受け、これに基づいて各品目の必要数量や具体的な調達方法に入る。なお、米は伊藤隊員からの寄贈で賄える事になった他、ウィスキーは山森隊長が、ラーメンは松舘副隊長が等と調達の目処が幾つか立つ。

③第二回食糧担当者会議を10月5～6日に石川県松任市の干場宅で開催、具体的な食糧品目と必要数量及び調達方法を検討。以降、この案に基づき第三回合宿での検討を得て実際の食糧調達に入る。

（3）食糧調達の実際

①各隊員からの寄贈分を除き、第二回食糧担当者会議終了時点ではあるスーパーマーケットから大旨の品目について寄贈貰える感触を得ていたが後日断わりの連絡が有り、当初隊長から指示の有った有名メーカー・問屋への寄贈依頼で賄う事になる。農協関係で多品目の寄贈をして貰った伊藤隊員からの依頼は別として多品目を分担して依頼するのではかえって纏まりがつかないと考え、食糧の保管・梱包作業所を受け持つ樋上が依頼を担当し、他の隊員にはサポートをお願いする。

②事務所から預かった往訪ノートに基づき、寄贈して貰えそうなメーカー・問屋に電話をし、承諾を得てから本部作成の寄贈依頼書と登山計画書を発送した。これは日中合同と言う特別な登山だったので可能になったので有り、景気後退のこれからは全てを寄贈に頼るのは難しくなって来るものと予想される。

③結果的には寄贈依頼した9割から寄贈を受けるが、景気の後退も有って寄贈実績の有る会社から断わられるケースも稀にあった。また新規に寄贈依頼した所も数社あるが、こちらは大旨好意的に寄贈頂いた。（別表：食糧調達表参照）

④各隊員からの寄贈品を含め、寄贈品の全ては樋上宅へ送付して貰い、集荷は1月上旬でほぼ終了、もってこれを梱包日まで保管した。

⑤最終的に寄贈して貰えなかったものについては樋上が購入し、費用は若干、隊費からの出費は仰いだものの友人からの寄付金で大旨賄った。

⑥野菜・果物・ジュースは現地（ラサ）にて購入した。

（4）食事メニュー

①最終的には朝食3メニュー、行動食4メニュー、夕食8食として、他に休養日やキャンプ開きの時等の特別食及びＢＣでの隊長食を準備した。

②チベット隊からは馴染めないと思われる納豆食は省いた。

③各メニューをローテーションする配分表を日本隊とチベット隊を分けて作成し、キャンプ期間に割り振った。

④水分を出来るだけ摂取するように各食事のお茶類はもとより各種のインスタント飲料を多めに準備した。

⑤各隊員の希望を纏め、嗜好品についても各種調達した。

（5）梱包と発送

①1月24日から26日の3日間、大阪の樋上宅で隊員全員による梱包作業を実施、日本・チベット隊及び各A隊・B隊別、各キャンプ別、日毎別の仕分け後にプラパールに梱包した。

②3日後にＨＡＪ事務所に梱包したプラパールを発送。現地への発送期限が直前に迫っていて心配したが何とか間に合い、一応国内における食糧担当としての任務を完了する。

（6）登山期間中の食糧管理と計画の遂行

①我々食糧担当の仕事は登山活動が始まってからと言うことになる。ところがＢＣを設営する直前に現地で雇った馬方に装備を梱包したプラパールを幾つか盗まれるというハプニングが起る。どうやら食糧が狙われたらしい。後にある程度まで取り戻すことが出来て、当初の計画には余り支障を来さなかったが、一時はどうなる事かと気を揉まされた。

②登山期間中の消化状況は大旨計画通りに進むが、途中で登山断念となり、それ以降は計画通りの配分をしなかったので不足するものと余るものとのアンバランスが生じた。特にＢＣでの滞在日数が大幅に増えた為に米の不足したのが残念であった。

③登山期間中の食糧管理や配給は当然食糧担当の任務であるが、全隊員から協力して貰えたので大量だったにもかかわらずスムーズに行えた。特に若い吉田隊員には苦労を掛けたように思う。

（7）食事メニューの内容

①朝食

A（納豆定食）
アルファ米、ひきわり納豆、味つけ海苔
みそ汁、たくわん、玄米茶

B（ラーメン定食）
インスタントラーメン、ソーセージ
切り餅、乾燥野菜、玄米茶

C（雑炊定食）
アルファ米、雑炊の素、みそ汁
キューリのきゅーちゃん、玄米茶

②夕食

A（カレー定食）
アルファ米、カレーの素、福神づけ
インスタントスープ、日本茶

B（肉・野菜炒め定食）
アルファ米、乾燥肉、玉ねぎ、乾燥野菜
インスタントスープ、日本茶

C（八宝菜定食）
アルファ米、八宝菜の素、みそ汁
漬物、日本茶

D（麻婆春雨定食）
アルファ米、麻婆春雨の素、漬物
インスタントスープ、日本茶

E（釜飯ＦＤ）
釜飯の素、インスタントスープ
鮭の骨缶詰、日本茶

F（山菜おこわＦＤ）
山菜おこわの素、みそ汁、海藻サラダ
サバ水煮缶詰、日本茶

G（ちらしずしＦＤ）
ちらしずしの素、インスタントスープ
鮭の骨缶詰、日本茶

H（ジフィーズ定食）
ジフィーズフーズ、インスタント漬物
みそ汁、日本茶

※Ｅ～Ｈは特別食

③行動食

A食
ビスケット、チョコレート、ハチミツ
飴、ナッツ、コンデンスミルク

B食
ビスケット、チョコレート、チーズ
飴、羊羹

C食
カロリーメート、チョコレート、飴
甘納豆、レーズン

D食
カロリーメート、チョコレート、飴
チーズ、酢昆布

（記：樋上　嘉秀）

97年庫拉崗日・食糧調達集計表

No. 1

品　目	寄贈依頼先	担当者	依頼数量		成否	寄贈実数		購入数		摘要	必要数
アルファ米		伊藤	120 g		○	120 g	375袋				372
ひきわり納豆（ＦＤ）	キャラバン		40 g	70袋	×			50 g	60袋	７掛にて購入	40
味つけ海苔	白子		4枚入	250袋	○	8枚入	12袋				4枚入で
〃	白子				○	56枚入	34袋				計340
味噌汁（生みそずい）	旭松食品		27 g	350食	○	27 g	360食			６種各60食	348
〃	㈱ニチナン				○		30袋			１食用	27
漬物（たくわん）	東海漬物		250 g	40本	○	250 g	40本		5本	時価で購入	45
ラーメン		松舘			○	84 g	150袋		30袋	時価で購入	179
切り餅	佐藤食品		50 g	300個	○	400 g	40袋			１袋８個入	240
ソーセージ		干場			○	23 g	200本		24本	時価で購入	224
乾燥野菜	ジフィー		18 g	20袋	△	30 g	20袋				
〃	宮坂醸造			50食	○	大袋	2袋				計50
〃（ラーメン用）	宮坂醸造		4食入	50袋	○	4食入	50袋				230
玉子インスタントスープ		伊藤			○		90袋				
〃	㈱ニチナン				○	40食入	6袋				
野菜スープ	㈱ニチナン				△	1食入	25袋				
わかめスープ	理研ビタミン			200袋	△	3食入	30袋				計425
雑炊の素(ちょっとぞうすい)	ヒガシマル		10 g	150食	○	10 g	180食			３種各60食	156
キューリのキューチャン	東海漬物		120 g	30袋	○	130 g	30袋				29
カレーの素（ＦＤ）	ジフィー		70 g	100袋	×			80 g	86袋	ＩＢＳイシイ	82
福神漬け	東海漬物		120 g	40袋	○	130 g	40袋				30
乾燥肉	ジフィー		30 g	50袋	×			40 g	43袋	ＩＢＳイシイ	44
玉ねぎ										現地購入	16
八宝菜（ＦＤ）	ジフィー		50 g	100袋	○	50 g	108袋				99
麻婆春雨	永谷園			80食	○	2食入	40袋				
〃		松舘			○	2食入	50袋				計53
中華丼他（ＦＤ）	ジフィー			36食	×			125 g	36袋	ＩＢＳイシイ	33
インスタント漬物	キャラバン		12 g	10袋	×			12 g	15袋	７掛にて購入	12
焼きそば	サンヨー		110 g	60袋	○	110 g	60袋				
〃		松舘			○	110 g	30袋				計76
タンメン		松舘			○	88 g	60袋				61
ホットケーキの素		伊藤			○	500 g	5袋				5
マッシュポテト	雪印乳業		200 g	10袋	○	200 g	10袋				6
海藻サラダ		伊藤			○	5袋入	20袋				55
〃	理研ビタミン		12 g	10袋	○	3袋入	10袋				
赤飯		伊藤			○	200 g	40袋				15
すし太郎（ちらし寿司）	永谷園		280 g	30食	○	4食入	40袋				16
コンデンスミルク	森永乳業		140 g	150本	○	160 g	144本				88
カロリーメート	大塚製薬		80 g	250箱	○	40 g	540箱			２本入	4本入126
ビスケット	ロッテ	山森			○	120 g	300箱			10ケ入	5ケ入165
チーズ	六甲バター		20 g	150個	○	20 g	400個				77
酢昆布	都昆布本舗		10 g	150個	○	25 g	100個				55
レーズン	買い入れ									時価で購入	71
羊羹	米屋		30 g	80個	○	60 g	80個				77
甘納豆	買い入れ									時価で購入	30 g 入×71
チョコレート	ロッテ	山森			○	50 g	600枚				半枚を291

品　目	寄贈依頼先	担当者	依頼数量		成否	寄贈実数		購入数		摘要	必要数
のど飴	ロッテ	山森			○	60 g	360個			1個11粒入	5枚入291
キャンディー	ロッテ	山森			○	60 g	120個				
ガム	ロッテ	山森			○	35 g	300個				30
ハチミツ		松舘			○	15 g	100本				88
ナッツ類	買い入れ									時価で購入	88
柿の種	亀田製菓			1箱	○	280 g	12袋			1袋6入	30
こつぶっこ	亀田製菓			1箱	○	150 g	12袋			1袋4入	30
焼きあげ	亀田製菓			1箱	○	12枚入	12袋				15
せんべい		松舘			○	5kg	2缶				2
醤油・スティックタイプ	買い入れ							8 g	90本	時価で購入	86
塩	買い入れ							300 g	2袋	時価で購入	2
マヨネーズ	買い入れ							300 g	3本	時価で購入	3
バター	雪印乳業		80 g	20本	○	200 g	24個				8
砂糖	㈱ニチナン		500 g	15袋	○	1kg	8袋				7
七味とうがらし	S＆B食品			5本	○	15 g	10本				2
胡椒	S＆B食品			5本	○	50 g	10本				2
練り梅	S＆B食品			10本	○	80 g	10本				8
練り明太子	S＆B食品			10本	○	80 g	10本				8
ふりかけ（さけばっぱ）		伊藤			○	4.5 g	180袋				100
〃　（かつお）		伊藤			○	4 g	162袋				100
干しダラ	買い入れ							150 g	3本	時価で購入	3
梅干し	買い入れ							320 g	3袋	時価で購入	3
缶詰め（鮭の骨）		松舘			○	260 g	48缶				20
〃　（鯖水煮）		松舘			○	260 g	72缶				16
〃　（蟹味噌）		樋上			○	160 g	4缶				4
カットわかめ		伊藤			○	50 g	19袋				10
とろろコンブ		伊藤			○	60 g	38袋				15
手作り佃煮		伊藤			○	150 g	38袋				8
FD食（山菜おこわ）		伊藤			○	70 g	18個				17
（五目釜飯）		伊藤			○	120 g	18個				16
（ちらしずし）		伊藤			○	120 g	18個				11
コーヒー	ネスレ日本		250 g	10本	○	250 g	12本			ネスカフェ・エクセラ	4
ブライト	ネスレ日本		300 g	5本	○	300 g	12本				4
スキムミルク	雪印乳業		500 g	6箱	○	500 g	10箱				
紅茶	日本紅茶			1000袋	○		800袋				770
日本茶	伊藤園		2 g	1000袋	○		400袋		50袋	時価で購入	440
玄米茶	伊藤園				○		800袋				757
ココア	買い入れ							190 g	4袋	時価で購入	4
ポカリスェット粉末	大塚製薬		74 g	30袋	○	74 g	30袋				26
キャベツ									8K	現地購入	
人参									2K	現地購入	
生姜									1K	現地購入	
じゃがいも										現地購入	
にんにく										現地購入	
リンゴ									5K	現地購入	
みかん										現地購入	
ジュース									20本	現地購入	

4．医　療

93年のムスターグ・アタ遠征の時からだから4度目、ＨＡＪでは3度目の医療担当である。医師が同行する遠征に巡り合わないから薬屋をしている身としては定番係はうんざりの感もしないではないが甘んじて担当させて貰った。

毎回の遠征で条件が異なるが、これまでの遠征がそうだったように今回もムスターグ・アタの実績を踏まえて準備を進めた。ただ今回は長期間・大部隊の上に医療品の全てを大量に日本から持参しなければならなかったのが大きな違いである。

（1）携行品の選定と調達

①これまでの実績に基づき、携行医療品一覧表を作成して合宿時に全隊員に提示・検討して貰った上で最終的な品目と数量を決定した。特に長期間の遠征なので不足しがちなビタミン類を補給するビタミン剤の数量を多目にした。（別表：医薬品及び医療用具リスト）

②必要品の調達は殆どを自店で賄えたが、自店で入手不可能な医薬品は医師を通じて入手した。

（2）健康自己管理への対処

現在はセルフ・メディケーションの時代と言われている。医療機関や医薬品に頼る前に、先ず自分の健康は自分で管理して行く事が一にも二にも大切な事で、高所登山においても例外では無い。そこで、健康自己管理について出発前と遠征中に全隊員に次の事をお願いした。

①出発までに虫歯等、罹患疾病が有れば完治して貰って置く事。

②次の健康管理手帳にも関係するが、体温を毎日測定して貰いたい為の体温計と、共同使用では疾病の感染が予想される目薬は各自で携行して貰いたい事。

③30項目程の「健康管理手帳」を作成して全隊員に配布、これに出国日から帰国日までの全日にわたり測定・記入して貰う事によって毎日の健康状態を個人でチェックして貰う事。

（3）医療活動と医薬品の使用状況

①ラサまでは格別の事もなく済む。

②ラサに入ると高度が一気に上がるだけに全員に大なり小なりの高度障害と思われる症状が見られる。特に隊長と吉田隊員に頭痛や発熱が強く鎮痛解熱剤を飲んで貰う。隊長は別として高度障害は若い人程早く出る傾向が有るように思う。

③ラサからＢＣまでは高度順応が順調だった為か、特別の高度障害は見られず。胃腸症状は下痢や便秘の訴えが有ったが軽微で、正露丸を多少使用した。

④登山活動が始まってからはビタミン剤と正露丸をテント内に置き、全員が適宜服用出来るようにした。結果はビタミン剤は全部使用、正露丸も半分以上使われた。太田隊員に少し高度障害。

⑤ＡＢＣからＣ１においては医療担当の私に高度障害と思える動悸とチェーンストークスが有り、不眠で体調不良の為、ＡＢＣステイで体調の回復を待つ。その間にダイアモックスを数日服用。

他の隊員にも発熱・頭痛・咳の症状が多少あったが、登山活動に支障を来す程のものではなかった。中で伊藤隊員が活動に鈍りの見えたのは、その後の活動が順調だった事からして高度順応の遅れが原因だと思われる。

（4）総括

全体的に見て余分に準備したつもりのビタミン剤が不足する程であったのを除き、携行した医療品は大半が残った。しかし、これは無駄に持ち込んだという事ではなく、それを使用せずに済んだところに意義が有り、登山活動に支障を来すような事が無かった事を感謝せねばならない。それだけ各隊員が健康に留意していたと言う現われであろう。何分にも長期間の海外遠征である。想定出来るあらゆるアクシデントに備えて準備するのが鉄則と確信する。因に我々の後で遠征したニンチン・カンサ隊は、私が依頼を受けてクーラ・カンリ隊の携行量から算出して準備した医薬品を不足する程使用したとの事である。

（記：樋上　嘉秀）

1997年
庫拉崗日隊

医薬品及び医療用具リスト

薬　効	医薬品名	容量	数量	用法・用量・1日	効能・効果
抗生物質	セフゾン	100mg	35CP	2カプセル・3回	インフルエンザ・肺炎・食中毒
	ケフラールカプセル			3～6カプセル・分3回	化膿症
抗菌剤	バクタ錠	400mg		4錠・分2回	尿路障害・尿道炎・膀胱炎
	タリビット	100mg		3錠～6錠・分2～3回	
風邪薬	パブロンゴールド		72CP	1回2カプセル食後3回	総合感冒薬
	顆粒		22包	1回1包食後3回	
	ブロン顆粒		33包	1回1包・3回	鎮咳・去痰
	ビノック鼻炎カプセル		36CP	1回1カプセルを食後3回	鼻炎（鼻水・鼻づまり）
	ブロントローチクール		48錠	1回1錠を4～6回（頓用）	喉の炎症・喉痛
鎮痛解熱剤	ポンタール	250mg	40CP	初回2CP、後6時間毎1CP	頭痛・歯痛・外傷後の疼痛・咽喉痛
	イブA錠	イブプロフェン	96錠	1回2錠・限3回、4時間以上	発熱・炎症の緩解・筋肉痛・神経痛
	ロキソニン		23錠	1回1錠・3回、頓用1回1～2錠	
	セルボン500(坐剤)	アスピリン500mg	10個	2～3個を1～3回に分けて	打ち身、捻挫時腫腸緩解・腰痛
胃腸薬	オフト顆粒		48包	3包・食後3回	総合胃腸薬
	ブスコパン	臭化ブチルスコポラミン10mg	50錠	1回1～2錠・3～5回	鎮痛鎮痙
	ガスター	20mg	29錠	1回1錠・2回食後、胃炎は1回	胃、十二指腸潰瘍・胃炎
	正露丸		400粒	1回3粒・3回、 むし歯には1～半粒	下痢・軟便・虫歯・整腸
止瀉薬	ミヤリッチ		36錠	1回3錠・2回	下痢・腹痛止め
	ロペミン	1mg	18CP	1～2錠（1日1～2回）	
便秘薬	大正漢方便秘薬		40錠	1～4錠・就寝前	便秘
利尿剤	ダイアモックス	250mg	50錠	1～2錠（1日1回）	浮腫
	ラシックス	40mg	10錠	1～2錠（1日1回）	乏尿
点眼剤	ベノキシール	塩酸オキシブプロカイン0.4%20ml	2本	数回、眼に直接点眼	目の痛み・雪目
睡眠剤	ハルシオン	0.25mg	5錠	1回1錠・就寝前	不眠症
精神安定剤	ソラナックス	0.4mg	20錠	1回1錠（1日3回）	精神不安
ビタミン剤	ビタミネンゴールド		120錠	1回2錠・1回	肉体疲労・食欲不振(総合ビタミン)
	コパE300		200CP	1回1CP・2～3回	凍傷予防・しもやけ(ビタミンE剤)
抗ヒスタミン	アバピロン錠		20錠	2錠・分2回	アレルギー症状
痔疾用剤	ヂナンコーハイ	2.5g	10個	患部に塗布又は肛門に挿入し注入	疣痔・切れ痔・痔出血
解毒剤	グルファミンC		20錠	1錠	二日酔い・薬物中毒
外用剤	ソルバミン	60ml	2本	1日数回患部に直接噴霧	殺菌・消毒
	シップ薬		20枚	1日1～2回患部に貼布	筋痛・打ち身・捻挫
	イタドリン液	20ml	2本	4回を限度に適量を患部に塗布	
	テラマイシン軟膏	10g	1本	適量を1～数回、患部に塗布	皮膚化膿
	アイロタイシン軟膏	12g	1本	適量を1～数回、患部に塗布	毛のう炎・よう・外傷等の疾患性びらん
	メモ	20g	2本	適量を1～数回、患部に塗布	外傷治療・火傷
		30g	1缶		
	コルデールG軟膏	5g	1本	適量を1～数回、患部に塗布	湿疹・蕁麻疹
	きずテープ		2種計50枚		
	ケナログ	2g	1本	適量を1～数回、患部に塗布	口内炎など口腔用
	大正口内軟膏	5g	1本	適量を2～4回、患部に塗布	
	コルヂール軟膏	20g	2本	適量を数回、患部に塗布	しもやけ・あかぎれ

品　名		数量			品　名	数量		
三角巾		2枚			綿棒	50本		
伸縮包帯		2本			ピンセット	2本		
カラー包帯		2本			ハサミ	2本		
ガーゼ1m		3枚			テーピングテープ	2巻		
テープ	紙製	2本			体温計	1本		
	布製	1本			血圧計	1台		デポ品使用
プロテクトパッド		1枚	たこ・疣・靴ずれ		カット綿20g	2包		

他にガモフバッグとパルスオキシメーター持参

5．通　信

日本無線（株）のご好意で８台の無線機を貸していただくことができました。登山においては各テントとの連絡が非常に重要で、この連絡がとれなければ人間から口と耳を取り除いたに等しいと思う。いかに通信が重要なウェートを占めるかは、通信機器が無いことを考えればよくわかる。交信は日に３回、１回約５～７分、出力１Ｗで２週間電池交換不要。電池は単三リチューム６本。

（記：干場　晃）

4月30日（水）

行動概要　宮部・太田・吉田 C1－6200－C1
干場・伊藤 C1休養
極上 ABC休養
昨夜からの東強風（冷風）が吹き続けている
午後からかなり強くなって来た。
一日中東強風　雪は出る
21:00 東強風おさまる　夕暮れ1時間

	8時	14時	20時
天候	◎	①	◎
気温	-2℃	10℃	4℃
	4320	4230	4260
	東強風	東強風	東強風

交信先	時刻	交信内容
ABC	12:00	(極上) 昨夜よく寝れたので調子見てC1へ戻る。
C1	8:00	(宮部) Aパーティ(宮部) はC2予定地見ず。今まで不調アイスフォールでの時間が時間切れたので出発。B(干場)は休養
	12:00	(干場) 宮部 昨日から4Pのはしごが雪にかぶって撤収中 6040m.
	14:00	(干場) 宮部 正午から1本のはしご。天候いいので行動する(6100m) C1からプラトーから落ちているアイスフォールの手前をルート工作中。
	16:00	(干場) 宮部から8本のはしご6,200mプラトーに出たが頂上までのプラトーはクレバス多く不可能と思われるので撤収する。 プラトーからのアイスフォールをやりすごしたら氷河上流からプラトーにトライしてはどうか。
	18:30	(干場) Aパーティ C1まで後と20分。19:30帰着
	19:30	(宮部) 頂上とカルのコル見えたが考えるのにトンネル3P～5Pでここは雪崩の巣で上にC2張るのは不可能。残りは中国ルートしかない(日数もないので出来る限り中国と一緒に行動してみ)

特記事項

ある日の交信記録（ＢＣの山森隊長用ノート）

6．記録・撮影

ビデオ撮影は、高額の撮影料を支払わねばならないため、当初は実施しない予定であったが、チベット登山協会との協議の過程で撮影料不要ということになり、ビデオカメラを持参することになった。このため、記録担当としてはビデオをメインとし、写真撮影は補助的な扱いとした。

1）ビデオ撮影

私のビデオカメラ使用経験は、たった一度だけ、しかも3年前である。操作に慣れるために、中国へ持参予定のカメラを借用し、2回の冬山合宿で使ってみた。その映像は梱包合宿の夜に見ていただき、アドバイスを受けた。また、かなりの低温下でもカメラ自体は作動するが、バッテリーの使用可能時間が非常に短くなることが分かり、撮影直前までバッテリーを衣服の内ポケットに入れて保温することにした。

この古いカメラ（以下「旧カメラ」と呼ぶ）で撮影する時には片目でファインダーを覗き、揺れないように息をころさねばならなかった。ところが、家族会・壮行会のため上京した際、隊長から新しいカメラ（以下「新カメラ」と呼ぶ）を渡された。新カメラは特にバッテリーが軽く、大きな液晶画面を顔から離して見ながら撮影出来るので息をころす必要が無いのが有難かった。新カメラ関係で今回持参した物は下記の通り。

カメラ本体	ソニーHi 8 Handycam	1
バッテリー	ＮＰ－Ｆ530	6
ＡＣ充電器		1
アダプタープラグ		4
（実際に使用したのはＢタイプ等２種）		
120分テープ		3
クリーニングテープ		1
遮光フード	（液晶画面用）	1
専用ビニールカバー	（簡易防水用）	1
ソフトケース		1
取扱説明書		1

旧カメラ一式も持参しラサ出発以降ＢＣまで使用して、上部で使う新カメラのバッテリーの温存を図った。

また、他のメンバーが使う場合に備えて、取扱説明書の必要最小限の内容をまとめたダイジェスト版を作成したが、撮影は結局ほとんど一人で行なった。

クンガ空港を出てラサに向かう車中から新カメラで撮影を開始し、ラサでの準備活動、順応訓練、壮行会等を撮ってラサ出発前夜までにバッテリーをフル充電。ラサ出発からＢＣまでは、バッテリーを使い切るまで旧カメラを使用。ここまで2台共特に問題無く使えた。

ところが次に新カメラを使い始めると2つの不具合が出て来た。

一つは、低温に弱いことである。低温下での撮影中、しばしばアラーム音を出して停止した。この時バッテリーを暖め直してやると再び動く場合もあるが、カメラ本体がある程度以上冷えると、どうにもならなかった。また、カメラは動いても、おそらく同期信号が正常に入らず、後述のように再生してみると正常な映像にならない場合もあった。これは撮影中に液晶画面を見ていてもわからなかった。

もう一つの不具合点は、明るい雪景色の中では液晶画面の画像が見えにくいことである。サングラスをかけたままでは、遮光フードを取り付けたり画面の明るさを調整したりしても全く見えず、サングラスを外すと微かに見えるといった程度であり、大体の見当をつけて撮影せざるを得ない場合も多かった。

登山の方はＣ２を出せず登頂を断念することになったが、撮影はその後も続き、撮影済テープは隊長シナリオの240分を大幅に越えて約340分となった。

現地ではバッテリー消費を最小限に抑えなければならないので「再生」は殆どしなかった。後に再生してみたところ、まともに撮れていない部分があまりにも多く、がっかりした。画面のふらつき、傾き、逆光といった初歩的なミスも多かった。強風の中で撮った部分は、テープか何かが振動するためか、両カメラ共、時々画面の振動が起こった。低温下で撮ったものは、同期ずれを起こす部分や何も写っていない部分もあった。

説明書に書いてある「使用温度」下限は新旧両

カメラ共0℃なので、率直に何らかの保温方法を考えるべきだったのだが、旧カメラの実績から判断して、新カメラもかなり低温まで使えるだろうと考えていた。やはり事前に冬山で使ってみるべきだった。

言訳が多くなってしまったが、とにかくテープをそのまま再生しても見るに堪えない部分が多い。(誰がこんなものを5時間半も見るか！）編集も難しいだろう。

撮影もれのシーンとしては、チベット隊員のトランシーバー交信や、「日本ルート」のルート工作等が揚げられる。後者については、自分自身がルート工作パーティーの一員として行動を始めると、最終地点で休憩するまでザックからビデオカメラを出す余裕が無かった。

帰路、ラサ～成都間の機上から見える山々を撮影することになっていたが、厚い雲に覆われて山は全く見えず、非常に残念だった。往路で撮っておかなかったのが悔やまれる。

尚、ビデオカメラのテープはラサでも買えるが、日本で買うより高く、種類も少ない。

また、中国のテレビ標準方式はＰＡＬであり、(日本はＮＴＳＣ方式）日本のビデオカメラで撮影したものを中国のテレビで見るには、ＮＴＳＣ方式に切り換えられるテレビを使わなければうまくいかないようである。

2）写真撮影

特に撮影担当は決めず、各自自由に撮り、隊長の指示に従って報告用に提出する事とした。

帰路、ラサのＤＰＥ店（ポタラの南に数軒あり）にネガフィルムを出すと、2時間後には写真が出来ていた。Ｌサイズ36枚×7本。値切って合計195元（約3,000円）であった。

余談になるが、ＢＣ近くの農家の主人を撮影した際、写真を送る約束をした。(残念ながら女性はカメラを向けると逃げるので、このようなことは出来ないのである。）彼が手帳にチベット文字で書いてくれた住所を、ラサのホテルの封筒に細心の注意を払って寸分違わず書き写しフロントで発送を依頼したのだが、ちゃんと届いただろうか。

3）筆記による記録

各自が手帳等に行動内容や担当業務の状況をメモし、報告書作成に備える事とした。

交信記録欄と気象欄を設けたノートを作成し、ＢＣの隊長に使用していただいた。

ＡＢＣ以上には市販のノートを置き、伝言、メモ、筆談、食糧の在庫管理等、自由に使えるようにした。通訳のいないＣ1では、このノートが日中のコミュニケーションに役立った。使われることの無かったＣ2用、Ｃ3用のノートは鉛筆と共にＢＣの近くに住む小学生の手に渡った。

（記：太田　康夫）

7．環　境

ゴミ処理計画

隊員全員がゴミに対して目を配り、建て前だけに終わらずに、各時点において計画を着実に実践するように相互にアドバイスしあう。

1)テイクイン（余分な物は持ち込まない）：隊荷の梱包前に実践。

①持参する食糧の個々の品物の包装は、必要最低限の物以外は全て取り外す。

②缶・瓶に詰められた品物は、なるべくプラスチック製のタンクに詰めかえる。

③予備食は頂上アタックの1回分のみとし、それ以外に必要な状況が発生した場合は、スペシャル食や間食を流用して対応する。

④固定ロープの算出の際は、当隊の隊員の力量を勘案し、必要量のみを持参する。

2)テイクアウト（持ち込んだ物は、処分或いは持ち帰る）：現場で実践。

①キャラバンの段階で、現地スタッフにゴミ処理の重要性を説明し理解してもらう。

②ＢＣ設営時に、ゴミ箱として可燃物、不燃物、生ゴミ用を設置。トイレとトイレットペーパー入れ箱を設置する。

③上部キャンプのゴミは、ＢＣに集積し処分する事を原則とし、下のキャンプに降りる時に必ず下ろす事を励行する。(溜めない)

④ＢＣでのゴミ処理は、こまめに定期的に実

施し、溜めて一度に処理しない事を心掛ける。(溜まると燃えかすなどが残り結局ゴミとなる)

⑤可燃物は焼却を原則とする。

⑥不燃物の中では、瓶類は地元民による再利用が可能なので、連絡官を介して処分する。缶、カートリッジ等は、つぶして処分可能な町まで下ろす。

⑦電池は処分可能な町まで下ろす。

⑧生ゴミは乾燥して焼却するが、残った物に関しては土中に深く埋める。

⑨トイレはＢＣ撤収時に埋める。ペーパーは焼却する。

3)焼却用燃料の持参

①ゴミ焼却用の燃料として灯油を持参し、薪等を使用しない。

結果

1)テイクインについては、日本での準備過程で行なえるので特に問題はなかった。

2)テイクアウト

①ゴミ焼却用に一斗缶を２個持参したので、ＢＣ、ＡＢＣでは焼却できた。Ｃ１のゴミはＡＢＣにて焼却した。ペーパー（トイレ）も同様焼却した。

②不燃物（缶、カートリッジ等）は、つぶしてラサまで下ろす。一部瓶等再利用。焼カスはＢＣにて埋める。

③生ゴミは、ＢＣでは土中に深く埋める事ができたが、ＡＢＣでは、穴が深くほれず、砂地の所にて砂をかぶせて処理する。一部ＢＣまで下げる。

④ＦＩＸロープ、スノーバー、ハーケン等はＣ１～Ｃ２のアップザイレンの支点として使用した数本を残し、すべて回収する事が出来た。ラサまで下ろし使用できる物は次回の遠征に再利用する。

⑤トイレは、ＢＣでは撤収時に完全に埋める事ができたが、ＡＢＣ、Ｃ１では石などでおさえて処理せざるをえなかった。

反省点

①キャラバン途中の民家のある招待所でも、可燃物は地元民に処理を依頼するのでなく焼却すべきであった。(処理を依頼したゴミがトイレにすててある現実を見たから)地元民は、ゴミを焼却する必要性を感じていないようである。(宗教上の事もあるので我々の考えをおしつけられないが…)

②荷下げするにあたり、地元民が必要としない物（ゴミ等）は日本隊が荷下げし、地元民が必要な物、すてようとしない物（今回では食糧等）を荷下げ依頼すべきであった。なぜなら合同登山の経験のあるチベット隊員ですら、日本隊の目の届かない所ではゴミをすてる行為をしたからである。(日本隊が下山時にみつけＢＣまで下す)

全体を通してテイクイン・テイクアウトに関して日本側はたえず意識して協力的であった。チベット隊を含め地元民に対して理解を求めるのがこれから遠征を考える隊には必要不可欠な事である。

（記：伊藤　政義）

▲食糧梱包前に余分な包装を外す

▲空き缶をつぶし、ゴミは焼却する(ＢＣにて)

クーラ・カンリ北面天候概要（1997年）

（観測地　ＢＣ・ザーリ村　標高約4,250ｍ）

時　間	8　時			14　時			20　時			
	天候	温度	風　向	天候	温度	風　向	天候	温度	風　向	備　考
4／ 7	◎	−8		◎	4		◎	−4		積雪２㎝
8	◎	−8		◎	−1		◎	−3		積雪５㎝
9	○	−11		◎	5		◎	−1	E強	朝焼け
10	◎	−5		◐	9	E強	◎	−2	E強	強力な東風
11	◎	−4	E	⊗	5		⊗	−2	無	ボタン雪
12	◐	−10	W	◐	13	無	◐	0	無	穏やかな日
13	○	−7	無	◎	11	W	◎	3	W	〃
14	○	−6	W	◐	12	無	◎	4	E強	夕西に積乱雲
15	○	−4	無	◎	9	E強	◎	2	E	午後小雪舞う
16	◐	−5	無	◎	5	無	◎	1	無	断続的な霰
17	◎	−1	無	◎	10	E強	◎	2	E強	午後東強風
18	◎	−2	無	◐	12	W	◐	2	W	風有・好日
19	○	−6	W	◐	13	E強	◎	3	W	周辺山融雪
20	◎	−2	E	◎	7	E強	◎	−1	E	曇天風冷たい
21	◎	−6	無	⊗	5	E	◎	−3	無	積雪1.5㎝
22	○	−9	W	◐	15	W	◎	1	E強	ドピーカン
23	◎	−6	無	◎	4	W	◎	0	無	小雪舞う
24	○	−6	W	◎	8	E	◎	0	E	午後東強風
25	○	−7	無	◐	10	E	◎	−1	E強	好日
26	◎	−2	無	◎	12	無	◎	2	無	小雪舞う
27	◎	−2	無	◎	12	E	◎	2	E強	全天曇り
28	◐	−2	無	◎	10	無	◎	5	E	積雪３㎝
29	◎	−2	W	◎	11	E	◎	5	無	昨夜22時西強
30	◎	−2	E強	◐	10	E強	◎	4	E強	一日中東強風
5／ 1	◎	0	E	◎	10	E強	◐	2	E	時々霰
2	◎	0	E	◐	13	E強	◎	5	E強	一時太陽に輪
3	◎	1	無	◎	15	E	◎	5	E	霰、小雪舞う
4	◎	1	E	◎	18	E	◐	6	E	暑い
5	◎	−1	無	◐	15	E	◐	8	E強	好日
6	○	1	無	◐	12	E	◎	8	E	好日
7	◎	2	E	⊗	5	E強	◎	2	E強	小雪舞う
8	◎	0	E	◎	12	E強	◎	3	E	好日
9	◎	0	E	◎	7	E	◎	3	E強	風の日
10	◐	−2	無	◐	12	E	◎	3	E	冷たい東風
11	○	0	無	○	16	E強	○	4	無	一番の好日

第Ⅲ部

資　料

クーラ・カンリ山群登攀小史
西蔵登山の和文参考資料一覧
中国の登山家たち

9－4　クーラ・カンリ（庫拉崗日・Kula Kangri）

＊山脈：クーラ・カンリ山群の最高峰。

＊位置：ラサ（3,658m）の南南西約167.5km。
［28° 13′ N，90° 33′ E］

＊アプローチ：ラサまでは北京～成都が飛行機で約2時間、成都～ラサが約1時間40分の旅。ラサからはカンパ・ラ(4,756m)に登り、ヤムドク・ツォからランカーズ(4,472m)を経て、ロー・ラ(5,198m)に至り、プマヨン・ツォの東岸を行き、モンダ・ラ(5,266m)に登り、モンダに下る。モンダから右折しロザション・チューの右岸を上流に向かいチュツォ(曲措)まで、ジープで一日行程である。ラサからチュツォまでの走行距離は約270km。尚、チュツォはナイとも呼ばれている。

＊ルートの所要日数：86年神戸大学隊は、北面に3月17日ＢＣを建設し、ＡＢＣ、Ｃ1を出して西稜に取りつき、3つのキャンプを作り4月21日初登頂に成功し、翌日にも登頂した。

＊山の概念：Ⅰ峰7,538m。（以下全て中国登山指南による）Ⅰ峰の東1.1kmに7,418mのⅡ峰。Ⅱ峰の北東1.4kmに7,381mのⅢ峰がある。Ⅲ峰の北北東2.9kmにはカルジャン(7,221m)があり、Ⅰ峰の西には氷河を挟んでジェシャン(6,676m)や三角錐のガンシャ(6,722m）がある。

＊通常の登山時期：春と秋

＊山名：クーラはチベット語で「天帝の峰」の意。カンリはチベット語で「雪山」の意。

＊小史：1958年、植物学者の中尾佐助がブータンのムナカ・チュー峠からクーラ・カンリの撮影に成功したが、その結果ブータンの最高峰と思われていたクーラ・カンリが中国領にあることが判明した。1963年ブータンからクーラ・カンリの撮影に成功したＡ．ガンサーの写真は、クーラ・カンリ、カルジャン、ゴウラカ・リ(6,497m)の見事なパノラマとなっている。

＊参考文献：天帝の峰に挑む（神戸大学西蔵学術登山隊）昭和63年8月10日刊　神戸新聞総合出版センター

登山の概要

■主峰（7,538m）

1985年

4月　偵察隊　神戸大学隊

翌年の本番のために3名で偵察に入る。4月12日北面ルウジョウの4,400m地点にＢＣ設営。15日Ｃ1を設営して上部偵察。19日北東側の谷の源頭まで探り、23日クーラ・カンリ・ラ(5,700m)を往復。25日に西面。26日から南面スーチ(色)に移動し、スーチ川の4,400mまで。

［隊長：緒方俊治(36)　長谷川浩(26)　尾崎久純(26)］

［天帝の峰クーラ・カンリを目指して（長谷川浩）　岳人464号　1986年2月号］

1986年

3月～5月　西　稜　神戸大学隊

初登頂を目指して3月15日北面の4,450m地点にＢＣ設営。西稜に取りつき4月2日Ｃ2を6,200m地点に設営。北稜とのジャンクション・ピーク下6,700m地点にＣ3を設けたのが11日。強風と天候不順に悩まされながらもルートをのばし、7,000m地点にある黒い岩は南面から廻り込み、20日に7,100m地点にＡＣを建設。翌日居谷、坂本、尾崎と報道の大谷が頂稜のナイフ・エッジを通過して初登頂に成功した。22日にも森長、長谷川が登頂した。

［隊長：岡市敏治(45)　平井一正(54)　緒方俊治(37)　北口博教(41)　居谷千春(35)　森長敬(32)　山田健(31)　坂本淳(29)　長谷川浩(27)　尾崎久純(27)　村山誠之(27)　船原尚武(25)　門井純(22)　柴田隆宏(22)

藤本一弘(31)　報道：大谷映芳(38)　酒井潮(40)　桜井勝之(26)　朝日教之(30)]

[天帝の峰に挑む　(昭和63年8月刊)]、[クーラ・カンリ初登頂（平井一正）「山岳第82年」日本山岳会　1987年12月刊]

1993年

4月～5月　北　面　フランス隊

北面4,450m地点にＢＣ建設。5,400m付近にＡＢＣを出して西氷河を調査。5月21日ペシェとジェシェ、セヴニエが6,000m峰に初登頂した。

[隊長：アルノー・ペシェ、リシャール・ジェシェ、ギー・セヴニエ他7人]

1994年

4月～5月　西　稜　オーストリア隊

4月14日カトマンズを出発し、北面5,200m地点にＢＣを建設。標高差2000mの北壁をねらったが、あきらめて西稜に転進。5,400m地点にＣ1、6,400m地点にＣ2を建設。5月1日クルトが神戸大に次ぐ登頂に成功。3日にもヘルムート、オットー、アントンの3名が登頂した。

[隊長：ペーター・ヴァインガルトナー(25)、クルト・エプナー、ヘルムート・オルトナー、オットー・プラッテナー、アントン・ドルフース]

1997年

4月～5月　西　稜　スペイン隊

初登頂ルートからの登頂を目指して10名で入山。キャンプ2つを出したが登頂を断念した。この隊は地図も持たず自分の登るルートも分からずＨＡＪ隊からの情報と地図の提供で登山。

■Ⅱ峰（7,418m）

4月～5月　北　面　日中合同隊

ＨＡＪとチベット登山協会の合同隊が初登頂を目指して4月5日ザーリ村4,250m地点にＢＣ建設。13日、5,400m地点にＡＢＣを出し、17日5,900m地点にＣ1を建設した。氷河を横断して、カルジャンとクーラ・カンリⅢ峰の間のプラトーに出るべくルートを開拓したが、プラトーの縁にあるクレバスに阻まれて登頂を断念した。

[日本側隊長：山森欣一(53)　樋上嘉秀(52)　宮崎久夫(47)　干場晃(45)　太田康夫(44)　伊藤政義(43)　吉田健吾(24)　中国側隊長：多吉甫(57)　戛亜(46)　多布傑(42)　加惜(37)　小斉米(32)]

[未踏峰クーラ・カンリⅡ峰（7,418m）] ―日中友好合同登山隊1997年の記録（本誌）

カルジャン（卡熱彊・Karangjiang）

＊山脈：クーラ・カンリ山群。

＊位置：ラサ（3,658m）の南南西約165km。

＊アプローチ：ラサまでは北京～成都が飛行機で約2時間、成都～ラサが約1時間40分の旅。ラサからはカンパ・ラ(4,756m)に登り、ヤムドク・ツォからランカーズ(4,472m)を経て、ロー・ラ(5,198m)に至り、プマヨン・ツォの東岸を行き、モンダ・ラ(5,266m)に登り、モンダに下りる。モンダから左折しロザション・チューの右岸を下流に向かいザーリ(扎日)まで、ジープで一日行程である。ラサからザーリまでの走行距離は約260kmである。カルジャン主峰、中央峰、北峰のいずれを攻める場合もＢＣはザーリに設けるのが便利である。

＊ルートの所要日数：86年ＨＡＪ隊は、北面のモンダの4,200m地点にＢＣを9月11日建設し、西稜に取りつき、10月14日に新郷ら3名が主峰の初登頂に成功し、16日にも登頂した。

＊山の概念：クーラ・カンリの北北東2.9kmにあり三つの峰がある。主峰は二つのピークに分かれており、両ピークの距離は350m。その間は深いキレットになっている。北が7,216m、南に7,221mの標高値が与えられている。(以下全て中国登山指南による)主峰の北1.7kmに7,018mの中央峰、中央峰の北西1.7kmに6,824mの北峰がある。また

カルジャンの東9kmにはゴウラカ・リ6,497mがある。

＊通常の登山時期：春と秋

＊山名：チベット語で「神嶺」の意。上流のチュツォの住民からはチュービエソン(Cyubeson)と呼ばれている。

＊小史：1963年、オーストリアのA．ガンサーがブータンのムナカ・チュー峠からクーラ・カンリの撮影に成功したが、そこには、カルジャン、ゴウラカ・リを含めた大パノラマが写し出されており、カルジャンの存在が明らかになった。

＊参考文献：ヒマラヤ名峰事典［ブータン・ヒマラヤ］平凡社・1996年11月刊

登山の概要

■主峰（7,216m）

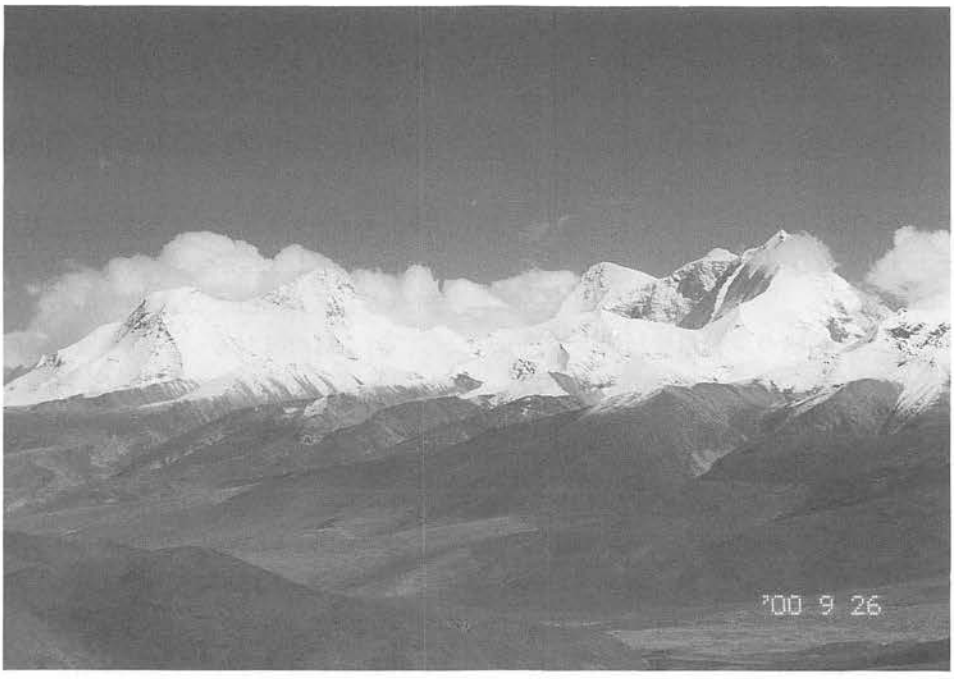
1986年

9月～11月　西　稜　ＨＡＪ隊

9月8日初登頂を目指して6人で入山。北面モンダ村の4,200m地点にＢＣ設営。14日ＡＢＣを5,300m地点に設営。氷河上の5,730m地点にＣ１を出して西稜に入り、6,150m地点にＣ２、10月11日6,580m地点に仮Ｃ３を設営。13日に7,000m地点にＣ３を設営して翌14日に岩崎、友田、新郷の3名が北のピークに初登頂した。南のピークへは深いキレットとなっており断念した。16日には宮崎、保坂も登頂した。

［隊長：新郷信廣(43)　友田健治(37)　宮崎勉(38)　保坂昭憲(38)　岩崎洋(26)　綾戸新二(21)］

［烈風の頂へ－卡熱彊峰初登頂の記録（ヒマラヤ182号　1987年1月号］



▲チュツォの上流ネイの裏山から見たクーラ・カンリ（右）とカルジャン（左）

西蔵登山の和文参考資料一覧

(1979年開放以後のもの)

1）チョモランマ（Qomolangma）8,848m＆チャンツェ（Zhangzi）7,553m

1.チョモランマに立つ（日本山岳隊・エベレスト中国ルート激闘全記録）読売新聞社　昭和55年6月25日　1,000円

2.チョモランマ・チベット（日本山岳会珠穆朗登山隊公式報告）講談社　昭和56年11月10日　5,400円

3.珠穆朗瑪登山1980（北壁及び北東稜の登攀）「山岳75年」日本山岳会　1980年12月1日　3,500円

4.みんなが頂上にいた（岡島成行）山と渓谷社　1983年2月1日　1,900円

5.雪煙をめざして（加藤保男）中央公論社　昭和57年11月15日　1,200円

6.果てしなき山行（尾崎隆）中央公論社　昭和58年7月20日　1,200円

7.チョモランマ峰・美しい女神（王富州）「月刊　人民中国」1982年6月号　200円

8.珠穆朗瑪峰（1979年チョモランマ偵察隊）横山宏太郎「岳人393号」1980年3月号

9.珠穆朗瑪峰登頂成功（江本嘉伸）「山と渓谷513号」1980年8月号

10.レポート「チョモランマ」編集部「岩と雪77号」昭和55年10月

11.絶頂への道・チョモランマ単独無酸素登頂（ラインホルト・メスナー）「山と渓谷520号」1981年1月号

12.エベレストに秘められた謎（ラルフ・パーカー）「山と渓谷522号＆523号」1981年3＆4月号

13.チベット北壁隊・苦闘の90日（カモシカ同人）「山と渓谷571号」1984年4月号

14.チョモランマ北壁への戦い　上・下（長谷川昌美）「山と渓谷599＆600号」1985年12月号＆1986年1月号

15.冬季・チョモランマ北壁（Topics）「山と渓谷598号」1985年12月号

16.チョモランマ単独行（ラインホルト・メスナー）山と渓谷社　1985年4月10日　2,200円

17.エベレスト物語「岩と雪97号」昭和58年8月号

18.カモシカ同人隊、チョモランマ北壁撤退「山と渓谷602号」1986年3月号

19.魔頂チョモランマ（今井通子）朝日新聞社　1986年8月　1,300円

20.東北東稜に挑んだダグ・スコット隊（湊周介）「岳人487号」1988年1月号

21.チベット友誼の華長存－1986年チャンツェ峰合同登山研修隊報告書－（第6次日中合同登山技術研修会）1986年8月24日

22.チョモランマ北峰・章子峰登頂（日本中国合同登山研修隊）「岳人471号」1986年9月号

23.端午の節句にエベレスト山頂で握手「岳人488号」1988年2月号

24.冬のチョモランマの咆哮（長谷川恒男）「山と渓谷634号」1988年5月号

25.チョモランマ交差縦走に成功「岳人492号」1988年6月号

26.ドキュメント・チョモランマ、5月5日（神長幹雄）「山と渓谷637号」1988年8月号

27.大量12人が山頂に立つ（岡島成行）「岳人493号」1988年7月号

28.中国・日本・ネパール三国合同チョモランマ交差縦走1＆2（中国登山協会）「岳人496号＆497号」1988年10月＆11月号

29.中・日・ネ三国友好登山隊（大塚博美）「山岳第83年」日本山岳会　1988年12月20日

30.チョモランマ峰西稜（1987年秋）川上隆「山岳第83年」日本山岳会　3,500円

31.踏跡第7号（防衛大学校山岳会珠穆朗瑪峰登山報告）防衛大学山岳会　昭和63年9月

32.第三の女神（松本圭一）1989年6月

33.チョモランマ見果てぬ夢（長谷川恒男）「山と渓谷644号」1989年３月号
34.珠穆朗瑪峰登山計画「ヒマラヤ213号」1989年８月号
35.チョモランマ北壁（ＨＡＪ珠穆朗瑪峰登山隊）「ヒマラヤ218号」1990年１月号
36.チョモランマ峰カンシュンリッジ（平野真一）「山岳第86年」日本山岳会　1991年12月７日　3,500円
37.ふたりのチョモランマ（貫田宗男）「山岳第86年」日本山岳会　同前
38.チョモランマ・サガルマタ1988（中国・日本・ネパール1988年チョモランマ・サガルマタ友好登山隊）読売新聞社　1989,５　5,150円
39.禁じられた岩壁　エヴェレスト東壁新ルートの記録1988年「ヒマラヤ219号」1990年２月
40.チョモランマ／サガルマタ友好登山隊報告書（日本山岳会）1990／５
41.たったふたりのチョモランマ（貫田宗男）「山と渓谷674号」1991年９月号
42.生と死のはざまに立ったたった２人のチョモランマ「岳人543号」1991年９月号
43.エベレスト最後の課題・未踏のカンシュン稜に挑む「世界最高峰の知られざる顔（明治大学チョモランマ遠征隊）」「岳人545号」1991年11月号
44.二人のチョモランマ（貫田宗男）山と渓谷社　1992年２月　1,500円
45.日本・カザフスタン友好チョモランマ登山報告（同登山隊）1993年２月20日
46.エヴェレスト北東稜（もうひとつの報告）「岩と雪158号」1993年６月号
47.チョモランマ北東稜（大宮求）「山岳第88年」日本山岳会　1993年12月４日
48.エヴェレスト初登頂40周年「岩と雪158号」1993年６月号
49.もう一つのエヴェレスト、チョモランマトラバース「ヒマラヤ262号」
50.エベレストが二メートル低くなった話（木崎甲子郎）「山601号」1995年６月号
51.未踏の北東稜からエベレスト登頂!!（神崎忠男）「山602号」1995年７月号
52.日本大学エベレスト登山隊、未踏の北東稜から初登頂「山と渓谷720号」1995年７月号
53.エベレスト北東稜を初完登「岳人577号」1995年７月号
54.日本大学山岳部隊未踏の北東稜からエベレストに登頂「山と渓谷721号」1995年８月号
55.タクティクスの勝利（古野淳）同上
56.より強く、より高く（アリソン・Ｊ・ハーグリーブス）「山と渓谷722号」1995年９月号
57.日本大学エベレスト登山　－ピナクルを越えて－　仮報告書（同隊）
58.日本大学エベレスト登山隊・1995 北東稜登山報告書（同隊）1996年３月31日
59.福岡珠穆朗瑪峰登山隊報告書（同隊）
60.珠穆朗瑪峰（立正大学体育会山岳部）
61.戸高夫妻のチョモランマ日誌（戸高雅史・優美）岳人609号　1998年３月号
62.大地の女神　チョモランマとの邂進（戸高雅史）山と渓谷752号　1998年３月号
63.チョモランマ98年５月　昭和山岳会エベレスト登山隊、日本勤労者山岳連盟チョモランマ登山隊の記録から「山と渓谷756号」1998年７月号
64.世界の天辺の贅沢な思い（日本勤労者山岳連盟チョモランマ登山隊）「岳人614号」1998年８月号
65.エベレストより高い山へ（昭和山岳会エベレスト登山隊）「岳人614号」1998年８月号
66.短期間に８人登頂の新記録（チョモランマ登山報告①～③　［登山時報283号～285号」1998年９月号～11月号
67.検証 高所登山成功へのプロセス（上村博道／山本正嘉）「岳人618号」1998年12月号

２）マカルー（Makalu）8,463ｍ＆チョモ・レンゾ（Chomo Lonzo）7,790ｍ

1.天空にのびる長大な岩稜を目指して（山本宗彦）「岳人572号」1995年２月号
2.マカルー峰東稜より登頂成功!!（重廣恒夫）「山601号」1995年６月号
3.マカルー東稜・登頂記（山本篤）「山602号」1995年７月号
4.マカルー東稜に挑んだ日本山岳会隊、チベッ

ト側新ルートから登頂成功　同上　95.8
5.マカルー東稜初登に成功「岳人577号」1995年7月号
6.マカルー東稜初登の軌跡（山本宗彦）「岳人578号」1995年8月号
7.マカルー登頂の報を聞いてー若い隊員の飛躍を確信してー（山田二郎）「山603号」1995年8月
8.ヒマラヤに挑むー私の登山観ー（藤平正夫）「山605号」1995年10月号
9.マカルー東稜（日本山岳会マカルー登山隊）1997年9月20日　山と渓谷社　4000円＋税
10.微笑んだ女神「チョモ・レンゾ」立教大学「山と渓谷703号」1994年2月号
11.手作りの立大隊、新ルートからチョモ・レンゾ登頂（高橋克昌「山と渓谷703号」1994年2月号
12.烈風のチョモ・ロンゾ（武石浩明）「岩と雪164号」
13.チョモロンゾ峰　中国側からの初登頂　立教大学チョモロンゾ登山隊・学術調査隊の記録（鰺坂青青）「山岳第89年」1994年12月3日刊
14.白き咆哮（立教大学チョモロンゾ登山隊・学術調査隊1993年報告書）「同隊」1994年10月刊

3）チョー・オユー（Cho Oyu）8,201m、チョー・ウィ（Qowoyat）7,354m、ラプチェ・カン（Labuche Kang）7,367m、スークァンリ（Sigugag Ri）7,308m、メンルンツェ（Menlungtse）7,175m

1.卓奥友峰登頂（張俊岩・成天亮）「ヒマラヤ177号」1986年8月号
2.チョー・オユーの登頂と滑空（カモシカ同人）「岳人486号」1987年12月号
3.私は登り、あなたは飛んだ（カモシカ同人）「岳人486号」1987年12月号
4.チョー・オユーから飛ぶ（高橋和之）「クライミング・ジャーナル　33号」1988年1月号
5.チョー・オユー1985（三谷統一郎）「山岳第81年」日本山岳会　1986年12月20日
6.チョー・オユーのパラグライダー・フライト（高橋和之）「山と渓谷629号」1987年12月号
7.ヒマラヤを翔ぶ　チョー・オユー8,201m（高橋和之／今井通子）未来社 1,800円 1988
8.8,000m峰14座完登を目指す山田隊（日本ヒマラヤ協会チベット登山隊）「岳人500号」
9.2つの8,000m峰連続登頂計画「ヒマラヤ204号」1988年11月号
10.8千米峰連続登頂ーシシャパンマ、チョー・オユーー「ヒマラヤ208号」1989年3月号
11.チョー・オユーとシシャパンマ（ヴォイチェフ・クルティカ「岩と雪145号」1991年4月
12.チョー・オユー峰登頂（芳賀孝郎）「山岳第86年」日本山岳会　1991年12月　3,500円
13.8,000mの女神の峰へ（永田秀樹）「岳人517号」1990年7月号
14.幾つになっても登りたい　シルバータートルのチョー・オユー（渡辺玉枝／遠藤京子）G「岳人535号」1992年1月号
15.50歳以上のチョー・オユーの登頂（池田錦重）「山岳第87年」日本山岳会
16.50歳の8,000m峰チョー・オユー無酸素挑戦記（近藤和美）「登山時報217号〜218号」1993年3月〜4月
17.チョー・オユー峰登頂1991（石川富康）「東海山岳№6」1994年2月
18.チョー・オユー峰〜2つのビッククライミング（遠藤由加／山野井泰史）「岳人570号」1994年12月号
19.ふたりのチョー・オユー南西壁（長尾妙子＋遠藤由加）「山と渓谷713号」1994年12月号
20.チョー・オユー南西壁に単独で新ルート開拓8,000メートル孤独の闘い（山野井泰史）「山と渓谷714号」1995年1月号
21.チョー・オユー　アルパイン・スタイル（山野井泰史＋長尾妙子＋遠藤由加）「岩と雪168号」1995年2月号
22.チョー・オユー登山（深瀬一男）「山597号」1995年2月号
23.運動生理学の成果と陥穽（日本チョー・オユー学術登山隊・山本正嘉）「山と渓谷721号」
24.8千メートル峰、登山タクティクス解明への試み（山本正嘉）「岳人578号」1995年8月号
25.秋田から8千米峰へ　チョー・オユー峰（秋

田チョー・オユー登山隊1995）1995年11月
26.チョー・オユー全員登頂（上）（下）（佐藤信二）「登山時報259号～260号」1996年９月号～10月号
27.8,201ｍの頂きに８人全員立った（札幌中央勤労者山岳会）
28.チョー・オユー峰（8,201ｍ）登頂報告（泉州山岳会葛城特別号）1997.７～10
29.拉普契干峰偵察報告「ヒマラヤ181号」1986年12月号
30.日中友好ラプチェ・カン峰合同登山計画「ヒマラヤ190号」1987年９月号
31.ラプチェ・カン初登頂「ヒマラヤ194号」1988年１月号
32.15人のサミッター（山森欣一）「山と渓谷630号」1988年１月号
33.ラプチェ・カン初登頂「岳人488号」1988年２月号
34.友好の白き頂ラプチェ・カン（日本ヒマラヤ協会）1988年４月
35.ラプチェ・カンⅡ（7,072ｍ）初登頂－1995年スイス隊の記録－「ヒマラヤ294号」1996年５月号
36.乔烏衣登山計画「ヒマラヤ179号」1986年10月号
37.乔烏衣登山報告「ヒマラヤ182号」1987年１月号
38.端正な未踏峰チョー・ウィ登頂（日本ヒマラヤ協会隊）「岳人476号」1987年２月号
39.乔烏衣登山報告書（日本ヒマラヤ協会チョー・アウイ登山隊1986年実行委員会）1986年11月15日
40.乔烏衣峰7,354m（日本ヒマラヤ協会、チョー・アウイ登山実行委員会）1987年７月
41.四光峰の風－チベットの白き頂きに立つ－（大阪市立大学日中友好学術登山隊）1990年７月
42.秘峰［メンルンツェ］初登頂（アンドレイ・シュトレムフェリ）「岩と雪157号」1993年４月号

４）シシャパンマ（Xixabangma）8,027ｍ＆ポーロン・リ（Porong Ri）7,292ｍ、カン・ペン・チン（Can Ben Chen）7,281ｍ、リスム（Risum）7,050ｍ

1.シシャパンマ1981年・春（日本女子登山隊の記録）女子登攀クラブ 1981年９月　2,200円
2.女たちの山（シシャパンマに挑んだ９人の決算）落合誓子　山と渓谷社　昭和57年12月10日　980円
3.シシャパンマ峰・氷美の世界（張俊岩）「月刊　人民中国」1983年１月号
4.女だけのシシャパンマ（北村節子）「山と渓谷521号」1981年２月号
5.手記・私ひとりのシシャパンマ（田部井淳子）「山と渓谷531号」1981年８月号
6.麗峰シシャパンマに立つ（北村節子）「山と渓谷531号」1981年８月号
7.改造人間シシャパンマと戦う（悪天に阻まれた速攻登山」原　真　「岳人427号」1983年１月号
8.ドキュメント「速攻登山」（加藤幹敏・原真）「東京新聞出版局」1984年３月　2,200円
9.現代ヒマラヤ登攀史（編集部）「岩と雪111号」昭和60年８月号
10.チョー・オユーとシシャパンマ（ヴォイチェフ・クルティカ「岩と雪145号」同前
11.60歳の８千メートル峰登頂記（中島道郎）「山544号」1990.11.20
12.毎日新聞、８千メートル峰「無酸素」登頂の報道記事に思う（中島道郎）「山545号」1990年11月号
13.還暦男二人、八千米峰に登るの記（中島道郎）「山岳第85年」日本山岳会　1990年12月　3,500円
14.京都大学ヒマラヤ医学学術登山隊（シシャパンマ隊）報告（松沢哲郎）「山岳第86年」日本山岳会　1991年12月　3,500円
15.遠き嶺シシャパンマ（長野県山岳協会創立30周年記念登山隊）1992年９月
16.福岡支部創立35周年シシャパンマ隊報告（日野悦郎）「山岳87年」日本山岳会　1992年12月５日
17.希夏邦馬峰　立正大学山岳部　1993年３月
18.50歳の8,000ｍ峰シシャパンマ無酸素挑戦記

(近藤和美)「登山時報219号」1993年5月号
19.シシャパンマ登頂1989(湯浅道男)「東海山岳№6」1994年2月1日
20.女たちの地球山旅　秘境シシャパンマへの凱旋」(北村節子)「岳人556号」1993年10月号
21.イェジ・ククチカ残されたシシャパンマに西稜から登頂(坂下直枝)「山と渓谷629号」1987
22.XIXABANGMA　1980年プレ・モンスーン西ドイツ隊の記録「岩と雪83号」1981年8月
23.遥かなるチベット　希夏邦馬峰登頂(愛知学院大学山岳会)1990年2月
24.雪豹同人シシャパンマ登山報告(日本勤労者山岳連盟)
25.シシャパンマ登頂レポート1～5(労山・雪豹同人希夏邦馬峰登山隊「登山時報239号～243号」1995年1月号～5月号
26.再起の山　シシャパンマ(小西政雄×松田宏也)「山と渓谷725号」1995年12月号
27.安堵、そして充実のとき(松田宏也)「岳人582号」1995年12月号
28.シシャパンマ　1995年秋シシャパンマ峰登山報告書(Y.M.Sタートル倶楽部)1996年2月刊
29.Der Bergmorgen　3号(故　和田実君追悼号Porong Ri報告)大分R.C.C　昭和58年5月17日
30.ポーロン・リ登頂(梅木秀徳「山岳第78年」日本山岳会　1983年12月　3,000円
31.チベット高原学術登山隊1982概要報告書　京都大学学士山岳会
32.カンペンチン(森本陸世)「山岳第78年」日本山岳会　1983年12月　3,000円
33.チベット旅情(カンペンチン初登頂)斉藤清明　芙蓉書房　昭和58年7月15日　1,500円
34.チベットをゆく京都大学学士山岳会(カンペンチン登頂と学術調査82,3～5)レポーター永田秀樹「岳人421号」1982年7月号
35.未踏峰「発見・消失・再発見」の顛末〈リスム登山学校〉(近藤和美)「登山時報266号」1997年4月号
36.リスム峰初登頂報告(上)(下)(近藤和美)「登山時報270号～271号」1997年9月号～10月号
37.ささやかな初登頂リスム峰(近藤和美)「岳人602号」1997年8月号
38.芒拉 STEI'96報告書(滋賀県高等学校体育連盟登山部)1997年3月31日

5)ナムチャ・バルワ(Namcha Barwa)7,782m＆ギャラ・ペリ(Gyala Peri)7,294m

1.ナムチャバルワ(水野勉)「ヒマラヤ128号」1982年7月号
2.ナムチャバルワ峰登頂を目指して(李舒平)「岳人451号」1985年1月号
3.ナムチャバルワ(伊東享)「山と渓谷597号」1985年11月号
4.最高峰ナムチャバルワとヤル・ツァンポー大屈曲点周辺の山々(山森欣一)「岳人464号」1986年2月号
5.東チベットの大湾曲部と幻の高峰(山森欣一)「山と渓谷601号」1986年2月号
6.ギャラ・ペリとナムチャバルワ(伊東享)「岳人464号」1986年2月号
7.チベットの秘峰・南迦巴瓦峰(王振華)「ヒマラヤ184号」1987年3月号
8.ヤルツァンポ河大湾曲部調査(楊逸疇、丘睦美訳)「ヒマラヤ94号」1979年9月号
9.ナムチャ・バルワへの道1～3「ヒマラヤ224号～226号」1990年7月～9月号
10.神秘のグレート・ベンド　ナムチャ・バルワ日本ヒマラヤ協会　1991年1月1日
11.ナムチャバルワ峰偵察隊第1～2報(重廣恒夫)「山547＆548」1991.1～2
12.NAMCHA BARWA　鷹が両翼を広げたようにそそり立つ未踏の秘峰「岳人525号」
13.「ナムチャバルワ」いかにして登るか(和田城志)「岩と雪147号」1991年8月
14.幻の山　ナムチャバルワを飛ぶ(迫田泰敏)「山と渓谷675号」但し写真は裏焼き!
15.ナムチャバルワ峰偵察報告(重廣恒夫)「山岳第86年」日本山岳会　1991年12月 3,500円
16.ナムチャバルワ通信(重廣恒夫)「山557～560号」1991.10～92.1
17.大鷹を思わすチベットの秘峰、ナムチャバル

ワへの挑戦（日中合同登山隊）「岳人537号」1992年３月号
18.1991年ナムチャバルワ峰合同登山（重廣恒夫）「山岳第87年」日本山岳会
19.ナムチャバルワの気象（奥山巌）「山岳第87年」1992年12月５日
20.チベットの秘峰ナムチャバルワ初登頂（日中ナムチャバルワ合同登山隊）「岳人548号」1993年２月号
21.日本・中国ナムチャバルワ合同登山「山岳第88年」日本山岳会　1993年12月
22.ナムチャバルワ第六信～八信（重廣恒夫）「山569～571号」1992年10月号～12月号
23.ナムチャバルワ初登頂　読売新聞社　1994年10月30日刊　非売品
24.7,000ｍの未踏峰をめざして（ギャラ・ペリ偵察）「岳人463号」1986年１月号
25.秘峰ギャラ・ペリ偵察1985「ヒマラヤ170号」1986年１月号
26.謎の大河にそびえる幻の高峰「ギャラ・ペリ」（日本ヒマラヤ協会隊）「山と渓谷618号」1987年２月号
27.加拉白里登山計画「ヒマラヤ179号」1986年10月号
28.謎の河の白い頂（ＨＡＪギャラ・ペリ登山隊）「ヒマラヤ183号」1987年２月号
29.謎の河の秘峰ギャラ・ペリ　日本ヒマラヤ協会　昭和62年９月１日

６）ナムナニ（Namunani）7,694ｍ＆カン・リンポチェ（Kang Rimpoche）6,656ｍ

1.納木那尼峰（日中友好納木那尼合同登山隊）「岳人447号」1984年９月号
2.西チベットの未踏峰ナムナニに照準「岳人447号」1984年９月号
3.風雪は人を磨く（李舒平）「岳人464号」1986年２月号
4.日中合同納木那尼峰先遣隊1984報告書　日中友好納木那尼峰合同登山隊
5.ナムナニ（日中友好納木那尼峰合同登山隊）毎日新聞社　1986年６月　6,900円
6.聖山巡礼（玉村和彦）山と渓谷社　1987年５月　1,800円
7.聖地巡礼とナムナニ峰偵察・1984年「年報・ＨＩＭＡＬＡＹＡ　３月号」日本ヒマラヤ協会　1986年９月15日
8.ナムナニ峰登頂（日本山岳会・福岡支部）1998年８月21日
9.ナムナニ峰登頂と辺境の旅（浦一美）「山643号」1998年12月20日号
10.チベット２座連続 カバン（6,717ｍ）＆ナムナニ（7,694ｍ）登頂計画「ヒマラヤ333号」1999年８月号
11.未踏の山・辺境の山第５回「カイラス」（加藤洋）「岳人409号」1981年７月号
12.聖地巡礼カイラスの旅「ヒマラヤ155号」1984年10月号
13.チャンタン高原から聖地巡礼の旅（山森欣一）「ヒマラヤ156号」1984年11月号
14.西蔵・聖地カイラス巡礼（ＮＨＫ取材班）日本放送出版協会　昭和60年６月１日 1,700円
15.チャンタン高原と聖地巡礼（山森欣一）「岳人450号」1984年12月号
16.神の山　カイラス（五百沢智也）「山と渓谷583号」1985年１月号
17.聖なる山「カイラス」へ（貫田宗男）「山と渓谷624号」1987年７月号
18.チベットの霊山　カイラス（足立隆）「岳人504号」1989年６月号
19.聖山「カン・リンポチェ」日本巡礼団の旅（桶川和気夫）「ヒマラヤ275号」1994年10月号
20.グゲ王国とカイラス山、西ネパールの旅（永田秀樹）「岳人575号」1995年５月号

７）ガンカル・プンスム（Gankar Punsum）7,570ｍ

1.崗嘎普松峰偵察（伊丹紹泰）「山645号」1999年２月号
2.ガンカー・プンスム峰登山隊計画延期の経緯について（大森薫雄）「山647号」1999年４月号
3.南側からの視点－ブータン・ヒマラヤ、中国・ブータン国境について－（吉永英明）「同上」
4.中国・チベットに聳える 未踏の世界最高峰ガンカー・プンスム峰（中村進）岳人620号1999年２月

5.世界第二の未踏峰 リャンカンカンリに登頂（中村進／小林尚礼）山と渓谷769号 1999年8月号

6.リャンカンカンリ初登頂（角谷道弘／小林尚礼）岳人626号 99年8月号

7.ガンカー峰とリャンカンカンリ峰を考える（山森欣一）「ヒマラヤ332号」1999年7月号

8.ガンカープンスム峰周辺のブータン政府発行の地図の考察（斎藤惇生）「山649号」1999年6月号

8）クーラ・カンリ（Kula Kangri）7,554m、カルジャン（Karjiang）7,216m

1.天帝の峰クーラ・カンリを目指して「長谷川浩）「岳人464号」1986年2月号

2.微笑んだ「天帝の峰」クーラ・カンリ「山と渓谷610号」1986年8月号

3.クーラ・カンリ初登頂－そして東チベットから成都へ初横断－（神戸大学西蔵学術登山隊）「岳人472号」1986年10月号

4.クーラ・カンリ初登頂（平井一正）「山岳第82年」日本山岳会 1987年12月20日 3,500円

5.天帝の峰に挑む（神戸大学西蔵学術登山隊）神戸新聞総合出版センター 1988年8月 3,500円

6.クーラ・カンリⅡ登山計画「ヒマラヤ304号」1997年3月号

7.クーラ・カンリⅡ（7,418m）北面報告「ヒマラヤ310号」1997年9月号

8.神領の峰へ（ＨＡＪカルジャン登山隊）「ヒマラヤ179号」1986年10月号

9.烈風の頂へ－卡热彊峰初登頂の記録－「ヒマラヤ182号」1987年1月号

10.ブータン国境への旅 クーラ・カンリ南面を見る（山森欣一）「ヒマラヤ309号」1997年8月号

9）ヤンラ・カンリ（Yangra Kangri）7,429m＆カバン（Kabang）6,717m）

1.ガネッシュ・ヒマール北面（山森欣一）「山と渓谷739号」1997年2月号

2.ヤンラ・カンリ偵察記（山森欣一）「ヒマラヤ306号」1997年5月号

3.未踏の頂に憧れて カバン（6,717m）偵察計画「ヒマラヤ324号」1998年11月号

4.未踏の頂 カバン（6,717m）偵察報告「ヒマラヤ326号」1999年1月号

5.未踏の峰に憧れて（山森欣一）「山と渓谷763号」 1999年2月号

10）チョモラーリ（Qomo Lhari）7,364m

1.綽莫拉利峰－チョモラーリ（張俊岩／福山佶訳）「ヒマラヤ184号」1987年3月号

2.曠野に座する仙女の峰「チョモラーリ」（東野良）「山と渓谷725号」1995年12月号

3.女神の山 チョモラーリ（長野県山岳協会）1996年11月25日

11）ニンチンカンサ（Ningchin Kangsha）7,206m＆チョム・カンリ（Qungmo Kangri）7,048m

1.第2次チベット・ヒマラヤ登山隊報告書 ニンチンカンサ登山隊・東チベット踏査隊 1985大分県山岳連盟（松元徹編）大分県山岳連盟 1986年12月 1,800円

2.宁金抗沙峰（ニンチンカンサ）西面初登頂仮報告書（栃木県高校体育連盟登山部）1995.9

3.寧金抗沙峰合同登山隊1995年報告書（福岡大学体育会山岳部／福岡大学山岳会）

4.輝ける白き峰 ニンチンカンサ西稜初登頂の記録（栃木県高体連登山部）1996年3月30日

5.ニンチン・カンサ（7,206m）登山計画（ヒマラヤ308号）1997年7月号

6.ニンチン・カンサ峰登頂「ヒマラヤ314号」1998年1月号

7.ニンチン・カンサ（7,206m）登山計画「ヒマラヤ319号」1998年6月号

8.ニンチン・カンサ（7,206m）西稜初登攀報告「ヒマラヤ325号」1998年12月号

9.寧金抗沙峰（日本ヒマラヤ協会）1999年6月20日

10.中央大学チョムカンリ登山隊1997 仮報告書（同大学山岳部）1997年6月5日

11.チョム・カンリ（7,048m）登山計画「ヒマラヤ333号」1999年8月号

12.チョム・カンリ南壁第3登報告「ヒマラヤ337号」1999年12月号

12）ニェンチェンタンラ（Nyainqentanglha）

7,162m

1.東北大学日中友好西蔵学術登山隊報告書（東北大学日中友好西蔵学術登山隊実行委員会）1986年9月

2.チベット高原の盟主ーニェンチェンタングラー東北大学山の会　1994年6月刊

3.未登峰ニェンチェンタングラⅣ峰に登頂成功（藤田清）「登山時報250号」1995年12月号

4.ぼくたちのヒマラヤ登山　ハイキングから未踏の7,000m峰ニェンチェンタングラへ（松葉桂二）「岳人582号」1995年12月

5.桑頂抗沙峰登山隊報告（同隊）1994年3月15日

6.チャチャチョ偵察6,447メートル（長野県山岳協会西蔵東部登山隊）「山と渓谷709号」1994年8月号

7.タンラ・ポ（6,394メートル）登頂（中央大学学友会体育連盟山岳部）「岳人576号」1995年6月

8.現役大学生主体で登ったチベットの未踏峰タンラ・ポ（黒川恵）「山と渓谷720号」1995年7月号

9.タンラ・ポ峰初登頂報告書（中央大学山岳部）1995年6月22日

10.未踏の白き頂を目指して（中津川勤労者山岳会）1996年11月20日

11.OHTE'95登山報告書（1995年大阪府高校生日中友好登山隊）1996年7月25日

12.念青唐古拉山脈の無名峰を目指して（興田勝幸）「登山月報355号」平成10年10月号

13.チベット無名峰へ（日本教員登山隊）

13）ルンポ・カンリ（Loinbo Kangri）7,095m

1.チベットの未踏峰、ルンポ・カンリ登山計画「ヒマラヤ270号」

2.ルンポの神を仰ぎて（八嶋寛）「ヒマラヤ274号」

3.ルンポ・カンリ試登7,095メートル（日本ヒマラヤ協会ルンポ・カンリ登山隊）「山と渓谷709号」1994年8月号

4.ルンポ・カンリーチベットの未踏峰・7,095m。1994年試登の記録ー（日本ヒマラヤ協会）95,4

14）カント（Kangto）7,060m

1.カント峰に賭けた同志社大学の山男「岳人493号」1988年7月号

2.遥か久恋の峰（同志社大学カント峰登山隊）毎日新聞社　1989年7月20日　6,180円

15）カンリ・ガルポ山群

1.崗日嘎布山群から察隅地方へ（中村保）「ヒマラヤ296号」1996年7月号

2.ヒマラヤの東（中村保）1996年3月15日　山と渓谷社　3,000円

3.横断山脈の未踏の山々（中村保）「岳人597号」1997年3月号

4.東南チベット　崗日嘎布の現代氷河（中村保）「ヒマラヤ335号」1999年10月号

5.東南チベットの空白部　カンリガルポ（崗日嘎布）山群を探る（上・中・下）中村保「岳人627号～629号」1999年9月号～11月号

6.「ヒマラヤの東」の空白部ー崗日嘎布山群（中村保）「山と渓谷772号」1999年11月号

（その他）

1.中国の山へのアプローチ（阿部淳）「ヒマラヤ104号」1980年6月号

2.中国登山レギュレーション全文対訳「岩と雪75号」1980年6月

3.開かれた中国の高峰「岳人400号」1980年10月号

4.中国の高峰　中国登山協会監修　東京新聞出版局　昭和56年1月29日　2,000円

5.チベットの旅（中国人民美術出版社編）美乃美　1981年5月20日　1,500円

6.中国にくる外国の登山団体・登山旅行団の費用徴収についての規則「岳人409号」1981年7月号

7.中国登山ハンドブック（未知、秘境、未踏の山総ガイド）上越山岳協会　ベースボールマガジン社　1981年12月20日　1,800円

8.進む中国奥地の山岳研究（渡辺義一郎）「岳人415号」1982年1月号

9.チベット南東部の氷河（鄭本興）「岩と雪80号」1982年4月号

10.チベット研究文献目録「日本文・中国文篇」1887年～1997年（貞兼稜子編）亜細亜大学ア

ジア研究所　昭和57年4月10日　6,500円
11.世界のアルピニストがねらう中国の山々（王鳳桐）「月刊　人民中国」1982年5月号
12.写真集　チベット（ユーゴスラヴィア・レビュー社／中国上海美術出版社）ベースボール・マガジン社　1982年　9,800円
13.チベット（篠山紀信）朝日新聞社　1982年　6,000円
14.入蔵日誌（矢島保治郎）チベット文化研究所　1983年1月22日　1,800円
15.東チベット紀行（ドウオグ村の人とその暮らし）　江本嘉伸「山と渓谷560号」1983年7月号
16.これからの中国登山「ヒマラヤ142号」1983年9月号
17.中国登山研究「ヒマラヤ142号」1983年9月号
18.中国登山協会一行来日「岩と雪98号」　83年10月
19.チベットおよびその付近の山々（フランク・ブースマン／水野勉・訳）「山岳第78年」日本山岳会　1983年12月1日　3,500円
20.ヒマラヤ文献目録（薬師義美編）白水社　1984年1月25日　19,000円
21.ルンタの秘境（江本嘉伸）光文社　1984年4月30日　980円
22.チベット滞在記（多田等観・牧野文子編）白水社　1984年　1,800円
23.氷山雪嶺二千年（周正、譚佐強／田川常雄・訳）ベースボールマガジン社　1985年3月10日　2,200円
24.中国西域紀行（風見武秀）「岳人460号」1985年10月号
25.初のヒマラヤ横断1,000km（山里寿男）「岳人461号」1985年11月号
26.ラサへのあこがれ（D.レイフィールド、水野勉訳）日本山書の会 1985年11月 4,500円
27.天上の道－憧憬のラサへ（トーマス・レイヤード）「山と渓谷597号」1985年11月号
28.チベットおよびその付近の山々補遺（水野勉）「山岳第80年」日本山岳会　1985年12月20日　3,500円
29.ヒマラヤ文献消遥（水野勉）鹿鳴荘　1986年3月　18,000円
30.中国登山研究会（日本ヒマラヤ協会）「ヒマラヤ174号」　1986年5月号
31.中国登山の和文参考資料一覧（日本ヒマラヤ協会）「ヒマラヤ175号」1986年6月号
32.世界無銭旅行者・矢島保治郎（浅田晃彦）筑摩書房　1986年6月　1,600円
33.東チベット紀行（E・タイクマン、水野勉訳）白水社　1986年7月5日　2,200円
34.躍進するチベット登山協会（山森欣一）「ヒマラヤ176号」1986年7月号
35.女性大使チベットを行く（劉曼卿著／岡崎俊夫・松枝茂夫共訳）白水社　1986年8月30日　2,200円
36.憧憬の中国、西遊の7,000km「山と渓谷611号」1986年9月号
37.中国登山研究会「ヒマラヤ184号」1987年3月号　500円
38.中国の費用撤収規定（1987年1月発効）「ヒマラヤ186号」1987年5月号
39.チベット自転車行（九里徳泰）「ヒマラヤ190号」1987年9月号
40.中国大陸・下巻　天壌無限（白川義員）小学館　28,000円
41.チベットのお正月（藤田弘基）「岳人487号」1988年1月号
42.チベット走破5,000キロ（九里徳泰）「山と渓谷631号」1988年2月号
43.東ヒマラヤ探検の歴史（上）東チベットとビルマ北部の山々（金子民雄）「岳人488号」1988年2月号
44.東ヒマラヤ探検の歴史（中）ベイリー、ウォードらの探検（金子民雄）「岳人489号」　1988年3月号
45.厳寒の友好道路走破（小林憲生）「山と渓谷632号」1988年3月号
46.エベレスト、マカルーを飛ぶ（岡島成行）「山と渓谷633号」1988年4月号
47.チベットのファッション（藤田弘基）「岳人490号」1988年4月号
48.東チベット横断紀行（朝日教之）山と渓谷社

1988年10月　1,600円

49.ＴＩＢＥＴ　失われた魂・チベット（遠藤正雄）時事通信社　1989年５月　2,370円

50.－ラサに厳戒令敷かれる－（江本嘉伸）「山と渓谷646号」1989年５月号

51.チベット高原自転車ひとり旅（九里徳泰）山と渓谷社　1989年11月　1,600円

52.中国登山の手引き・初版（山森欣一）　日本ヒマラヤ協会　1990年３月31日　3,000円

53.長寿と叡智をもたらす聖なる山の偉大な河「ヤル・ツァンポー」（ギャロル・ダナム）「山と渓谷666号」1991年１月号

54.西蔵漂泊　チベットに魅せられた10人の日本人（江本嘉伸）「山と渓谷666号～」　1991年２月

55.世界の屋根を逍遥　夢のチベット・トレッキング（クリスティナ・フォン・ディットフルト「山と渓谷678号」1992年２月

56.中国登山の手引き・第二版（山森欣一）　日本ヒマラヤ協会　1992年４月22日　3,000円

57.チョモランマ・カンシュン谷周辺の地形（明治大学チョモランマ峰遠征隊・学術班）　93年11月

58.西蔵漂泊（江本嘉伸）　山と渓谷社（上）2,800円　（下）3,000円

59.エヴェレスト　1921年、1922年（ジョージ・リー・マロリー／田中純夫訳）日本山岳会上越支部　1994年８月刊

60.中国登山の手引き・第三版（山森欣一）　日本ヒマラヤ協会　1994年３月18日　3,500円

61.チベット紀行（帝塚山学院チベット踏査隊）「岳人571号」1995年１月号

62.世界の山々（アジア・アフリカ・オセアニア編）　古今書院　1995年９月２日　2,800円

63.青いケシの国からチベットへ（盛田武士）「岳人586号」1996年４月号

64.中国登山の手引き・第四版（山森欣一）　日本ヒマラヤ協会　1996年５月15日　3,500円

65.チベット高原走破の旅（竹内哲夫）「山619号」1996年12月号　カル

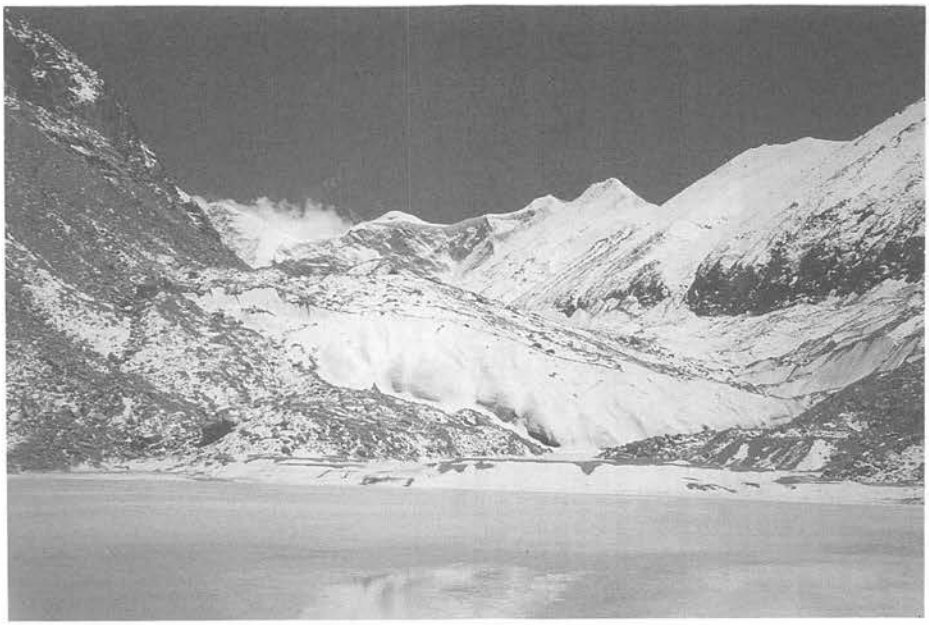
66.中国登山20年（山森欣一）「ヒマラヤ328号」1999年３月号

67.メコン、サルウィン分水峰の山と谷（中村保）「山と渓谷765号」1999年４月号

68.伝説の登山家Ｇ・マロリー（江本嘉伸）「岳人625号」　1999年７月号

69.雲南・西蔵横断4,000km（鎌澤久也）「山と渓谷742号」1997年５月号

70.西蔵登山の和文参考資料一覧（日本ヒマラヤ協会「ヒマラヤ334号」1999年９月号



▲ＡＢＣ上流の氷河湖岸より氷河舌端の奥にクーラ・カンリⅡ峰を望む

京葉讀賣

千葉支局（〒260）
千葉市中央区中央4-15-3
電話043-225-2001
FAX 225-2190
成田支局（〒286）
成田市田町383-7
電話0476-28-7911
成田支局分室（〒286）
電話0476-32-5810
千葉ベイ 32-9777
京葉支局（〒273）
船橋市宮本4-2-7
電話0474-31-2648
柏支局（〒277）
柏市柏1260-3
電話04712-66-0303
―通信部―
市川047-337-9933
市原0436-41-4446
木更津0438-22-2377
茂原0475-22-2554
松戸0447-368-1130
銚子0479-22-0154
鴨川0470-22-0353
大多喜0470-82-0226
佐原0478-52-2954

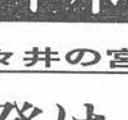
チベット未踏峰に挑む

酒々井の宮崎さん

5月、登はん隊長で

クーラ・カンリII、7429メートル

日中国交二十五周年を記念して今年五月に行われる日本ヒマラヤ協会とチベット登山協会の合同登山に、酒々井町馬橋々井三、会社員宮崎久夫さん(四)が参加する。目標はクーラ・カンリII峰（標高七、四二九メートル）で、十五人の日中合同隊で初登頂を目指す。同峰は、ラサの南約百六十キロのブータンとの国境近くにあり、チベット語で「天帝の峰」の意。三つある頂上のうち、東の一峰は一九八六年に神戸大学隊が登頂したが、II、III峰は未登頂で、今回の登山では好条件の場合、両峰とも登頂する。



宮崎久夫さん

国交25周年の日中合同隊

宮崎さんは「エベレストに登ってみたい」という夢のため、二十歳から登山を始めた。都内の建設会社に勤めるかたわらネパールのツクチェ・ピーク（同六、九一〇メートル）やヒマールチュリ（同七、八九三メートル）などの登頂に成功し、海外の山はクーラ・カンリで五山目となるベテラン。

今回の登山では登頂ルートを調査・決定する重要な登はん隊長を務める。直前で目標が変更になったため偵察もしておらず、手さぐりで進むことになりそう。隊員の命が私のルート選択にかかっているので気合が入ります」と話し、あす二十五日の出発を目前に控えて資料の研究に余念がない。

また環境汚染を理由に入山規制される山が増えていることから、今回の登山ではヒマラヤの自然を汚染しないために、余分な荷物を持ち込まず、ゴミは残さずに持ち帰るなどの「テイク・イン・テイクアウト」を実施し、現地のスタッフにも協力を求めてゆく。宮崎さんも「山の汚染が進むと、やがて登れる山がなくなってしまう」と自然保護の重要性を訴える。

（第3種郵便物認可）

中国・ヒマラヤ山脈クーラ・カンリII

43歳 未踏峰に挑む

藤原町の伊藤さん

体力考え決断

7000メートル級は初体験

今月下旬出発 5月登頂めざす

藤原町川合、JAいなべ職員伊藤政義さん(四三)が来月、中国・ヒマラヤ山脈の未踏峰クーラ・カンリII（七、四二一八メートル）登頂に挑む。日本ヒマラヤ協会登山隊の一員としてで、結婚後に本格的な登山を始めた伊藤さんにとっては「夢のヒマラヤ」。今月下旬の出発に向けて、期待と胸を膨らませ、体調管理に気を配る毎日だ。

クーラ・カンリIIは、中国・チベット自治区とブータンの国境近くにそびえる。今回の登山隊は、伊藤さんを含め全国から七人の参加を予定。現地では中国側八人との合同隊を編成して挑む。今月二十五日に日本を出発し、四月初旬にベースキャンプを設置。五月初めの登頂を目指すという。伊藤さんが本格的な登山を始めたのは十七、八年前。それまでも高校時代にチョウの採集などがきっかけで、趣味で山に登ることはあった。卒業後の登山道に迷った反省から、地元の山岳会に入った。国内を中心に月一回ほど、各地へ岩登り、アイスクライミング、山スキーなどに出かけるようになった。

昨年五月ごろ、同協会の公募を知り、今回の登山隊への参加を思い切って決めた。十五年ほど前に、米国・マッキンリー（六、一九四メートル）の登頂経験はあるが、七千メートル級の山は伊藤さんにとって初めて。しかも海外遠征には仕事上、長期間の休みを取る必要があるため、これまで「チャンス」に踏み切れなかった。しかし、「自分の年齢を考えると、体力的に限るのは今しかないと思った」と話す。「成功の可能性は必ずしも高いとは言えない」と、厳しい状況を冷静に分析する伊藤さん。「一番苦」に自分の体がうまく順応でき、天候が順調かどうかが登頂のポイント」という。

その上で「ヒマラヤは世界の屋根。山好きであれば、だれでも一度は自分の目で見て、頂上を踏んでみたいと思うもの。今はじっくり体調を整えたい」と語り、頂上からの眺めに思いをはせている。

出発を前に、ヒマラヤへの思いを語る伊藤さん＝藤原町川合の自宅で

▲新聞に載った2名　上：宮崎（読売新聞）　下：伊藤（中日新聞）

中国の登山家たち

山森　欣一

中国で高峰登山が始まったのは、1955年のことであった。当初は旧ソ連の指導を受けた。グルジアに派遣されたのは、許競、師秀、周正、楊徳源の４人で、８月14日団結峰(6,673ｍ)、15日オクチャブル峰(6,780ｍ)に４人共登頂した。翌56年には旧ソ連と合同でムスターグ・アタの初登頂に成功した。隊長を勤めたのは史占春である。許競、陳栄昌、国徳存、彭仲穆、師秀など12名が登頂した。陳と彭は余勢をかって、ソ連クライマーとそのままコングール・チュビエに向かい、アルパイン・スタイルで初登頂してしまった。更に57年には、ミニヤ・コンカに史、劉連満、劉大義、師、彭、国の６名が登頂する。しかし下山中に後者の３人が滑落死亡してしまった。おまけに初登頂したアメリカ隊から頂上付近の描写が違うと、クレームまでつけられてしまった。いよいよ60年チョモランマ第二登である。経緯はご承知のとおり。この頃登山運動に参加していたメンバーが第一世代といえる。

64年には最後の8000ｍ峰シシャパンマに陳三、成天亮ら10名が初登頂した。文革中の75年にはチョモランマの再登を行い、羅則、桑珠、潘多ら９人が登頂。77年ソ連との国境にあるトムールに27人も登頂した。曽曙生、[桂桑、樊永寧（女性)] らがおり、これらのメンバーが第二世代であろう。多くは今年定年を迎える。

80年以降は、合同登山が盛んになり、若い職業登山家が育ち、94年からチベット隊による8000ｍ峰14座登頂計画が始まり新しい時代が訪れている。その活動振りをまとめると下記のようになる。

中国岳人トータル獲得標高2000

（7000ｍ以上の峰。2000年10月25日現在）

（注）＃＝初登頂、★＝縦断、●＝初登攀、氏名の前の×＝死亡。　　成天亮／山森欣一調べ

	氏　　名	生年月日	山　　名	標高	登頂年月日	備考
1	次仁多吉［ツェリン・ドルジェ］	1958, 5 ,18	ナイプン	7,043	1983, 4 ,21＃	
	Tserin Dorji	1960, 8	ナイプン	7,043	1984, 4 ,11	
	Cirenduoji　南木林県出身		ナムナニ	7,694	1985, 5 ,26	
	136,742ｍ		チャンツェ	7,543	1986, 5 ,10	
	8000ｍ峰・10座12回		チョモランマ	8,848	1988, 5 , 5	Ⅰ
	7000ｍ峰・４座５回		シシャパンマM	8,027	1991, 5 ,14	Ⅱ
	初登頂・7000ｍ３座		ナムチャ・バルワ	7,782	1992,10,30＃	
			アンナプルナⅠ	8,091	1993, 4 ,26	Ⅲ
			ダウラギリⅠ	8,167	1993, 5 ,30	Ⅳ
			シシャパンマM	8,027	1994, 5 , 7	Ⅴ
			チョー・オユー	8,201	1994, 9 ,30	Ⅵ
			ガッシャーブルムⅡ	8,035	1995, 7 ,10	Ⅶ
			マナスル	8,163	1996, 5 , 4	Ⅷ
			ナンガ・パルバット	8,126	1997, 6 ,15	Ⅸ
			カンチェンジュンガM	8,586	1998, 5 , 4	Ⅹ
			ローツェ	8,516	1998,10,13	Ⅺ
			チョモランマ	8,848	1999, 5 ,27	Ⅻ

	氏　　名	生年月日	山　　名	標高	登頂年月日	備考
2	加　　布［ジャブー］	1958, 9 ,18	シシャパンマM	8,027	1981, 4 ,30	
	Jiabu　南木林県出身	1961,10, 5	ナイプン	7,043	1983, 4 ,21＃	
	112,753m	1959, 4 ,	ナムナニ	7,694	1985, 5 ,26＃	
	8000m峰・8座10回		ニンチン・カンサ	7,206	1986, 4 ,28＃	
	7000m峰・4座		チョモランマ	8,848	1990, 5 , 7	I
	初登頂・7000m峰4座		ナムチャ・バルワ	7,782	1992,10,30＃	
			ダウラギリI	8,167	1993, 5 ,31	II
			シシャパンマM	8,027	1994, 5 , 7	III
			チョー・オユー	8,201	1994, 9 ,30	IV
			ガッシャーブルムII	8,035	1995, 7 ,11	V
			マナスル	8,163	1996, 5 , 4	VI
			ナンガ・パルバット	8,126	1997, 6 ,15	VII
			カンチェンジュンガM	8,586	1998, 5 , 4	VIII
			チョモランマ	8,848	1999, 5 ,27	IX
3	仁　　那［レンナ］	1965,10,	チャンツェ	7,543	1986, 5 ,10	
	Renna　謝通門県出身	1967, 8 ,	チョモランマ	8,848	1990, 5 , 8	I
	99,151m		アンナプルナI	8,091	1993, 4 ,26	II
	8000m峰・10座11回		ダウラギリI	8,167	1993, 5 ,31	III
	7000m峰・1座		シシャパンマM	8,027	1994, 5 , 7	IV
			チョー・オユー	8,021	1994, 9 ,30	V
			ガッシャーブルムII	8,035	1995, 7 ,11	VI
			マナスル	8,163	1996, 5 , 4	VII
			ナンガ・パルバット	8,126	1997, 6 ,15	VIII
			カンチェンジュンガM	8,586	1998, 5 , 4	IX
			ローツェ	8,516	1998,10,13	X
			チョモランマ	8,848	1999, 5 ,27	XI
4	辺巴扎西［ペンバ・ザシ］	1965,10,	ニンチン・カンサ	7,206	1986, 4 ,28＃	
	Bianba Zhaxi　拉孜県出身	1965, 3 ,20	ナムチャ・バルワ	7,782	1992,10,30＃	
	97,748m		アンナプルナI	8,091	1993, 4 ,26	I
	8000m峰・10座		ダウラギリI	8,167	1993, 5 ,30	II
	7000m峰・2座		シシャパンマM	8,027	1994, 5 , 7	III
	初登頂・7000m峰2座		チョー・オユー	8,201	1994, 9 ,30	IV
			ガッシャーブルムII	8,035	1995, 7 ,10	V
			マナスル	8,163	1996, 5 , 4	VI
			ナンガ・パルバット	8,126	1997, 6 ,15	VII
			カンチェンジュンガM	8,586	1998, 5 , 4	VIII
			ローツェ	8,516	1998,10,13	IX
			チョモランマ	8,848	1999, 5 ,27	X
5	達　　穹［ダチォン］	1963, 1 ,	チャンツェ	7,543	1986, 5 ,11	
	Daqiong　謝通門県出身	1962,12,	ラプチェ・カン	7,367	1987,10,26＃	
	97,361m		チョモランマ	8,848	1990, 5 , 8	I
	8000m峰・9座		ナムチャ・バルワ	7,782	1992,10,30＃	
	7000m峰・3座		ダウラギリI	8,167	1993, 5 ,30	II
	初登頂・7000m峰2座		シシャパンマM	8,027	1994, 5 , 7	III
			チョー・オユー	8,201	1994, 9 ,30	IV
			ガッシャーブルムII	8,035	1995, 7 ,11	V

	氏　　名	生年月日	山　　名	標高	登頂年月日	備考
			マナスル	8,163	1996, 5 , 4	Ⅵ
			ナンガ・パルバット	8,126	1997, 6 ,15	Ⅶ
			カンチェンジュンガM	8,586	1998, 5 , 4	Ⅷ
			ローツェ	8,516	1998,10,13	Ⅸ
6	洛　　則［ロツェ］	1962, 5 ,13	チャンツェ	7,543	1986, 5 ,11	
	Louze　拉孜県出身	1964,	チョモランマ	8,848	1990, 5 , 8	Ⅰ
	91,060m	1963,	ダウラギリⅠ	8,167	1993, 5 ,31	Ⅱ
	8000m峰・9座10回		シシャパンマM	8,027	1994, 5 , 7	Ⅲ
	7000m峰・1座		チョー・オユー	8,201	1994, 9 ,30	Ⅳ
			ガッシャーブルムⅡ	8,035	1995, 7 ,10	Ⅴ
			マナスル	8,163	1996, 5 , 4	Ⅵ
			ナンガ・パルバット	8,126	1997, 6 ,15	Ⅶ
			カンチェンジュンガM	8,586	1998, 5 , 4	Ⅷ
			ローツェ	8,516	1998,10,13	Ⅸ
			チョモランマ	8,848	1999, 5 ,27	Ⅹ
7	阿 克 布［アカプー］	1962,12,	ラプチェ・カン	7,367	1986,10,27	
	Akepu　昌都県出身		アンナプルナⅠ	8,091	1993, 4 ,26	Ⅰ
	81,611m		ダウラギリⅠ	8,167	1993, 5 ,30	Ⅱ
	8000m峰・9座		シシャパンマM	8,027	1994, 5 , 7	Ⅲ
	7000m峰・1座		チョー・オユー	8,201	1994, 9 ,30	Ⅳ
			ガッシャーブルムⅡ	8,035	1995, 7 ,11	Ⅴ
			マナスル	8,163	1996, 5 , 4	Ⅵ
			ナンガ・パルバット	8,126	1997, 6 ,15	Ⅶ
			カンチェンジュンガM	8,586	1998, 5 , 4	Ⅷ
			チョモランマ	8,848	1999, 5 ,27	Ⅸ
8	旺　　加［ワンジャ］	1957, 5 ,15	チョー・オユー	8,201	1985, 5 , 1	Ⅰ
	Wangjia　拉孜県出身	18	チャンツェ	7,543	1986, 5 ,10	
	72,552m		ラプチェ・カン	7,367	1987,10,24＃	
	8000m峰・6座7回		チョモランマ	8,848	1990, 5 ,10	Ⅱ
	7000m峰・2座		ダウラギリⅠ	8,167	1993, 5 ,31	Ⅲ
	初登頂・7000m峰1座		シシャパンマM	8,027	1994, 5 , 7	Ⅳ
			チョー・オユー	8,201	1994, 9 ,30	Ⅴ
			ガッシャーブルムⅡ	8,035	1995, 7 ,11	Ⅵ
			マナスル	8,163	1996, 5 , 4	Ⅶ
9	大 斉 米［ダー・チーミ］	1957, 6 , 5	ナムナニ	7,694	1985, 5 ,28	
	Da Qimi　南木林県出身	1957, 7 ,	チャンツェ	7,543	1986, 5 ,10	
	72,436m		チョモランマ	8,848	1990, 5 , 7	Ⅰ
	8000m峰・4座5回		ナムチャ・バルワ	7,782	1992,10,30＃	
	7000m峰・4座		ダウラギリⅠ	8,167	1993, 5 ,31	Ⅱ
	初登頂・7000m峰2座		シシャパンマM	8,027	1994, 5 , 7	Ⅲ
			チョー・オユー	8,201	1994, 9 ,30	Ⅳ
			チョモランマ	8,848	1994, 5 ,29	Ⅴ
			チョモラーリ	7,326	1996, 9 , 8 ●	
10	桂　　桑［グイサン］（女性）	1957,	トムール	7,435	1977, 7 ,30	
	Guisan　南木林県出身	1955,	チャンツェ	7,543	1986, 5 ,10	

	氏　　名	生年月日	山　　名	標高	登頂年月日	備考
	48,027m		チョモランマ	8,848	1990, 5 , 8	Ⅰ
	8000m峰・2座3回		シシャパンマM	8,027	1994, 4 ,29	Ⅱ
	7000m峰・3座		チョモラーリ	7,326	1996, 9 ,10	
			チョモランマ	8,848	1999, 5 ,27	Ⅲ
11	仁青平措［リンチン・ピンゾー］	1943, 8 , 2	シシャパンマM	8,027	1981, 4 ,30	Ⅰ
	Renqing Pingcuo　隆子県出身	1943, 6 ,20	ナイプン	7,043	1983, 4 ,21＃	
	46,705m		ナイプン	7,043	1984, 4 ,11	
	8000m峰・3座		チョー・オユー	8,201	1985, 5 , 1	Ⅱ
	7000m峰・2座3回		チャンツェ	7,543	1986, 5 ,10	
	チョモランマ初縦断		チョモランマ	8,848	1988, 5 , 5★	Ⅲ
	（南面→北面）					
12	普　　布［プブ］	1964, 7 ,	ニンチン・カンサ	7,206	1986, 4 ,28＃	
	Pubu　南木林県出身	1965,	ラプチェ・カン	7,367	1987,10,27	
	38,755m		シシャパンマC	8,008	1990, 5 ,19	Ⅰ
	8000m峰・2座		チョモランマ	8,848	1993, 5 , 5	Ⅱ
	7000m峰・3座		チョモラーリ	7,326	1996, 9 ,10	
13	丹真多吉［ダンチェン・ドルジェ］	1963, 3 ,16	ナイプン	7,043	1983, 4 ,21＃	
	Danzhen Duorjee　南木林県出身		チョー・オユー	8,201	1985, 5 , 1	Ⅰ
	38,624m		ニンチン・カンサ	7,206	1986, 4 ,28＃	
	8000m峰・2座		チョモラーリ	7,326	1996, 9 , 8●	
	7000m峰・3座4回		チョモランマ	8,848	1997, 5 ,29	Ⅱ
	初登頂・7000m峰2座					
14	小 斉 米［シャオ・チーミ］	1964, 7 ,	チャンツェ	7,543	1986, 5 ,10	
	Xiao Qimi　南木林県出身		シシャパンマC	8,008	1990, 5 ,19	Ⅰ
	31,725m		チョモランマ	8,848	1993, 5 , 5	Ⅱ
	8000m峰・2座2回		チョモラーリ	7,326	1996, 9 ,10	
	7000m峰・2座					
15	大 次 仁［ダー・ツェリン］	1953,	ナイプン	7,043	1984, 4 ,11	
	Da Tsering　謝通門県出身		チョー・オユー	8,204	1985, 5 , 1	Ⅰ
	31,635m		チャンツェ	7,543	1986, 5 ,11	
	チョモランマ初縦断		チョモランマ	8,848	1988, 5 , 5★	Ⅱ
	（南面→北面）					
16	王 富 州［ワン・フゥチゥ］	1935, 2 ,23	レーニン	7,134	1958, 9 , 7	
	Wang Fuzhou		ムスターグ・アタ	7,546	1959, 7 , 7	
	31,555m		チョモランマ	8,848	1960, 5 ,25●	Ⅰ
	チョモランマ第二登		シシャパンマM	8,027	1964, 5 , 2 ＃	Ⅱ
17	桑　　珠［サンジュ］	1953,11,15	チョモランマ	8,848	1975, 5 ,27	
	Samdrub　日喀則出身	1953, 1 ,25	トムール	7,435	1977, 7 ,30	
	31,271m		ニンチン・カンサ	7,206	1986, 4 ,28＃	
			ナムチャ・バルワ	7,782	1992,10,30＃	
18	拉　　巴［ラバ］	1964, 8 , 5	チャンツェ	7,543	1986, 5 ,10	
	Laba　南木林県出身		ラプチェ・カン	7,367	1987,10,27	
	30,806m		チョム・カンリ	7,048	1996,10, 7 ＃	
			チョモランマ	8,848	1999, 5 ,27	

	氏　　名	生年月日	山　　名	標高	登頂年月日　備考
19	劉 大 義［リュウ・ダユイ］ Liu Dayi 30,083m	1936,	ムスターグ・アタ ミニヤ・コンカ ムスターグ・アタ トムール	7,546 7,556 7,546 7,435	1956, 7 ,31＃ 1957, 6 ,13 1959, 7 , 7 1977, 7 ,25●
20	陳　栄　昌［チェン・ロンチャン］ Chen Rongchang 30,057m		ムスターグ・アタ コングール・チュビエ ムスターグ・アタ トムール	7,546 7,530 7,546 7,435	1956, 7 ,31＃ 1956, 8 ,15＃ 1959, 7 , 7 1977, 7 ,30
21	潘　　多［パンドゥ］（女性） Phantog　徳格県出身 23,924m	1939, 1938,	ムスターグ・アタ コングール・チュビエ チョモランマ	7,546 7,530 8,848	1959, 7 , 7 1961, 6 ,17 1970, 5 ,27
22	屈 銀 華［チュ・インホァ］ Chu Yinhua 23,528m	1935,	レーニン ムスターグ・アタ チョモランマ	7,134 7,546 8,848	1958, 9 , 7 1959, 7 , 7 1960, 5 ,25●
23	王 勇 峰［ワン・ヨンフェン］ Wang Yongfeng 内蒙古自治区集寧市出身 23,439m	1963,12,23	チャンツェ チョモランマ チョム・カンリ	7,543 8,848 7,048	1989, 7 ,24 1993, 5 , 5 1996,10, 7 ＃
24	小 加 措［シャオ・ジャツォ］ Xiao Jiacuo　南木林県出身 23,380m	1961, 6 , 1958,	ニンチン・カンサ チョモランマ チョモラーリ	7,206 8,848 7,326	1986, 4 ,28＃ 1993, 5 , 5 1996, 9 ,10
25	許　　競［シージュン］ Xu Jing 23,119m	1927,10, 7	ムスターグ・アタ ムスターグ・アタ シシャパンマM	7,546 7,546 8,027	1956, 7 ,31＃ 1959, 7 , 7 1964, 5 , 2 ＃
26	扎西次仁［ザシ・ツェリン］ Zaxi Ciring　謝通門県出身 23,097m	1959,	チャンツェ チョム・カンリ チョモランマ	7,543 7,048 8,848	1986, 5 ,11 1996,10, 7 ＃ 1999, 5 ,27
27	小多布傑［シャオ・ドブジェ］ xiao Duobujie　謝通門県出身 23,070m	1962,11,	チョー・オユー チャンツェ チョモラーリ	8,201 7,543 7,326	1985, 5 , 1 1986, 5 ,11 1996, 9 ,10
28	陳　　三［チェン・サン］ Chen San 22,676m	1935,	レーニン コングール・チュビエ シシャパンマM	7,134 7,530 8,027	1958, 9 , 7 1961, 6 ,17 1964, 5 , 2 ＃
29	史 占 春［シー・チャンチュン］ Shi Zhanchun　遼寧省出身 22,648m	1928, 1 ,12	ムスターグ・アタ ミニヤ・コンカ ムスターグ・アタ	7,546 7,556 7,546	1956, 7 ,31＃ 1957, 6 ,13 1959, 7 , 7
30	×彭 仲 穆［ペン・チョンム］ Peng Zhongmu 22,632		ムスターグ・アタ コングール・チュビエ ミニヤ・コンカ	7,546 7,530 7,556	1956, 7 ,31＃ 1956, 8 ,16＃ 1957, 6 ,13
31	金 俊 喜［ジン・ジュンシ］ Jin Junxi　吉林省出身 22,455m	1954,12, 8	トムール ナムナニ チョム・カンリ	7,435 7,694 7,326	1977, 7 ,30 1985, 5 ,26＃ 1996,10, 7 ＃
32	辺巴次仁［ペンバ・ツェリン］ Penba Tsering 22,842	1935,	トムール チョー・オユー ニンチン・カンサ	7,435 8,201 7,206	1977, 7 ,25＃ 1985, 5 , 1 1986, 4 ,28＃

	氏　　名	生年月日	山　　名	標高	登頂年月日　備考
33	格　　桑［ガーサン］ Gaisang　謝通門県出身 22,450m	1959, 3 ,11	ナイプン チョー・オユー ニンチン・カンサ	7,043 8,201 7,206	1983, 4 ,21＃ 1985, 5 , 1 1986, 4 ,28＃
34	加　　拉［ジャラ］ Jiala　拉孜県出身 22,236m	1962,12, 8	チャンツェ ラプチェ・カン チョモラーリ	7,543 7,367 7,326	1986, 5 ,11 1987,10,26＃ 1996, 9 ,10
35	×宋 志 義［ソン・チユイ］ Son Zhiyi　甘粛省武威県出身 22,172m	1951, 1 , 2	トムール ナイプン ナムナニ	7,435 7,043 7,694	1977, 7 ,30 1983, 4 ,21＃ 1985, 5 ,26＃
36	貢　　布［ゴンブー］ Gonbu　聶拉木県出身 16,395m	1933, 3 ,20	ムスターグ・アタ チョモランマ	7,546 8,848	1959, 7 , 7 1960, 5 ,25●
37	貢嘎巴桑［クンガ・バサン］ Kunga Pasang　昌都県出身 16,283m		チョモランマ トムール	8,848 7,435	1975, 5 ,27 1977, 7 ,25●
38	吉　　吉［ジジ］（女性） Jiji　16,174m		チョモラーリ チョモランマ	7,326 8,848	1996, 9 ,10 1999, 5 ,27
39	大多布吉［ダー・ドブジェ］ Da Duobuji　15,636m		トムール チョー・オユー	7,435 8,201	1977, 7 ,25● 1985, 5 , 1
40	張 俊 岩［チャン・ジュンヤン］ Zhang Junyan　15,573m		ムスターグ・アタ シシャパンマM	7,546 8,027	1959, 7 , 7 1964, 5 , 2 ＃
41	多　　吉［ドルジェ］Dorje		張俊岩と全く同じ		
42	索南多吉［ソナム・ドルジェ］ Sodnam Dorje		張俊岩と全く同じ		
43	×鄔宗岳［ウ・チョンユェ］ Wu Zongyue　15,557m	1933,	コングール・チュビエ シシャパンマM	7,530 8,027	1961, 6 ,17 1964, 5 , 2 ＃
44	拉　　旺［ラワン］ Lawang　15,407m	1943,	チョー・オユー ニンチン・カンサ	8,201 7,206	1985, 5 , 1 1986, 4 ,28＃
45	拉　　吉［ラジ］（女性） Laji　大次仁の娘　15,394m		ラプチェ・カン シシャパンマM	7,367 8,027	1987,10,26＃ 1994, 4 ,29
46	佟　　璐［トンルー］（女性） Duon Lu　15,375m	1962, 9 ,20	ラプチェ・カン シシャパンマC	7,367 8,008	1987,10,27 1990, 5 , 9
47	楊 久 輝［ヤン・ジュフイ］ Yang Jiuhui　15,129m	1952, 7 , 8	トムール ナムナニ	7,435 7,694	1977, 7 ,30 1985, 5 ,28
48	劉 連 満［リュウ・レンマン］ 15,102m		ムスターグ・アタ ミニヤ・コンカ	7,546 7,556	1956, 7 ,31＃ 1957, 6 ,13
49	×師　　秀［シ・シュウ］ Shi Xiu		劉連満と全く同じ		
50	×国 徳 存［ゴウ・デチュン］ Guo Decun		劉連満と全く同じ		
51	×拉巴才仁［ラバツァイレン］ 15,076m		ムスターグ・アタ コングール・チュビエ	7,546 7,530	1959, 7 , 7 1961, 6 ,17
52	×西　　僥［シェーラブ］（女性） Sheirab		拉巴才仁と全く同じ		

	氏　　名	生年月日	山　　名	標高	登頂年月日　備考
53	嘎　亜［ガヤ］ Gaya　八宿県出身　14,869m	1949, 5	チャンツェ チョモラーリ	7,543 7,326	1986, 5 ,11 1996, 9 ,10
54	羅　申［ルーシン］ Lu Shin　14,869m		チャンツェ チョモラーリ	7,543 7,326	1986, 5 ,11 1996, 9 , 8 ●
55	彭 淑 力［ペン・シュリー］ Peng Shuli　14,680m		ムスターグ・アタ レーニン	7,546 7,134	1956, 7 ,31 # 1958, 9 ,7
56	石　竟［ダン・ジン］ 14,680m	1927,	レーニン ムスターグ・アタ	7,134 7,546	1958, 9 , 7 1959, 7 , 7
57	棟　梁［ヤン・ドンリャン］ Yan Dongliang	1932,	石竟と全く同じ		
58	穆 炳 鎖［ム・ビンシュ］ Mu Bingsuo	1933,	石竟と全く同じ		
59	胡 沐 欽［フー・ムチン］	1935,	石竟と全く同じ		
60	旺　多［ワンドゥ］ Wandu　謝通門県出身 14,249m	1957, 4 ,20	ナイプン ニンチン・カンサ	7,043 7,206	1983, 4 ,21 # 1986, 4 ,28 #

その他の登山家たち（１峰登頂者）［女性］

1956, 7 ,31　ムスターグ・アタ（7,546m）
胡本銘、陳徳寓、翁慶章

1958, 9 , 7　レーニン（7,134m）
王鳳桐、王家奎、鄭嘉善、余和、楊永忠、岳彩文、張景金、格朗、雷耀栄

1959, 7 , 7　ムスターグ・アタ（7,546m）
王振華、張祥、佳之久、趙国光、×邵子慶、岳保挂、周信徳、×衡虎林、謝武成、大米馬、［周玉瑛、王義勤、丛珍、査姆金、斉米］

1964, 5 , 2　シシャパンマ（8,027m）
成天亮、×米馬、扎西、雲登、

1975, 5 ,27　チョモランマ（8,848m）
索南羅布、羅則、侯生福、大平措、阿布欽、次仁多吉

1977, 7 ,25　トムール（7,435m）
×王洪宝、達穿、羅桑徳慶、多布吉、陸家勝、史学増、［昌措、王珍］

1977, 7 ,30　トムール（7,435m）
多吉甫、買買堤斉拉、曽曙生、晋美、張希桂、洛桑、［樊永寧、徐新、扎西］

1985, 5 ,28　ナムナニ（7,694m）
陳建軍、曹安、包徳卿、

1986, 4 ,28　ニンチン・カンサ（7,206m）
旦増、小次仁、

1986, 5 ,11　チャンツェ（7,543m）
開村、

1988, 5 , 5　チョモランマ（8,848m）
李致新、

1989, 7 ,24　チャンツェ（7,543m）
×孫維奇、

1944, 5 , 2　シシャパンマM（8,027m）
［普布卓嘎］

1996,10, 7　チョム・カンリ（7,048m）
馬欣祥、張志堅、

1997, 5 ,29
小斉米、

1998, 5 ,24　チョモランマ（8,848m）
次仁、

御協力者芳名簿

あ）アルファー食品（株）　（株）ＩＣＩ石井スポーツ　井原康雄　（株）伊藤園　岩崎洋　Ｓ＆Ｂ食品（株）　江尻健二　大竹尚子

か）カモシカスポーツ（株）　外務省　国重光熙　亀田製菓（株）　川本喜久子　（株）キャラバン　旭松食品（株）

さ）サントリー（株）　サンヨー食品（株）　佐藤食品工業（株）　（株）佐竹製作所　（株）白子　昭和印刷（株）　須田利昭　ＪＡいなべ

た）（有）ダックス　谷口工業（株）　中国登山協会　チベット登山協会　（株）ティ・エッチ・アイ　（株）テスコ　東海漬物製造（株）

な）（株）永谷園　（株）ネスレ　（株）ニチナン　日本ジフィー食品（株）　日本無線（株）　日本紅茶（株）　野村真佐子

は）ヒガシマル食品（株）　保坂昭憲

ま）三重経済連生活部　三重県中央会指導部　都昆布本舗（株）　宮本武子　宮坂醸造（株）　武藤政雄　森永乳業（株）　松舘正義

や）ユニバーサルトレーディング（株）・雪印乳業（株）　米屋（株）

ら）理研ビタミン（株）　ロッテ商事（株）　六甲バター（株）

編集後記

ヒマラヤ登山に限らず、山登りは単独で気儘に登ったり、気心の知れ合った仲間と一緒に出掛けたりするのが一番楽しいであろう。現に昨今のヒマラヤ登山では、登山行為の本来の姿を取り戻すかのように、ヒマラヤの高峰を舞台にソロ・クライムや２～３人による登山を実践する人達が台頭してきている。

しかしながら、こうした「シンプル」なヒマラヤ登山が実践され始めたとはいえ、大方のヒマラヤ登山はまだまだ従来型の「登山隊システム」による登山が主流を占めており、登山の観点からみれば逆転現象とも思える「遠足登山化」現象さえみられるのである。

ＨＡＪの「未知・未踏」と「困難」の二つの旗頭からみるならば、今回の登山は、「クーラ・カンリ」という既知の山群の「未踏」の山を「異民族と合同」という「困難」を目指したものといえるだろう。

結果は隊員の持つ力を充分に発揮出来ないまま登山終了となった形ではあるが、そこに至るまでの生じた葛藤と、それを処理した判断があることをも知っておくことが大切だと思う。

とは言え、登頂に失敗したことが報告書発刊の大幅な遅れの最大原因である事も事実である。その責は隊長である私にあることは当然である。

（記：山森）

未踏峰　クーラ・カンリⅡ（7,418ｍ）

－　日中友好合同登山隊1997年の記録　－

発行日　2001年４月22日

発行所　日本ヒマラヤ協会

（The Himalayan Association of Japan）

〒170-0013　東京都豊島区東池袋

４－２－７萬栄ビル501号

TEL 03-3988-8474　FAX 03-3988-8502

編集人　山森欣一／太田康夫